

162. 1-176ㄅ

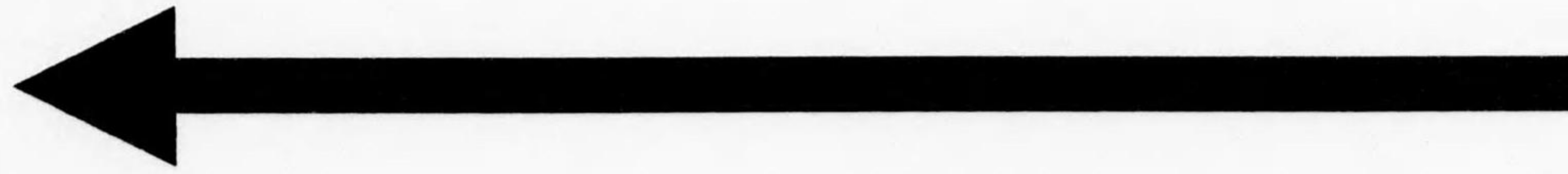


1200500727350

162
6



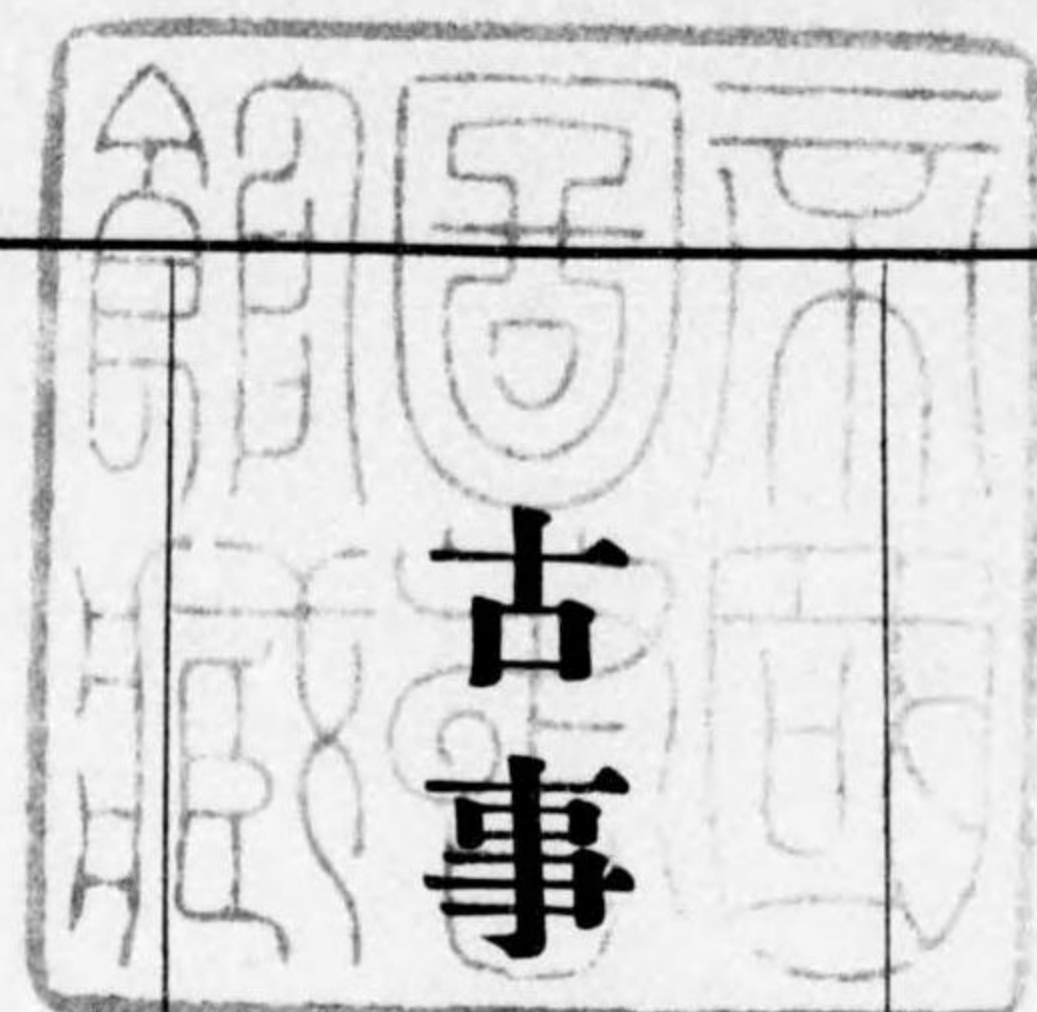
始



A416

7

162.1
1.76

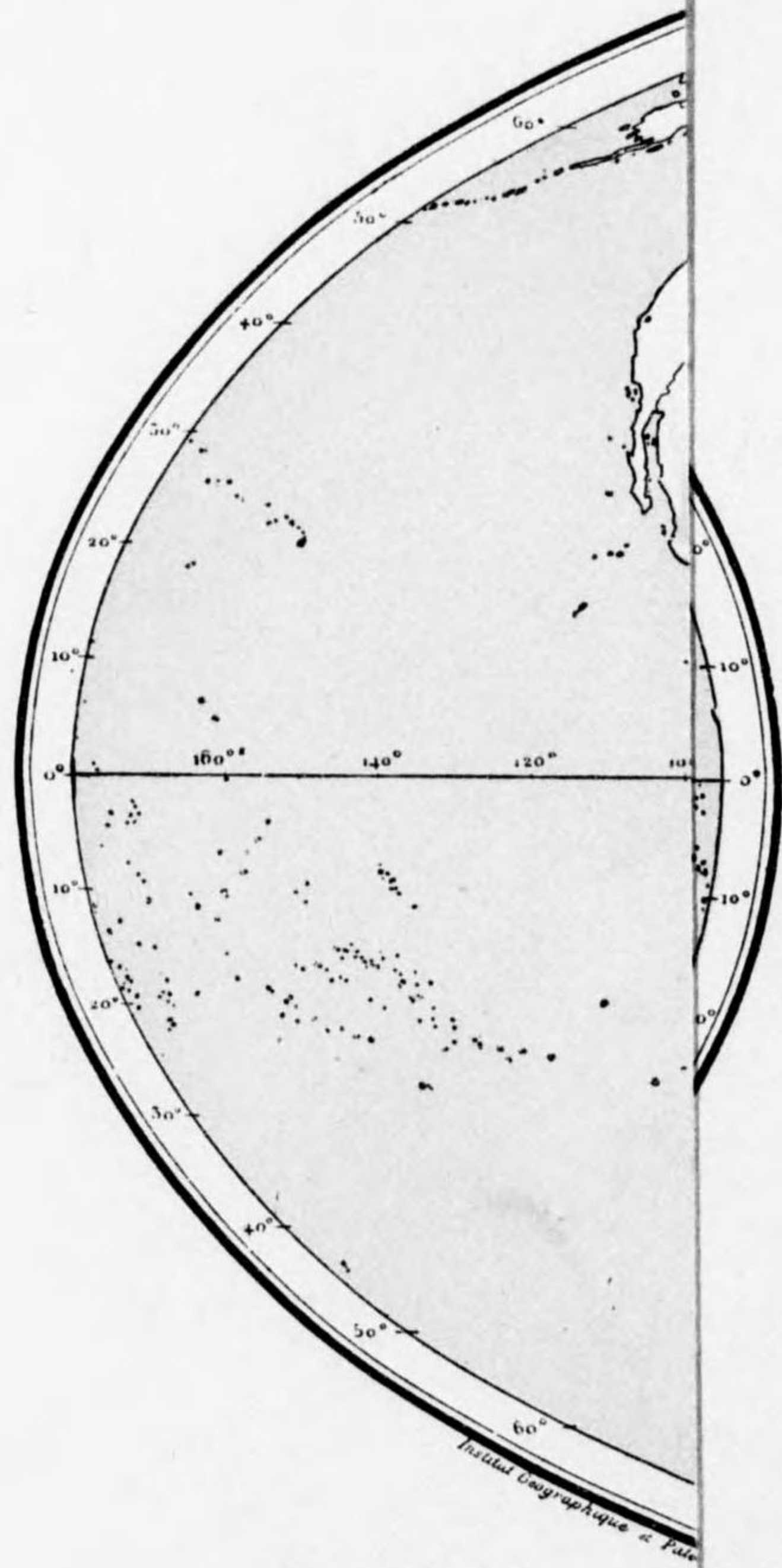


石川三四郎著

古事記神話の新研究

暁書院版

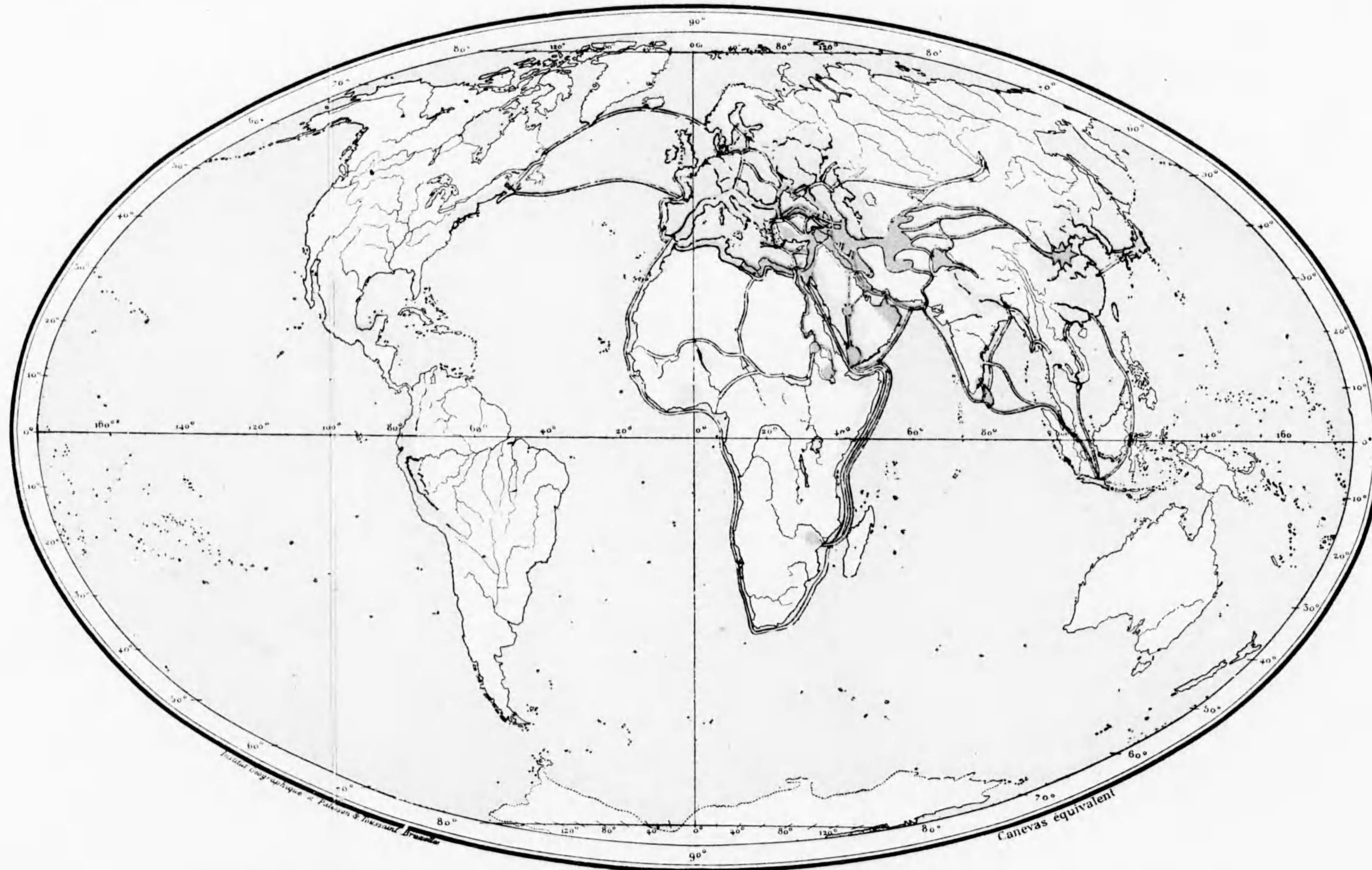




域領び及路の明文

域領び及路の明文の前

域領び及路の遷變明文



域領び及路の明文の前年千七

域領び及路の明文の前年百五千二

域領び及路の明文の前年百五千四

域領び及路の明文の前年百六

A

MES CHERS AMIS

MADAME ET MONSIEUR

PAUL RECLUS

EN TEMOIGNAGE

D'AFFECTUEUSE RECONNAISSANCE

392/83

改訂 第十一版に序す

久しく絶版になつて居た本書が今度全然面目を改めて世に出ることになつたことは著者にとつて此上もない喜びである。先づ以て本書の如き舊物を採上げられた曉書院の加藤氏に感謝を捧げる。

本書は初版を發行してから既に十二年目になる。其間版を重ねる毎に改訂増補を加へた爲めに今日は其容積に於ても初版の二倍になつてゐる。今度第十一版を出すに至つては殆ど各章に改訂の筆が加へられ、製本組方の體裁まで全部面目を新たにした。

記述に於て最も多く増補と修正とを加へた章は第八章岩屋戸事件の社會學的研究と第十八章『ワニ』の傳説とであつた。第八章の『岩屋戸事件の社會學的研究』は今より二十年前、日蓮宗の高鍋天統氏主宰の某雑誌——誌名を忘れたのは残念だ——に掲載したものを其儘復載したので、今日は物足らぬ點が頗る多い。殊に當時の日蓮主義者の雑誌であつたから、論文中、神話に現はれた公産制の記述は全然削除されて了つて

ゐた。そこで是等の諸缺點に増補を加へ且つエンゲルスの意見に従つた誤謬の點にも修正を加へて殆ど全章を書きなはすに至つた。

第十八章『ワニ』の傳説に就いて、東印度諸島に古くから言ひ傳へられてゐる傳説を、二種までも掲載することを得たのは著者にとつて無上の幸福である。殊に徳川義親侯の紹介により、外國語學校教授にしてマレイ語の權威たる朝倉純孝氏が著者のために特にこれをマレイ語から譯して下さつたことは眞とに感謝に堪へない。このマレイの傳説中に昔パレスチンで榮華を極めたソロモン王の名が威光を持つて語られてゐるところは著者の意見に確乎たる裏書を與へるものである。即ちマレイの傳説でソロモンの名が置かれた場所に、日本の傳説は大己貴神——即ち大國主神——をすえたのである。ソロモン王に代はる大ナムチ神は其別名大國主神としては却てアブラハムを代表者として舊約書に出てゐるのである。これによつてカルデヤ及びパレスチンよりの傳説渡來の順序が略ぼ察せられるであらう。

この様な事實を本文に於て詳しく論じ、神代記に現はれた神々を檢討し、批評して、諸神の特徴、性格、系統等を明白にしたかつたのであるが、出版を急いだので本意を遂げ得なかつたことは残念である。諸神の中には古事記の記者の哲學系統に於て構成された名稱も尠からず存在するやうに思はれる。それ等の神々と粗朴な傳説そのもの、神々とは、これを讀み行く内におのづから識別される。またそこに叙述された事件に

しても、自然にその地方色と時代色とが伺はれる。神代記全部に亘つて、それ等の點を鑑別することは研究として極めて重要であり、且つ興味多きことでもある。これも豫て考へてゐたことでありながら、その時間が無かつた爲めに、成し遂げ得なかつたことは残念である。

本書第十版が出されて以來十餘年間、古事記のことは曾て忘れたこともないのに、私の生活は全然それから離れて、他の仕事に没頭せざるを得なかつた。それが爲に前記の諸事項に就いて用意して置くことができず俄かに改版するに當つて、遂にそれを割愛せねばならなくなつた。

併し右の如き研究は些か志ある人には、なし得られることであらうと思ふ。讀書百遍自ら通ずで、讀んで行く内には事件と人物とが髣髴として眼前に實現せられ、地方色も時代色も自ら判明するであらう。私は其研究のために切に有志の士の奮起を希望する。

一九三三年三月廿五日

春雨を聽きつゝ

千歳村舎に於て

著者識

序

本書の目的とする處は、本書の名稱其ものが表明する如く、『古事記神話の新研究』を試みようとするにある。其『新研究』の文字は些か際物的に聞ゆる嫌ひはあるが、本書の内容を表明する爲に『新』の一字を加へたのである。本書を一讀する者は、先づ其主張の甚だ突飛なるにショックを感じるやも知れない。けれども之を精讀翫味して下さるならば、著者が極めて眞面目に此研究に努力しつゝあることを察知せらるゝであらう。

著者は本書の研究に直接に意を注ぎ始めてから、未だ一年にも充たない月日をしか之に費やして居ない。又、其間にも亞弗利加から西班牙、佛蘭西、白耳義、英吉利等を旅行し、更に日本にまでも渡航して來て居る。さればかうした漂浪の生活をして居る處の著者に大きな纏まつた研究の出來ないのは當然である。本書が極めて断片的のものであることは茲に述ぶるまでも無いことである。

一九一九年十二月、私は舊友ポオル・ルクリュ氏と共に、同氏夫人マルグリト氏の病を療養する爲に、三人にて佛國を出發し、モロツコ國の舊都マラケシ市（モロツコ市とも稱せらる）に着いた。寄寓せし家は、ポオル氏令弟アンドレ・ルクリュ氏の宅であつた。宗教史の權威エリイ・ルクリュを父とし、地理學の泰斗エリゼ・ルクリュを叔父とするアンドレ氏は、矢張りかうした種類の夥しい圖書を藏有して居た。私は此家に六ヶ月間滞在して、可なり多くの讀書の時間と、研究の便宜とを得た。忽然として私の注意がメソポタミヤに傾けられたのも此時であつた。從來久しく抱懐したる古事記神話の疑問に對して、電光しなつまの如き明光が投げられたのも此時であつた。それから私は随分諸書を漁つて太古史を研究した。元より此短日月に纏まつた研究の出來やう筈はない。其内に私共はアフリカを出發することゝなつた。如何に手を盡しても便船を得ることが出來ないので、遂に飛行機にて大西洋、西班牙を横斷して佛國に歸へることになつた。幾ら其れが通常の交通機關になつたとて、是は私共の最初の試みである。多少の危険を感じずには居られなかつた。私の生命などは假令此まゝ大西洋の潮底に沈められても餘り惜しい品物では無い。併し、小さいながら一つの発見であると思はるゝ此古事記研究は、此儘に葬りたくはない、と私は考へた。ソコで私は早々としてペンを執つて私の研究の結果を叙述した。そして其れを巴里在住の一友人に送り、若し私に不幸があつたなら、此研究を承繼して呉れと言ひ添へてやつた。其時に送つた原稿が、即ち本書の過半を成して居る。

此の様な筋道で出来たものなれば、私は参考として日本の書籍を有たなかつた。加藤高文といふ人の『古事記讀本』一冊の外は、悉く西洋の書籍のみに依らざるを得なかつた。私が今度日本に歸つて來た原因は、其研究に要する日本や支那の参考書を出来る丈け多く蒐集して佛蘭西に持つて行くことであつた。そして私は此研究の結果を佛文に書いて、彼方で發行して見たいと考へて居た。然るに私は今俄かに渡歐することが出来さうにも無い。食ふ殿の建立に追はるゝ身は悠々として呑氣な研究に没頭しては居られない。不完全にして断片的ではあつても、成るべく早く此の様な不經濟な研究から自分を切り離して、パンとペンとの交換運動に身も心も注がねばならぬ。

若し何人でも、私の採つた方針で、此研究をもつと深く、もつと廣く、もつと正確に、擴張して行きたいと思ふ御方があるならば、私は出来るだけ相談にも與かり助力をも吝まない。私は同志の士の多く出でんことを切望するものである。

大正十年二月十一日

國民祈願團が明治神宮に參集せる日

神田鍛冶町の假寓に於て

石川三四郎識

第五版の増補に就て

第五版を印刷するに當りて、本書は百餘頁の増補を加へることになつた。是れは私の研究の可なり深い進歩を物語るものだと思は信じて居る。始めて本書を上梓する當時には、私の知識は尙ほ漠然として精確確實を缺いて居た。然るに其後少しく研究の歩を進むるに従つて、私は益々自分の研究と發見とに驚異感歎を禁じ得なかつた。

私は一昨年末に再び渡歐することになつて、新らしいドキュメントを手に入れることが出来た。殊に楔形文字のバビロンの古文書は、私の研究に新しい光明を投げた。例へば、古事記神話の創世記がバビロンの創世記に髣髴たること、『黄泉國』の思想が矢張りバビロンの古代に行はれた傳説であること、日本の國風即ち三十一文字の短歌が希臘より由來したといふ西洋學者の所説が誤りにして、太古のバビロン人は既に盛んに同形の讚美歌を口唱したること、等の如き發見は即ち楔形文字の古典が私に與へた主要な賜である。

又、ニニギの命及びホ、デミの命の結婚と全然一致する記事を基督教舊約聖書中に発見したること、ヒツチトに關する多くの研究材料を手に入れて、其文明と天孫民族の文明とが深い關係を存する事實を発見したること、等は私の研究に取つて可なり重大な進歩である。

私の研究法は元より素人の其れである。其道の人から見たらば定めし無謀な企てに見えるであらう。乍併、私の様な素人が而も漂浪生活の間にはそれだけの研究を進めて居るのに、専門の歴史家や古典學者が、今日尙ほ昔ながらの國學の奥殿に居眠をして御座るのは、今の世の中に珍らしい怠慢と言はなければならぬ。私は、世の多くの資力と時間と便宜とドキュメントを有する學者先生達が、速かに其惰眠より覺めて、奮勵一番、此新らしい研究に指を染めて下さることを切望して止まないものである。

一九二三年四月十六日

櫻花爛漫たる瀧野川中里の寓居に於て

石川三四郎識

第六版の増補に就て

本書は昨年春第五版を印刷するに際して百餘頁の増補を加へた。其ことは前掲の序文に記した通りである。然るに今度第六版を印刷するに當つて更に約四十頁の増補を追加した。即ち第五章『海原の國』第六章『高志の國』及び第十三章『大弓(夷)民族』の三章がそれである。

實は今度の増補は最初二百頁位に達する豫定であつたのであるが、何分俗事が輻輳して來たので、落着いて研究して居られなくなつた。それ故、甚だ杜撰な研究ではあるが、右之章を公けにするの無鐵砲を敢てするに止まつた。

本來、此様な研究は金持の有閑人が企つべきことで、吾々の様な其日々々の生活に逐はれて居るもの、携はるべき仕事では無い。二三週間も此不生産的な研究に没頭すれば忽ち米櫃が空になる様な吾々風情の志すべき道では無い。モウ好い加減の處で足を洗ひたいものだ。

大正十三年六月十九日

梅雨當に到らんとする頃

瀧野川中里の寓にて

石川三四郎識

古事記神話の新研究 目次

總論.....一

第一章 文明の移住.....一

- 一、海陸の兩路.....二、交通の頻繁.....三、天孫民族の文明.....四、兩民族の旅路.....
- 五、古事記編纂の時代

第二章 バビロン及びヒツチトと日本文明.....一七

- 一、緒言.....二、ヒツチト民族.....三、寶鏡と太陽圓盤.....四、小亞細亞のクマヌ神社.....
-五、ヒツチトの遺物.....六、風俗の近似.....七、穂々手見命とイサク.....八、井と玉壺と高田下田.....九、縣主と國造とヤマト.....十、三十一文字の由來.....十一、ワニの意義.....十二、陶棺及び大黒天.....十三、樂器.....十四、神輿の起原.....十五、佛教の起原.....十六、更科そば

目次

一

第三章 三大創世記の類似

五六

- 一、カルデア神話と古事記……二、創世記の結構……三、古事記神話……四、カルデア神話……五、カルデアの八百萬神……六、舊約聖書の創世記……七、洪水の傳説……八、世界創造の順序……九、古事記の創造説……十、八尋殿の交合

第四章 黄泉國の傳説

七六

- 一、古事記の記事……二、久米邦武氏の所説……三、カルデア神話……四、イシュタル女神……五、女神と西方亞細亞……六、アシラと柱……七、地獄思想の傳播

第五章 四つの結婚の類似

八六

- 一、四つの結婚の類似……二、穂々手見命……三、山サチと海サチ……四、ニサウとヤコブ……五、ヤコブの結婚……六、ニニギの命の結婚……七、穂々手見命及びイサクの結婚……八、熱帯地の出來事……九、高田下田

第六章 日本短歌の起原

一〇三

- 一、希臘の三十一文字……二、バビロンの三十一文字

第七章 岩屋戸會議の神話學的研究

一〇七

- 一、冬と夜との徵象……二、諸神話の類似……三、オシリスと天照大御神……四、鷄鳴の傳説……五、冬の神話的意義

第八章 岩屋戸會議の社會學的研究

一一一

- 一、萬機公論に決す……二、比較研究……三、最古最大の臨時議會……四、皇太神と須佐之男命……五、萬邦の同型……六、母系組織の社會……七、母系より父系へ……八、支那の母系制……九、母系制の文化的地位……十、母系制の多様性……十一、父君認定農業革命……十二、國會議事録……十三、太古の國會……十四、イロコアの議會……十五、イロコア聯合議會……十六、天の岩戸の會議……十七、共產社會の證……十八、特權的分業制

第九章 太古西部亞細亞の形勢

一二一

第十章 古事記神話の地理

一四六

- 一、緒言……二、高天原……三、夜の食國……四、葦原の中國……五、出雲の國……六

根之堅洲國及び高志國……七、高千穂……八、笠沙之御前……九、筑紫

第十一章 海原の國……………一七三

一、古事記と書紀……二、久米博士の説……三、ペルシャ灣頭の『海の國』……四、須佐之男命の叛逆……五、シャルル・ジャン氏の説……六、レオナアド・キング氏の説……七、暴動の事實は日本に行はれず

第十二章 高志の國……………一八二

一、古事記神話の高志……二、八俣蛇の記事……三、久米博士の説……四、注意すべき點……五、興味ある歴史事實……六、大國主神の乘馬……七、コセ人は乘馬民族

第十三章 天孫民族……………一九〇

一、ヒツチト民族……二、天忍穗耳命……三、天岩屋戸生活……四、ハラシ住民……五、八咫鳥と兩頭鷲……六、天孫降下の道筋……七、『柱』の語……八、天孫と猿田彦神との關係……九、猿田彦神はカルデヤ人也……十、建御雷之神及び思金神

第十四章 出雲民族……………二二五

一、天神と國神……二、須佐之男命……三、刺國とシユス國……四、大國主神……五、大國主神とアブラハム……六、大國主神とオルカム祖神

第十五章 大弓(夷)民族……………二二六

一、天照大御神の弓……二、弓の重大使命……三、東夷は大弓民族……四、カルデヤの弓……五、弓の移送者は何民族か

第十六章 バク(貊)民族の東遷……………二三四

一、天つ神と國つ神……二、交通の跡……三、中亞の地勢……四、土地の變遷……五、『玉の道』『絹の道』……六、バク民族の移住……七、貊はバクトリヤン也……八、コマの語源……九、熊野大神

第十七章 劍と鏡と勾玉……………二四九

一、安の河の劍と玉……二、性器崇拜……三、生殖器崇拜と諸宗教……四、クリユゼスアンサタと劍鏡……五、舊約列王紀の記事

第十八章 ワニの傳説……………二五九

古事記神話の新研究

改訂増補版

目次

六

一、ワニは日本に生息せず……二、マレイの傳説……三、『ワニ』の語源……四、ワニの任務……五、トータムとしてのワニ

第十九章 『天』及び『神』……………二七三

一、『天』の文字……二、『神』の文字

第二十章 ロアジ教授の意見……………二七七

一、著者の希望……二、著者の覺書及びその原文……三、ルクリュ氏の添書及びその原文……四、ロアジ教授の返書及びその原文……五、洪水及び移住の記事

第二十一章 結 論……………二九六

目次終

論

碩學エリゼ・ルクリユ氏は其大著『地人論』(『l'Homme et la Terre』)の初めに於て、地理と歴史との關係を記して曰く、

『地理は空間上の歴史にして、歴史は時間上の地理なり。』

と。古事記の如き太古に係る茫漠たる記事にありても、若し之を精讀靜誦する時は、其間自ら地理的環境の匂と光とを感得することが出来る。生ける歴史を學ばんとする者には、アカデミックな考證究査は之を後まはしにして、先づ其傳説の上に輝やける色彩と、説話の上に滂礫する香氣とを感得して直下に其地理的及び社會的環境を了解することが、最も重要な條件である。考證は歴史の基礎的生命を握つた後に起るべき事業で無くてはならぬ。殊に古事記の如く茫乎たる往古の記事に於て其然るを見る。

須佐之男命の『八雲立つ』の一首を讀む者は、それが單に戀歌であるのみならず、實に雲霧崇拜の精神が

其半面に輝いて居ることに気が付くであらう。天照大御神の石屋戸閉居事件を読む者は、それが單に暗夜を描けるのみならず、實に太陽の光線の薄弱なる『冬』を徴象したるものなることを感ぜねばなるまい。

天津諸神が移住の目的地、約束の地と定めたる豊葦原の中ツ國或は水穗國は決して日本の如き山岳小島國に非ざること、是れ古事記を一讀する者の直感せざるを得ざる處であらう。若し夫れ古事記神話中に吾等の屢々遭遇する處の『鰐魚』の傳説に至つては、それが日本の事でないことを知るべく必ずしも直感の鋭敏を要せず、又考證の該博を待たない。是れ私が古事記神話の發生地として眼を西方亞細亞メソポタミヤ地方に注いだ所以である。

果せるかな、創世紀の初めから天孫降下の狀況、豊葦原の中ツ國の治蹟まで、メソポタミヤ地方に於ける傳説や史實が殆んどその大部分を占めてゐることが認められたのである。即ち第一に吾々の心を動かすものは、カルデア神話、ヘブリユウ神話、及び古事記神話に述べられた創世紀が甚だ多くの類似點を有し、殊に古事記神代記は基督教神話よりも遙かにカルデア神話に近似したる趣を持つてゐることである。併しまた、カルデア神話に存せずして基督教神話に傳へられた事實が却て古事記神話中の事實と精確に一致する點の尠なくないのも不思議なほどである。

そこで私は、先づ三大神話中の創世紀から比較研究を始むべきであるが、その前に於て、西方亞細亞の文

明が夙に極東に向つて移植せられた事情の大體を説明し、次いでバビロン及びヒツチト——著者はこれを天孫民族の祖先ではないかと想像する——と日本民族との歴史的または傳説的關係を略序して置くことが、一般讀者に對して便利であると考へる。蓋し古事記神代記の諸々の傳説が多くその源をメソポタミヤ地方及び其周圍に發したと考へる私の研究の順序としては、先づこの文明東漸の状態を説くことが必要なのである。

故に私は第一章に於て『文明の移住』を序述し、第二章に於て『バビロン及びヒツチトと日本古代文明』の關係を研究する。

先づ、かうした極めて簡単な基礎的知識を用意した後、古事記神話の中心となれる諸事實、諸傳説を西方アジアの二大神話に比較すると、太古の吾々の祖先の生活と氣分とが自ら了解されるであらう。即ち第三章の『三大創世紀の類似』から、第八章『岩屋戸會議の社會學的研究』に至る六章は神代記に現はれた思想及び事實を或は神話學的に、或は社會學的に比較研究したものである。

第九章以下の諸研究は神代記に存する記事の中で歴史的事實と見做されるものを、地理學的及び歴史學的に検討したものである。これは従來の國學者からは最も突飛に見へるであらうと思はれる主張である。併しこれ等の章に記する研究こそ著者が最初に氣付いたところで、著者をして本書の研究を思ひ立たせた發端となつたものである。

地理的研究は創世記の前に置くべきであつたかも知れぬが——第十版までの本書はさうした順序を採つ、——古事記の順序に従ひ、創世記を先きにし、次いで天孫降下の歴史的研究にうつることにした。その結果として地理的研究を第九章以下に置いた次第である。

第九章の『太古西部亞細亞の形勢』は、第十章の豫備的説明とも言ふべきで、即ち太古バビロニア周圍地方に於ける人種分布の形勢を管見したものである。

第十章に於て、私は、『古事記神話の地理』に就て略叙する。古事記に記されたる諸地名は之を今日の日本の地理に當てはめると、随分不可解の點が多い。私の本章に記する處も、元より之を正確にして覆へし得ぬものとは言へない。あの古事記神話の記事は少くとも幾千年かの間の記憶が無造作に一纏めにされてゐるのであらうから、之を今日より明白に現在の地理に充當し得ないことは勿論である。

第十一章『海原の國』及び第十二章『高志の國』は本來右第十章に入るべきであるのを、少しく長大な説明となりたるを以て、別に章を分けたまでである。讀者恐らくはこの第十一章・第十二章によつて、『海原』が單に海のかなたの國だとか、新羅だとか言ふ様な曖昧なもので無いことを明白に知ることが出来るであらう。又第十二章に依て、高志が決して日本の『越』で無いことも略ぼ合點が行くであらう。

以上何れも突飛に見へるであらうが、併し新説は何時でも突飛なものである。かうした冒險が無くては何

事にも進歩發展の道は開けない。第十五章『大弓(夷)民族』及び第十六章の『バク(貊)民族の東遷』は、即ち日本の民族が或は南方支那沿岸から渡來し、或は中央亞細亞を経て北方より極東にまで移住して來た有様を略述したものである。是は第一章及び第二章の文明の移住の補助的研究とも見ることが出来る。

第十七章の『劍と鏡と勾玉』は是れ第四章の附屬とも見るべきものである。換言すれば、劍と鏡と勾玉とに神話學的解釋を施したものに過ぎない。

第十八章の『ワニの傳説』及び第十九章の『天及び神』は矢張り前述諸章の記事と同じく此等の諸事項に對して全然新たな研究を施したものである。ワニの傳説も『天』の文字や『神』の文字も、古事記中には頗る重要な役目を勤めて居る事實或は言語なれば、特に私一流の解釋を發表したのである。最後の『ロアシ教授の意見』は、巴里大學教授にして、神話學の世界的權威たるロ翁が、私の主張に對して與へられたる批評と勸告とを紹介せんが爲めの一章である。

ロアシ教授は私に勸告して、「之を公表する以前に先づ自ら自説を批評せよ、」と言はれた。私は本書に主張する假定説が既に完璧を成せりとは考へて居ない。私は其尙ほ甚だ粗笨なることを知つて居る。併し私の様な安住の地を持たない者は、何時如何にして何處の涯で果てるやら分らない。この様な不安の生活を送る私としては、假令斷片的にもせよ、未成品にもせよ、機會ある毎に之を世に問ふことが、寧ろ世の中に對して

忠實な仕方であると思ふ。

私は西洋の歴史資料によりて古事記神話の研究を試みた。併し私は考へる。これからは我が古事記のドキユメントによりて世界太古史の研究に些か小さな而も新らしい光明を投ずる事が出来はしないかと。私が我天孫民族と同族なりと信ずる彼のヒツチト人種の遺文書は、西洋の學者の未だ解釋し得ぬ祕密物である。此世界の智識から密封せられたる歴史學上の寶庫が若し吾々日本人の頭腦によりて開かれたなら、それこそ世界の學界に對して一大光明を投ずるもので、日本が數百萬噸の軍艦を有するよりも其光榮は勝るのである。

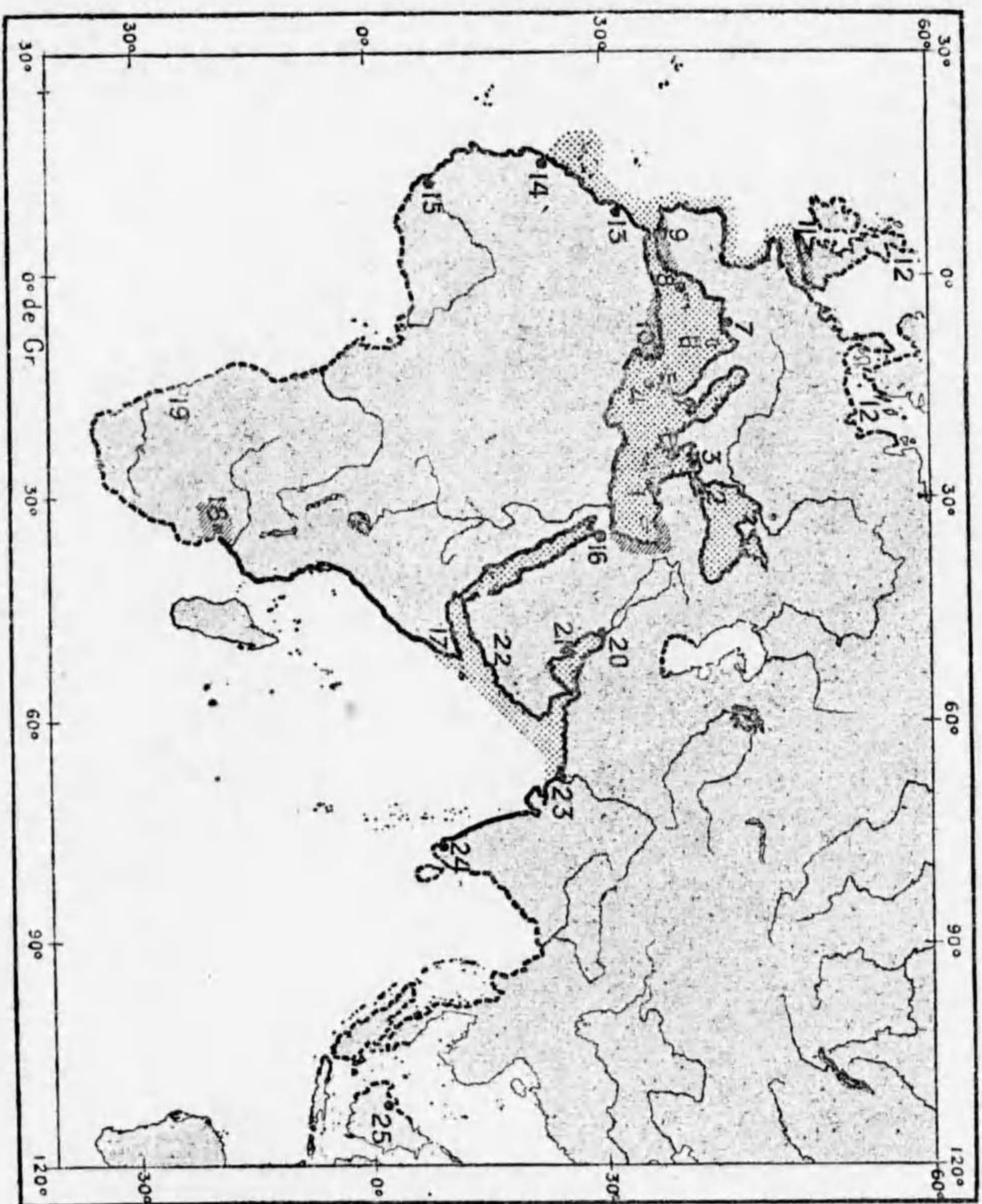
若し私に金と時とが有るならば、私は彼の世界文明の發源地、古事記神話の發生地と信じられる處のメソポタミヤからアラビヤ、パレスチン、シリヤの諸地方、更に轉じてはペルシヤから中央亞細亞一體を旅行して見たい。そして太古史の遺蹟に就いて詳しく踏査して見たい。或は今日まで西洋人によつて傳へられたとは異つた新しい見方が試みられるかも知れない。勿論今日此等の地方に旅行したとて、さして珍らしい古蹟が見付かるものとは思はれぬが、單に其土地に接し、其空氣を呼吸し、其風光を見た丈けでも、太古の歴史を直感することが出来る。蓋し其自然そのものは實に生ける學校、生ける圖書館だからである。萬卷の書を讀むとも得られない新鮮潑瀾たる記録が此大自然の中には開展して居るのである。生きた歴史は、生きた研究によつて、生きた眼にのみ映するものである。

第一章 文明の移住

一、海陸の兩路

今より七千年以前に、チグリス及びユウフラテス兩河の流域、ナイル河流域、シナイ半島、アラビヤのオマン半島地方及びバベルマンデブ地方に精花を開きたる世界最古の文明は、今より四千五百年前に、印度洋の沿岸を傳うてセイロンに移住し、更にスマトラ海峽を経てジャワに根を下した。又、是れと年代を同じうして此文明は波斯高原、中央亞細亞高原に一大勢力を成して進み來り、或はチベットに入り、或はヅンガリヤ及びシベリヤを経て支那黄河の沿岸に根を下した。

今より三千年の往昔、猶太王ソロモンはフェニシヤ、チルの王ヒラムと協同してオオフィルの遠征を企てた。其オオフィルは紅海を出でて東方に在りと言ひ傳へられて居るのを見ると、多分それは印度セイロン島



第一圖—フエニシヤ人が航行した海・知悉せる沿岸及び碇泊所

第一圖備考

- 1、ロド
- 2、シヤルセドニヤ
- 3、クヌス(金鏡)
- 4、ナルタ
- 5、シシリイ
- 6、サルヂニヤ
- 7、アルセイユ
- 8、ビチユス
- 9、カヂクス
- 10、ウチツク(ビゼルト?)及びカルターヂ
- 11、カシテリド島(シリイ)—コルツラール及びテボソシヤ一の錫鏡
- 12、アムアル海岸—チモール(シモツトラソフ?)
- 13、サロエヌ岬(カシタシ岬)
- 14、セルヌ(リオ・ド・オロ)ハノの植民地
- 15、シエルフルツク・サウソフ(シエラ・レオン)—約二千五百二十年前にセルヌに航行した時に到達した最極點)
- 16、エゼオンジエニール
- 17、アロワト岬(グアルダライ)
- 18、ソフアラ及び背後の國(金鏡)
- 19、ネカオ(埃及王)の航海—或る著作家は、ヘロドタスの書に詳細の記事を缺くといふ理由で疑問視する。
- 20、チロス(チルマン、チルソソ)
- 21、バイレイン
- 22、ハドラモイ(それは南西の貿易風に放任してマラバール海岸に到るべく、この海岸を去つた最初の航海者の名として知らる)
- 23、アアヒラ
- 24、ムジリス(ヒラマの遠征に於て儘かに到達した地點)(オツペルト)
- 25、ボルネオのレジンヤング

文明の移住

の邊であつたらしく、後には一般に東方の金玉の國といふ意味になつた、と史家は言ふ。ソロモン王の名は東印度マレイ人の社會に古く言ひ傳へられた『ワニ』の傳説中にも現はれてゐるほどである。當時フェニシヤ人の航海術は既に非常なる進歩を遂げ、西はジブラルター海峡を過つて北方英國に通商し、東はスマトラ海峡を突破して遠くボルネオに貿易を開き、同地方に其代理店を設置したる形跡までもある。

また、フェニシヤ人は單に貿易のために航海したばかりでなく、或る時は數箇の大家族が一團となつて東方金玉の國、オーフィルに移住したといふ。(註)

(註) Elysée Reclus "l'Homme et la Terre" 第二卷五四—五六頁

今日の如き大船もなかつた古代に於て、遠い航海はちよつと不可能に思へるかも知れないが、漢の桓帝の時代には大秦(ローマ)のアントン帝(マーカス・オレリアス)の大使と稱するものが、海路印度支那の東京海岸に來り、更に北上して洛陽にまで至つて皇帝に謁してゐる。史家の想像では、それは恐らく大使ではなく、當時絹物の産業が盛んになつたシリヤ—シリヤはヒツチト民族の地である——の商人達であつたらしい。彼等は從來バルチャ(安息)國を介して支那人と交易したのであるが、國際間の紛争のために妨げられ、直接貿易を求めて海上を渡來したものであらう。爾來西洋の商船は屢々支那海に往復してゐる。また右の如き事實が歴史に現はれるまでには、既に久しく、隠れた事實が多く續いたに相違ない。(註)

(註) René Grousset "Histoire de l'Asie" 第二卷一九三頁

二、交通の頻繁

東部亞細亞と地中海との交通は、既に盛んに開けた。埃及トレミイ王朝に當り、世界の最高學府たりしアレキサンドリヤの學堂には、既に印度の佛僧が招聘せられて此處に佛陀の福音を傳へた。又、當時、支那は既に絹の國として埃及人に知られしのみならず、支那絹は當時の埃及人に頗る珍重せられ、從て重要な貿易品となつて居た。唯だ其絹の素質は頗る佳良なれども其染色術は未だ埃及人の精巧なるに及ばずと評判せられた。羅馬のシーザーが佛蘭西に出征する前、佛敎は既に同國西南方ランゲドックに傳へられたらしい。其れは同ランゲドック地方に於て發掘せられたる佛像によりて證明せられるに至つたのである。

東西兩洋の交通は既に斯くの如く開かれた。ジャワに於ては、既に久しき以前よりカルデア文明を吸收し、更に印度の文明を合せ入れて、今より三千年前に盛大なる特殊文明を打開した。而して其文明は、或はボルネオ、フィリッピン、臺灣、琉球等の諸島を傳うて、或は支那沿岸を傳うて、日本の九州南部及び西部に到達した。又、バクトリヤン(即ち貊種族)の移住によりて支那の黃河流域に開化したる文明は、或は朝鮮を

經、或は海を渡りて日本に上陸した。(註)

(註) "Terrien de la Couperie" 及び Reclus "L'Homme et la Terre." 参照

而してこの日本への文明移住の運動は、少くとも今より二千餘年以前に始まつて居たと信ずることが出来る。支那及び朝鮮との交通の事實が、歴史の上に現はるゝまでには、既に隠れたる準備的往復の爲めに多くの年月が費やされたに相違ない。

三、天孫民族の文明

かく文明移住の跡を尋ねると、其旅路は極めて遼遠、其費やされし時間は極めて長久である。カルデヤ或はアラビヤの地を發して、或は印度及び太平洋諸島を經過し、或はシベリヤ、蒙古及び支那を通過する間には、其初發の文明は道々に變化し或は又た紛亂した。殊に佛教が渡來し、支那文學が傳來せる以前に於て、日本に根を下したる文明は、其本源が假令カルデヤ或はアラビヤより流出したりとするも、日本に達する道中に於て既に頗る其色調を失つて居たであらう。併し、彼の天孫民族が日本に移植したる文明が、其本源の色調と精練とを失つて居たにもせよ、兎に角、當時、日本に土着せる民族の文明に比すれば、頗る進歩して

居たに相違無い。社會組織の如きも、古事記神話に現はれたるものは決して原始時代の其れでは無い。天孫民族も出雲民族も、其既に頗る開化せる社會に生活して居たのである。外來の天孫民族が日本を統一するに至つた最大の理由は即ち茲にあると思ふ。

四、兩民族の旅路

文明の移住は必ずしも民族の移住を意味しない。勿論、多くの場合に於て、民族の移住と共に文明の傳播せらるゝが常態なれども、文明の移植は民族の移住を待たずして行はれる。私は古事記に現はれたる天孫民族は彼のユウフラテス河の上流、カバドシヤ高地に巖穴生活を營みたるヒツチト人種であると信ずるものであるが、併し此民族が日本に到達するまでには、多くの他の人種、即ちセミチツク人種、マレイ人種、ポリネシヤ人、漢民族等の血を混入して來たらうと思ふ。そして其久しい遠い且つ不安定の旅行の間には、往昔の文明も生活も随分忘れられ、變ぜられ、そして新たな文明と習慣とを吸収して來たらうと思ふ。バウトリヤ人は支那に移住して其最初の文明を開いたが、彼等は其以前に於て既に日本に移住したと西洋の學者は言ふ。其移住者は即ち古事記に現はれたる出雲民族ではあるまいか。支那の古書に見ゆる貊或は獫狁は即ちバ

クトリヤン(單にバクとも稱す)種族のことであらう。漢代に當りては、支那北方、シベリヤ、及び韓國にまでその姿を現はしたれば、此一族が更に海を渡りて我が山陰地方に上陸せることは想像が出来る。

私は茲に日本民族の人的研究を試みようとするのではない。唯だ古事記神話の研究に入るに先ちて、其準備的觀念を用意する爲めに特に必要なる説明を付するに過ぎない。日本の歴史開闢期に際して、本島大半の地を占領して居た民族はアイヌだと稱せられる。そして其アイヌは白人種であるかも知れぬと言ふ學者もある。それは兎も角も、此アイヌ人が其皮膚の色、顔面相貌、及び臭氣に於て露西亞のムジクに酷似するとは多くの學者の一致する處の説である。果して然らば、日本のアイヌは天孫民族が日本に來る久しい以前に於て、既に何れの地點かを経てシベリヤと交通して居た様にも思はれる。されば此アイヌ民族は、或は歴史以前に於て既に出雲民族と交通して居たかも知れなう。

五、古事記編纂時代

吾が古事記の編纂せられた時代は、其古事記に書かれたる傳説神話の時代とは非常に多くの年代を隔て、居ると思ふ。神武天皇即位の時からも、既に千三百七十餘年を隔て、居るのを見れば(本年を紀元二千五百九

十三年と假定して)神代記の時代は更に多くの年代を數へねばならぬ。從て此多くの世紀を重ねる間には、其種々なる地方と、其種々なる時代とが、種々に混入して傳へられたに相違無い。それは古事記の神代記を一讀すれば、直ちに發見し得る事實である。勿論支那文字(古事記に採用せられた文字)が傳來する以前に於て、天孫民族は自分の特別の文字を有したであらうが、併し、それは尙ほ極めて幼稚なる發達状態に在つたであらう。從て之に依て傳へられたる歴史が甚だ無難粗笨なりしことは勿論之を想像し得る。

古事記の書かれたる時代には、支那文明と佛教とが盛んに輸入せられて居た。今日の日本人が何も彼も西洋に學び、洋行者と言へば新智識、學者と考へ、西洋人と云へば偉いと考へる如く、當時の日本人も亦、支那、朝鮮から頻りに其文物を輸入して居た。そして今日の日本人が或は英文を綴り或は日本語を羅馬字で書くことを獎勵する様に、當時の日本人も競うて支那文を書き、或は支那文字を用ゐて日本語を書いた。古事記の如きも實に支那文字を以て日本語を書き現はしたるもの、一例である。此様な時代であれば、古事記の中に、或は支那や印度の思想、傳説が混入して居るかも知れない。併し其支那や印度の思想や傳説といふのも、本源をたゞせば、其多くはカルデヤから流を發して居るのである。かう考へて見ると、日本文明の起源を研究するには矢張り眼をカルデヤ文明にまで注がねばならぬ。從て古事記神話の研究も、また唯だ此理由よりするも、カルデヤの太古史及び傳説より研究の歩を進めねばならぬ。但し私がカルデヤやヘブリユウの

古史傳説に意を注ぐに至つたのは、元より他の理由からであつた。

天地所_ニ以能長且久_一者
以_三其不_ニ自生_一故能長生

第二章 バビロン及びヒツチトと日本文明

一、緒言

以下數章に叙述する處によりて、讀者は我古事記の神話と、太古バビロンの神話とが頗る近似して居ることの明證を得るであらう。更に又、バビロンの神話から多くの材料を取つたと稱せられるヘブリユウ神話中にも、古事記神話と符節を合すほど一致する點の多きことを了解するであらう。そして私は、此バビロンの神話やヘブリユウの神話を日本に傳へたものは恐らくヒツチト民族であらう、ヒツチト民族は即ち我が天孫民族であらう、と信ずる者である。併しヒツチト民族のことに就ては別に第十三章に於て大體の説明を試みる積りであるから茲には唯だ其豫備として簡単な記事だけに留めて置く。即ち、専らバビロン及びヒツチトの文明の日本に傳へられた諸點に就いて略叙して置く。

また私は讀者がヒツチト人種の歴史に就いては大體御承知のことと思ふが故に、唯、叙述の順序として同民族の歴史上の地位に就いて少しばかり説明して置く。

二、ヒツチト民族

ヒツチト民族といふのは、今より三千五百餘年前にユウフラテスの谿流、カバドシヤ高原、及びシリヤの地を占領して、東方バビロンの文明を探り、南方埃及の大帝國に對抗し、西方希臘人と接觸して之にバビロン文明を傳へる役目を勤めた民族である。ヒツチト民族はカルデア文明を攝取したけれども、能くそれを消化して自己獨特の文明を建設した。ヒツチト民族はトロイの戦争にも加はつて居る。

舊約聖書に『主エホバ、エルサレムに斯く言ひたまふ、汝の起原、汝の誕生はカナンの地なり。汝の父はアモリ人、汝の母は、ヘテ（ヒツチト）なり』(註)とあれば、ヒツチト民族はエルサレム神殿の建設者でもあつたのだ。

(註) 以西結書十六章三節

舊約聖書の記事を精讀すればヒツチトの事實は諸方に散見する。彼等はアブラハムの時代にはパレスチン

殊にヘアロン地方に住居して之を支配して居る。(註)

(註) 創世記十章一五、一六節

エソウは其二人の妻をヒツチトから娶り(註二)、出埃及、約書亞、士師の時代にはカナンの地を占領したる準信徒中に數へられ(註二)、ダビデ王は其友人中(註三)にも其僕の中(註四)にもヒツチトを有し、ソロモンの宮妃中にも數人のヒツチトがあつた。(註五) 然るにソロモンはヒツチトの子孫をアモリ其他の民族と同様に奴隸にしてつた。(註六)

(註一) 創世記二十六章三四節

(註二) 出埃及記三章八、一七節、同十三章五節、同二十三章二三節、同三十三章二節、同三十四章二節、申命記七章一節、同二十章一七節、約書亞記三章一〇節、同九章一節、同十一章三節、同二十四章一一節、士師記三章五節。

(註三) 撒母耳前書二十六章六節

(註四) 同後書十一章三節、同二十三章三九節

(註五) 列王上十一章一節

(註六) 列王上九章二〇節

以上は主として南方のヒツチトであるが、北方のヒツチトは當時強勢で、ソロモンと對立して通商して居

バビロン及びヒツチトと日本文明

り(註一)、そしてヒツチトが來るといふ風聞だけでダマの強力な王様も遁走して了つたといふ程に恐れられて居た。(註二)

(註一) 列王上十章二八、二九節、歷代上一章一六、一七節

(註二) 列王下七章六節

この外、ヒツチトに關するドキュメントは埃及やアツシリヤの記録に發見されており、又ヒツチト自身も遺した種々な物件がある。けれどもそれを列擧することは今の研究の主旨から遠ざかるが故に、茲には之を省略する。そして直ちに本書本來の研究に進む。

私が先般本書を著した時は、まだ僅かに研究の方針を立てたばかりのことで、從て同書には唯だ其方針だけを示したに過ぎない。それから今日までも心ばかりは燥やつても、研究は餘り進んで居ない。併し、それでも其後に氣の付いたことが可なり多くなつたので増補の數章を書く氣にもなつたのである。

私は第十三章中にも記す通り、天孫民族がヒツチトであるといふ證據として、天忍穗耳命が『正勝吾勝勝速日』の名を自ら冠り、『吾れカチカチ』と名乗つたのは、

(第一) その『カチ、カチ』民族即ちヒツチトたる所以であること。

(第二) ヒツチトの岩屋生活は、天孫民族の天の岩屋戸に酷似すること。

(第三) 高天原は嶽間の原で、ユウフラテスの上流ハランの地でヒツチトが勇を揮つた處であること。

(第四) 天孫民族の八咫鳥はヒツチトの遺像兩頭鷲に似て居ること。

(第五) 天孫民族が其希望の地たる葦原の中ツ國に達し得ずして、却て筑紫の高千穂に降下したといふ歴史は、ヒツチトがメソポタミヤに行かないで、南下してパレスチンを占領した事蹟に符合するが、日本の地理的形勢には應合しないこと。

(第六) 古事記が諸神を呼ぶに『柱』の語を以てするのはヒツチト人が『柱』形を以つて國王を表徴するのと同意義を爲すこと。

(第七) 天孫民族の道案内をした猿田彦命はカルデヤ人なること。

(第八) 彦はパレスチンの遊牧王或は首長の稱號たる『ヒク』といふ文字から出たこと。等を數へたいと思ふ。

三、寶鏡と太陽圓盤

ヒツチトに關する幾冊かの書を読むで見ると、古事記の記事と參照して極めて興味ある事實が少くない。

ヒツチト研究の専門學者として知られたセイヌ博士の説によると、ヒツチト民族の宗教的禮拜の最高對像は太陽盤であつたと云ふ。埃及王アメンホフヒス三世は、自分の助力者としてヒツチト王と結婚的同盟を結ぶの必要を感じた。然るに『其結婚は埃及の爲めには、おかしな結果を齎らした。新皇后は自分と共に誓に其名稱や習慣を持参したばかりで無く、自分の信仰まで持つて來た。彼女はテーベスのアモンや其他の埃及諸神を禮拜することを拒んで、吾祖父の宗教を固執した。そして其禮拜の最高對像は太陽盤であつた。此種の禮拜が北部シリヤに流行したことはヒツチト自身の諸遺像にも證據だてられる。ユウフラテスのビレヂクから英國博物館に持ち來たされた王像の上部にも、羽を付けた太陽圓形が表はされて居る』(註)

(註) Sayce "The Hittites" 一八頁

八咫の鏡が三種の神器の一つであつて神代より最も貴重な寶物であつたことは誰も知つて居る處である。古事記に、天照大神が御孫ニギハヤヒの命を葦原の中つ國に遣さうとして『この鏡は専ら我が御魂として、あが御前を拜くがごと、イツキまつり給へ』と詔り給うたと書いてある。が、其鏡とヒツチトの太陽圓盤とは起原を同じうすると言へないか。

四、小亞細亞のクマヌ神社

其上に、ヒツチト民族が漸く發達して來た時の最高神は女神であつた。ヒツチトが未だバビロンやアツシリヤ人と深く交際しなかつた時代には『ステク』といふ男神が有勢であつたが、後には『母神』が有勢になつて來た。カパドシヤはヒツチト民族發祥の地と見做されるが、其カパドシヤの首都クマヌ(或はコマナとも發音する)は即ち其女神『マ』を以て守護神とし、クマヌは又ヒツチト民族の神都とせられた。(註一)

日本の熊野神社は髓か須佐之男命を奉祭したものだと思ふが、ヒツチトのクマヌ神社は女神を本尊とするのであつた。そして此ヒツチトの母神『マ』に奉仕する尼僧達をアマゾンと稱した。是に就いてセイヌ博士は曰く、『アマゾンとは是迄、女子戰士を以て成立した一國家と想像され、その本據はカバドキヤ——即ちカパドシヤ(石川註)——のテルモードンの岸にあるとせられた。……併し此アマゾンは本來彼の亞細亞の女神の尼僧達に過ぎない。此女神の宗教はヒツチト軍の前進に伴つて弘通したものである。此女神は、數多き武装尼僧や去勢僧によりて奉仕せられたが、其武装尼僧の數はカバドキヤのコマナのみにも六千人を下らなかつた。……カバドキヤより起つて小亞細亞を征服したるアマゾンの「持鎗軍」は、彼の楯と弓とを持つて光

榮ある舞踊をするヒツチト尼僧に外ならない。』(註二)と。

此尼僧は武勇にして能く強弓を引き、其弓術の妨げとなる右方の乳房を切り落した、と傳へらる。此婦人達の髮飾を其の遺像によりて見ると丁度繪にある神功皇后に髣髴して居る。

(註一) Sayce 'The Hittites' 一一四頁

(註二) 同書七八―七九頁

五、ヒツチトの遺物

ヒツチト女神に奉仕する尼僧のアマゾンの舞踊と連想されるのは天の岩屋戸會議に於ける天のウズメのダンスである。西洋の學者は天のウズメのダンスを見ると直ちに希臘太古のダンスを思ふと言つて居る。(註)

(註) Munsterberg 'Influences occidentales dans l'art de l'extreme orient' 一六頁

希臘でも、羅馬でも古代のダンスは決して悲劇的のものではなくて、喜劇的のものであつた。太古には悲劇の面は無かつた。そして西洋の學者は日本の古代の舞踊に用ゐるマスクは希臘、羅馬の古代のそれと起原を同じうすると言つて居る。然るにヒツチト民族の遺した種々な像を見ると、其面相が日本の古いマスクに

ソツクリなのである。

(註) Munsterberg 'Influences occidentales dans l'art de l'extreme orient' 一六頁

又、日本に古代から傳つた大弓や短劍(双刃)や槍(双刃)は支那に傳はつたミセニャン型とは全然異つて古代希臘の型であるとの事である。又、日本に太古から用ひられる鞞(弓弦の反射に備へる爲めの)は支那やヘルシヤにては知られない武器であるが、ニヅやバビロンの浮彫像中に能く之を發見するといふ。(註)

(註) 同前書一五頁

右の大弓はヒツチトの最も得意とした武器である。尼僧までが之を携へてダンスしたのである。之を希臘に傳へたのもヒツチトであらう。鞞や其他の武器を發達せしめたのもヒツチトであらう。そして其ヒツチトが海路を傳はつて日本に持つて來たのであらう。日本に見出す凡ゆる古形の劍や鎗は、悉く其模型をヒツチトの武器中に發見し得るのである。

カルデヤから起つてヒツチトのカパドシヤ地方、シリヤ地方に弘通した女性崇拜はパレスチンに入りてゼルサレムの神殿内にも行はれた。聖書中にあるアシラ像は即ち其れである。(註)そして日本の古事記にて諸神を數へるに『柱』の語を以てするのは、元來この『アシラ』から由來したのだと言ふ説もある。アシラ像は女性器を徵象したものである。

バビロン及びヒツチトと日本文明

(註) 列王記十三章二一―二三節

六、風俗の近似

ヒツチトとヤマト民族とは、其容貌や風俗に於ても似寄つた處が尠くない。例へば男子の或者は膝までの襦袢を着て帯を付け、又或者は長衣を纏ひ、常に帯を以て前を合せて居る。そして歩行中の姿勢をした像は其帯以下の前を開いて居る。其袖は大して廣くも長くもない。女子は長衣を着け、矢張り帯をしめて居る。而して袖は男子のと異つて頗る長い。其帯から下はヒダが取つてある様に見える。日本人の袴に似て居る。又婦人の像には打かけの様なものを着て、全身を隠したのもある。男子の像には今のトルコ帽を大きくした様なものを被つたのや、ツバの無いハンチング帽の様なものや被つたのがある。是れは日本古代の風俗中には見當らない。頭髮を後に下げて、細い鉢巻を着けた像は、神功皇后の繪を見る様な心地がする。又ヒツチト民族の群は、多く爪先上りの長靴を穿いて居る。其爲めにヒツチト民族は寒い山の奥から出て来た人種だらうと言はれる。シリヤ邊にては其様な品物は餘り必要でなく從て發明される場合が無い譯である。日本の古代の人物繪なども、服装は熱帶的でありながら、其服装に似合はない長靴を着けて居る。是れは矢張り天



第二圖 ヒツチトの文字と婦人の像

バビロン及びヒツチトと日本文明

孫民族が熱帶地方を通過して來たに關はらず、その古來の習慣を棄て得ないで長靴を穿いて來たことを意味するのであらう。(註)

(註) 此一節に就つては Iantsheers 氏の "De la Race et la Langue des Hitites" 三三―三三頁參照

コオカサス山麓のジョルジャ國はバビロン文明を直接に繼承して今日に及んだ世界唯一の國だと稱せられる。其國語の如きも全然其四隣諸邦と異つて居る。そして同國の歴史家は其人種はヒツチトの後裔だと稱して居る。私は滯歐中に數人のジョルジャ人の男女と交際したが、其容貌は歐巴人よりは寧ろ吾々日本人に近似して居る。髪も眉も黒く、瞳も黒い。皮膚の色なども白哲人種とは異つた處がある。勿論民族が幾度も移動して居れば、赤毛の人も綠眼の人も時には見當るであらうが、多くは右の如くである。

七、穂々手見命とイサク

私は後章に於ても叙述する積りであるが、大國主神の事蹟とアブラハムの事蹟とに驚くほど細事に互つて符合點の存する事と、其アブラハムはカルデア傳説の偉人オルクハムから由來して居ると信ずる者である。然るに舊約聖書の創世記を讀むと、アブラハムの子イサク及びイサクの子エサウ及びヤコブの事蹟と日子穂々手見命及び火照命の事蹟とに近似點の多いことを發見する。此事を茲に記するのは第五章と重複するけれども、文明移住に關係することなれば、特に簡略に記して置く。

私は先づ古事記の記事の一節を茲に紹介する。古事記にては火照命と火遠理命（即ち日子穂々手見命）との間に山サチ、海サチの事に就いて争を生じ、弟の火遠理命が海邊にて泣いて居ると、鹽椎の神といふのが來て、無間勝間の小船を造つて其船に乗せてそれを押し流すに當り教へて次のやうに曰ふた。

『すなはち其道に乗りて往ませば、魚鱗の如と造れる宮、其は綿津見神の宮なり。其神の御門に到りまれば、傍の井の上に柚香木あらん。其木の上に座ませば、其海の神の御女見て相儀ん者ぞと教へまつりき。カレ教へしまにまに少し行けるに、つぶさに其言の如くなり……こゝに海神の女豊玉姫の從婢、玉器を持て

水をくまんとする時に、井に光あり、仰ぎて見れば、麗はしき壯夫あり、いとあやしと思ひき。茲に火遠理命、其婢を見給ひて、水を得しめよと乞ひ給ふ。婢すなはち水を酌て玉器に入れたてまつりき。……豊玉姫命あやしと思ひて、出見て、すなはち見めて目合して、其父に、吾門に麗しき人いますと白し給ひき』

かくて海神は此命を迎へ入れて大いにもてなし、吾が女を之に婚せた。

私は次に舊約聖書の記事を紹介する。右の記事にては、穂々手見命は其兄と争ひの結果、ワヅツミの國に往き、井の傍にて豊玉姫と戀に落ちたのであるが、イサクの場合も少し事情が複雑になり、宗教的になり、偽善的になり、そして兄弟喧嘩はイサクの子のエサウとヤコブとの間に起つて居る。唯だ兩方とも井が結婚の媒介になつて居る點が頗る面白い。又、井が媒介になつて花嫁が見付かるのであるが、聖書の方では新郎の僕が本人に代り、古事記の方では花嫁の婢が本人に代つて居る。聖書の記事は餘りに贅長であり、又後章に紹介しあれば、茲にはその一小部分だけを摘録する。

『斯くて僕、……メソボタミヤに行き、ナホルの邑に至り、其駱駝を邑の外にて井の傍に跪伏せしめたり、其時は黄昏にて婦女等の水汲にいづる時なりき。……リベカ瓶を肩にのせて出できたる。彼はアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルに生れたる者なり。其童女は觀るに甚だ美しく且つ處女にして未だ人に適きしことあらず。彼井に下り、其瓶に水を盈て上りしかば、僕は行きて之にあひ、請ふ我をして汝の瓶よ

り少許の水を飲ましめよといひけるに、彼、主よ飲み給へといひて乃ち急ぎ其瓶を手におろして之にのましまたり、……汝は誰の女なるや、請ふ我に告げよ、汝の父の家に我等が宿る隙地ありや、女彼に曰けるは、我はミルカがナホルに生みたる子ベトエルの女なり。家には藁も飼草も多くあり且宿る隙地もあり』(註一) アブラハムの僕は迎へられてナホルの家に入り、アブラハムの意を傳へ、女リベカをイサクの嫁にくれと申込んだ。リベカの親と兄とは之を諾した。そして『イサクはリベカを其母サラの天幕につれ至り、リベカを娶りて其妻となして之を愛したり。』(註二)

(註一) 創世記二四章九—二五節

(註二) 創世記二四章五九—六七節

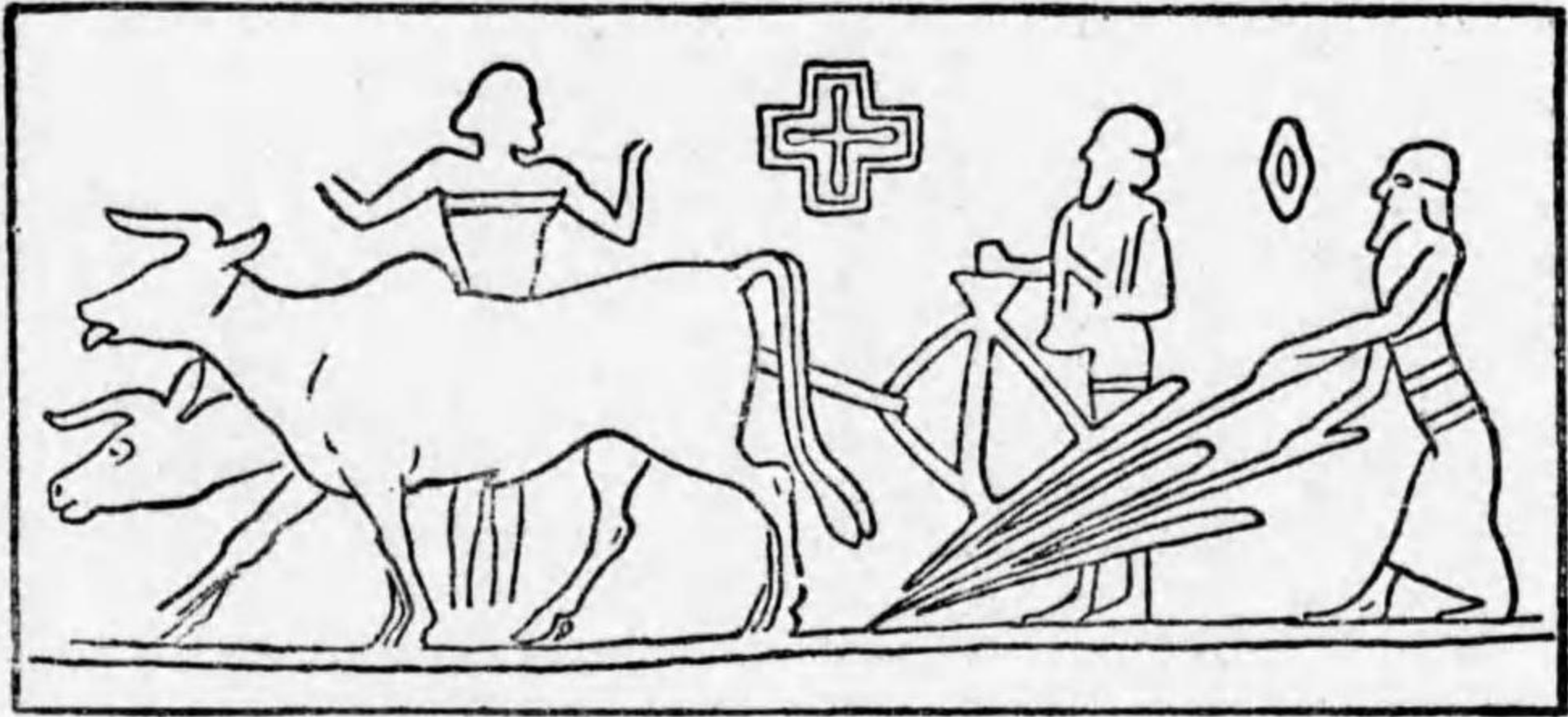
八、井と玉壺と高田下田

アブラハムの子イサクの場合も天照大御神の曾孫穗々手見命の場合も井が重要な印象を残して居る。何故に井が此れ程の印象を與へたのであらう？ 此れは井が此人々の生活に重要な材料であつたからであらう。もう一步進めて言へば、水が非常に貴重であつたことを思はしめる。従て此二つの出来事が熱帯地方或は砂

漠近傍に起つたものであることは想像が出来る。聖書の方はメソポタミヤの出来事としてあるが、古事記の方は其地名を明知することが出来ない。唯だ兩方の傳説が其起原を同じうするものとすれば、矢張り西方メソポタミヤ邊の傳説を古事記が採録したものと云ひ得るであらう。

次に水をくむ道具の玉器たまひは書紀に書かれた玉壺の方が分り易い。書紀には又玉瓶の文字を並用して居て、學者中に此瓶をツルベと讀ます人もあるが、其れは適當で無いと思ふ。矢張り聖書の讀方と同様にカメと讀む方が適當であると思ふ。何となれば、此事件が假令日本の出来事とした處で、此時にはまだ釣瓶つるべは無かつたであらう。處が阿弗利加や阿刺比亞等の地方に行くと、夕刻に婦人達が大きな壺を肩或は頭上に捧げて泉或は貯水所に水汲むのを例とする。そして其れが毎日の重要な仕事で従て人々に深い印象を與へたものと思ふ。熱帯地方に旅行したものは、此古事記の記事を讀んで特に其ビトレスクな詩的な光景を想起することが出来ると思ふ。

又『傍の井の上に湯津香木ゆづかあらん』といふ古事記の文字も熱帯地を想像させる。柚香木は柚或はオレンジの如き香薰芳烈な熱帯植物であらう。最も此出来事は日本の九州で起つたとすれば、同地方に此種の樹木の存在を否定することは出来ない。唯だ柚香木が井の上にあらんとの記事は如何にもそれが熱帯旱魃の地を思はしめる。何となれば元來普通の暑氣位には何の傷害をも感じない此種の植物を特に井の傍に見出すからで



第三圖 第一ノハラムビロンの時代耕作

ある。

次に又、綿津見大神が火遠理命に訓へた『其兄高田を作らば汝命は下田を營り給へ、其兄下田を作らば汝命は高田を營り給へ』の語はアラビヤのヒミヤリト文明を想ひ起さしめる。蓋し高田と下田とを並存するのは山岳水田の耕作を意味し二千數百年前の日本には之を想像し得ない。之れが軍略の條件となるほどであれば可なり廣大なものと想像せねばならぬ。然るに世界最古の山岳水田耕作地たるアラビヤ南方ヒミヤリト地方に於ては今より少くとも四五千年前に既に此耕作が開けて居たのである。是れはバビロンの耕作法を學んだもので、其耕作法を更に埃及に傳へたのも此ヒミヤリト人だと歴史家は言ふ。

私は第十章に於て、火遠理命の父君ニ、ギの命が高千穂（——私は之をシナイ山だと信ずる——）を立ちて、『カササの御前に眞素通りて……此地は朝日のたゞさす國、夕日の日照る國なり』と言つたといふ其カササの崎は、このヒミヤリトの突角であると説くが、今日この高田下田の

戦略を讀みて前説を更に確めることが出来るのである。

九、縣主と國造とヤマト

私はヒツチト民族とカルデヤの原始民族たるアツカド人とは、同族であらうと信ずるものである。又アツカド人が其同時代のスメル人と相對して居るのは古事記に天津神と國津神と相對立して居た事實に符合し、アツカドとは山岳人を意味し、スメルとは平野人であるとの説に重要な意味がある、と信ずる者である。私は第十章及び第十四章にも説明するが、スメル人が其水穂の國を言ひ表はす『ケンジ』といふ語はケニ或はクニと變じて日本語の『國』の語原をなしたと信じ、日本語のヤマトは山人であつてアツカドを意味すると信ずる。然るに其後英國のアツシリヤ學の泰斗キング博士の大著『バビロニア及びアツシリヤの歴史』にはアツカドとはセミチツク語の發音でアツカド人自らは『アガド』と發音したと説いてある。又其名は最初メソポタミヤ北方の一都會の名稱であつたが、其都會が有力になるに至つて其地方の名稱となつたのである。（註）

（註） 同書上卷一四頁

此アガト（又はアガド）とケンジとの對照は私に少なからず興味を與へる。なぜなら、ケンジは『國』の語原

バビロン及びヒツチトと日本文明

をなし、アガトは『縣』の語原となつたものと信ぜられるからである。そして此區別によりて始めて『國』と『縣』との區別と其語の由來とが明白になる。從來私は『國造』『縣主』の區別が分らなかつたのであるが此研究によつて始めて、『縣主』とは天孫民族の首長で、『國造』とは『國津神』の首長であつたといふ風に信するに至つた。後世になつて一種の官職の様に見做されて來た是等の名稱は、その源を探ねれば斯くも遠い昔の社會生活に存したのである。

從來、國學者の解釋では、縣は朝廷の御料田であり、縣主は、上代に於いて京畿及び諸國の御料田を司つた者だといふ。併しながら、朝廷の御料田を何故にアガトと稱し、縣の文字を用ゐたか、それが分明でない。そして地方行政區域を國と稱し、それを支配した地方官を造と稱したといふが、如何にして縣と國との二文字をそのやうに區別して使用したか、それが明瞭でない。

次に記すべきは、ヤマトの語である。私は先きには、ヤマトは山人といふ意味でアツカド人のことでは無いかと考へた。然るに其後バビロン最古のアツカド語を研究して見ると、此私の想像は蓋し當らずと言へども遠からずであつた。アツカド語に於ては『國』といふ意を表すに、マド或はマトと發音して居る。而して山の形をした形象文字をヤと發音して居る。若し此ヤの音を以て山岳の意味を表示するものとすれば、ヤマトは即ち山國といふ意味になる。ヤマト民族とは山國民族といふ意味となり、山岳人の意味に慣用されたる『ア

ツカド』人を以て我が天孫民族の祖先と見做すことも出来るのである。然るに私はヒツチト民族を以て我天孫民族である、と前に説いたが、其ヒツチトとアツカドとは果して之を同一視することが出来るか。之に就いては反對説も無いでは無いが、古代歴史の權威ルノルマン氏やコンデー氏等は此兩人種と其言語とが酷似することを主張する。其れにしても此兩民族がツラン人種に屬することは諸學者の一致する處である。

唯だ此處に疑問とすべきは、ヤの音が果して山岳を意味するや否やにある。抑もアツシリヤのテキストにては山岳は大抵、シヤドといふ發音になつて居る。此アツシリヤの言語はバビロンの言語を繼承したものであらう。併し此語が果して上古のアツカド人の用語であつたかどうかは今私には斷言し得ない。

十、三十一文字の由來

或る西洋の學者は、日本の和歌は希臘から傳はつたものに相違無いと言つてゐる。(註)其れは、希臘の古代にも三十一シラブルの二枝一幹詩が行はれ、其詩形が日本の征服者にして天照大御神の兄弟たる須佐之男命の創始した『和歌』の形と全然同一だからである。私は須佐之男命はベルシヤ灣の北方にあるシユス(或はスサと發音す)——アツシリヤ民族の本據——の首長であると信じ、そして其『八雲立つ』の戀歌は同時に

雲霓崇拜の意を背景にしてゐると考へる者である。若しギリシヤに其詩形が存在するとせば、それは西洋學者の言ふのと反對に、或はヒツチト人を仲介にしてギリシヤ人が却て、スサノヲの後裔から學んだのかも知れない。何となれば、希臘人はヒツチトによりて古代バビロンの文明を學んだものであるから。尤も希臘人は彼の『トアソン・ド・オル』の傳説の時代から既に小亞細亞の北海岸に住居した形跡もあり、ヒツチトとは互に軒を並べて生活したらしいから、何方が何方から學んだものか、それは分らない。併し第六章にも説明する通り、希臘よりも先きにバビロンに於て早くから三十一文字五句の短歌が行はれたことは事實である。そして大和民族の方が希臘人よりも先きに此短歌に親しんだことも之を想像することが出来るのである。

(註) Munsterberg "Influences occidentales dans l'Art de l'extreme orient" 一七頁

西洋の學者は日本の古代の文明はマレー人がバビロンや希臘の文明を承け容れて、聽て其れを日本に傳へたのだと言うてゐる。否な寧ろ其文明を利用して日本を征服したのだと言ふてゐる。或はさうかも知れない。其れは私の研究にはどうでも可い。唯だ多くの傳説が彼方から傳はつて來たことを明らかにするのである。

十一、ワニの意義

穂々手見命がワグツミの神の許を辭して故國に歸る時に、之を護送したる「一尋ワニ」の事が古事記にある。又、書紀には『海神所乘駿馬、八尋鰐魚也。……惟我王駿馬一尋鰐魚、是當一日之内必奉致焉』とある。久米博士は、此「八尋鰐魚は軍艦に喩へたること文面に明白なり。……一尋鰐魚は海神宮の汀に繋げる小形の乗船なり」と言ふてゐる。此所説は極めて適當な解釋だと思ふ。

唯だ茲に残る問題は、日本に棲息しない「ワニ」の名稱が、何故に日本の軍艦に付せられたか？ 又彼のクロコダイルに附した名稱はエジプトにても南洋にても「ワニ」とは稱ばないが然らば此名稱は何處から來たか？ といふ點にある。

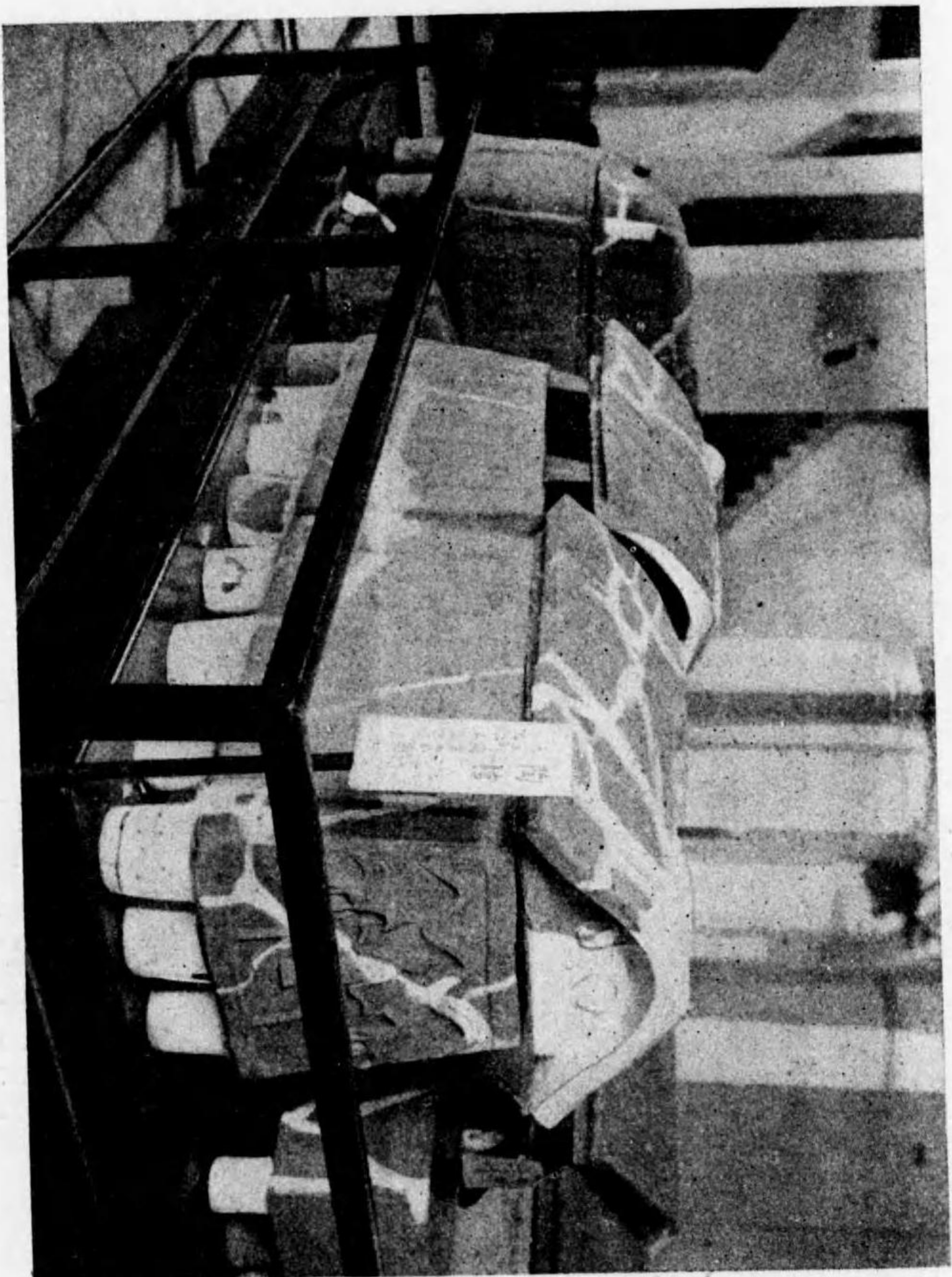
私はこの問題に就いては、第十八章に詳説して置いたから茲には之を省略する。唯だ此「ワニ」の名稱は、太古カルデヤ人と其文明とを守護したと傳へられる「ウワネ」から山來したものであることを言明して置く。ウワネは或時は救助船、或時は商船の守護神となりてカルデヤの最も貴い神魚であつた。聖書のノアの傳説の模型であると稱せられるシトナビシチムに方舟の建造を教へ、大洪水に際して之を救つた、エア神は即ち此ウワネの別名である。又別にニニギ・アザクと稱せられるが、其ニニギ・アザクとは『學問の主』といふ意味だといふ。又此ウワネは希臘人の發音法でカルデヤのエアバニの訛傳したものだといふ。エアバニは日本に來てワニと訛傳されたのであらう。

十二、陶棺及び大黒天

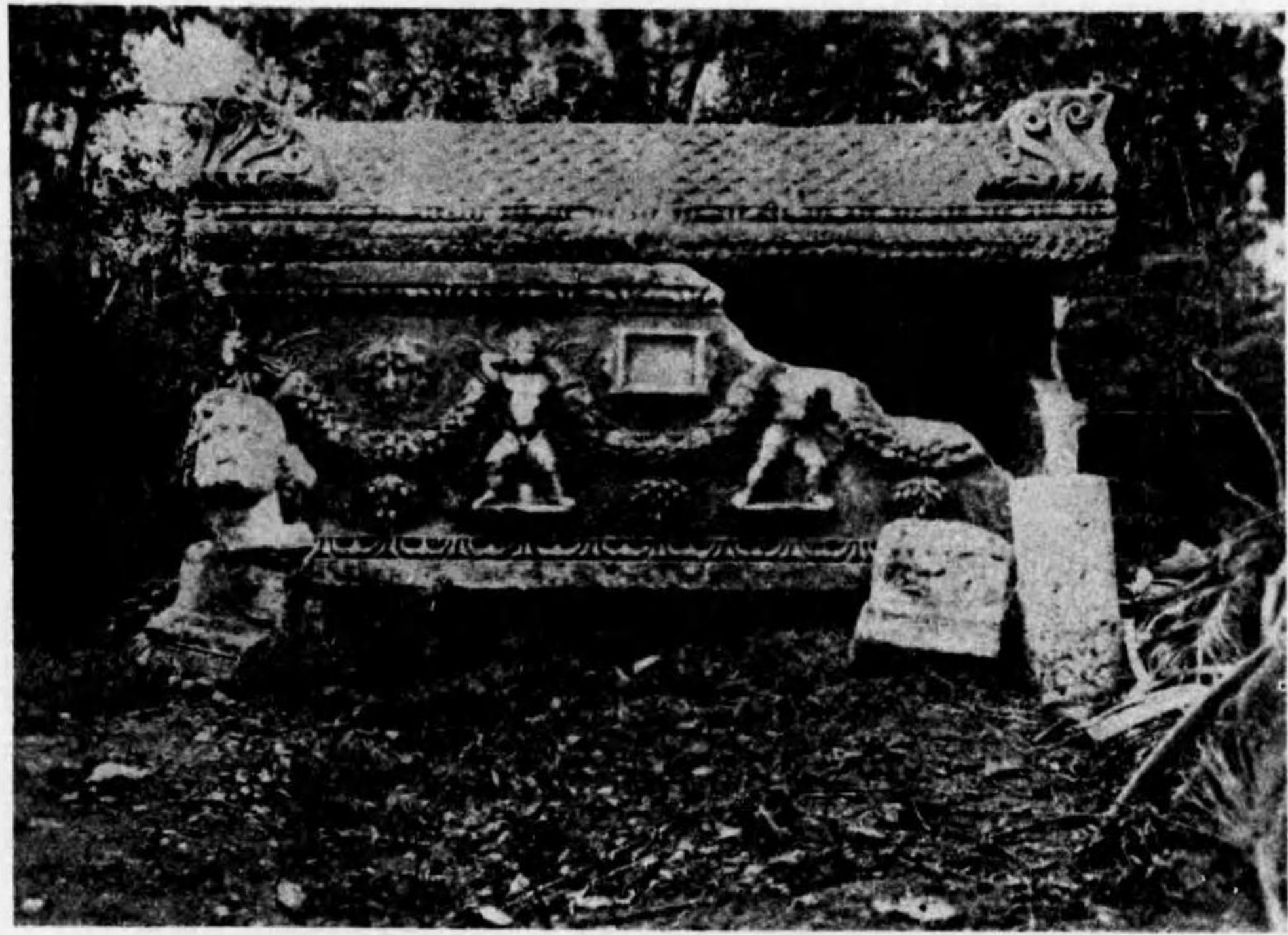
上野の帝室博物館に行くと、美作の國から發掘したといふ陶棺がある。(第四圖参照)久米邦武氏は之に説明を加へて、『屋根形陶棺は泰西の古史に關係多き小亞細亞地方にて發掘せらるゝ三千年前のものなるに、遠く我日本に之を見るは奇なりと謂ふべし。思ふに彼地方より轉徙し來りたる民族が、其古俗に基きて、其君長の埋葬に此陶棺を用ひしものなるべし』

と言ふて居る。三千年前に小亞細亞を占領して居た民族は即ちヒツチトであるから、單にこの一證據物によるも、ヒツチトが我國の祖先の一部分を成せることは明白であらう。私は先年歐洲からの歸國に際してシリアのベイルウト港に寄港したが、博物館のと同様な棺の發掘されたのを見た。又博物館の棺の浮彫は全然ヒツチトのものである。

第五圖に示した陶棺はシリアのベイルウト博物館のものである。之を上野博物館の品に比較すると同じ屋根でも其輪廓線に大なる相違がある。日本のは屋根形が曲線を以て出來、シリアのは其れが直線で出來て居る。尤も上野博物館には之と並んで殆ど直線を以て屋根を造つたのがある。又棺身も上野のは底部が少しく

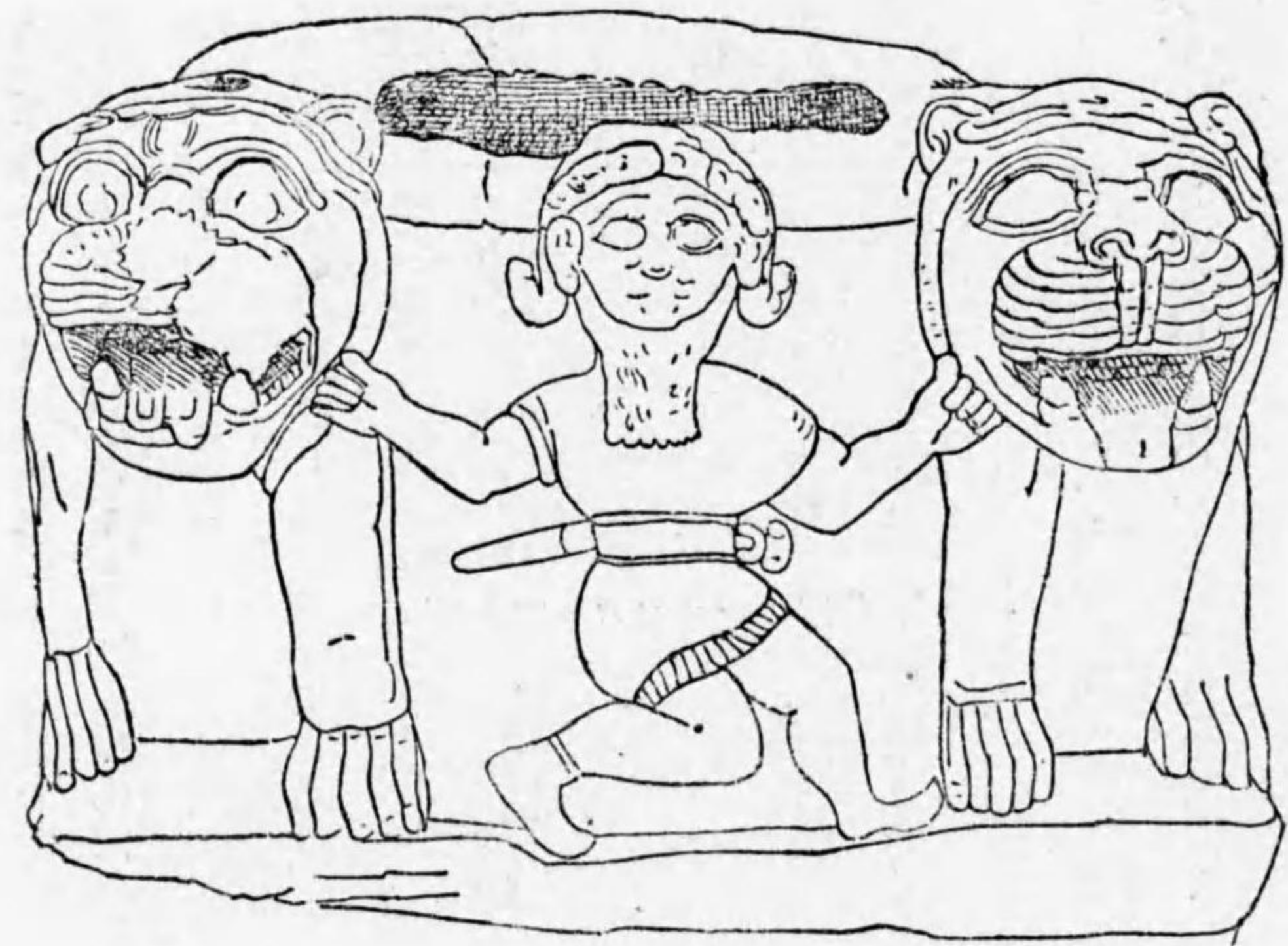


第四圖—美作國から發掘した陶棺



第五圖 トウルの陶棺

擴張されて居るがシリヤのは直角に出来て居る。併し此直線直角を以て造る様になつたのは、是れは希臘工藝の感化を受けてからのことであつて、其れ以前のヒツチトの陶棺は底部が擴張されて居る。私は又茲にヒツチトとバビロンとの彫刻を挿入する。(第六圖及び第七圖)是れは何れも、一人の人物が両手にて動物を操つて居る處を表はしたもので、帝室博物館の陶棺の浮彫と其形態を同じくする。帝室博物館の陶棺中には二個の菊形を浮彫にしたのがある。併しこの菊形の花弁は之を精査すると、實は八瓣になつて居る。是れはバビロンやヒツチトの彫刻中に屢々遭遇する畫形である。或は日まはりの花かも知れず、或はバビロンの楔形文字の天即ち \star から由來したのかも知れない。又、上野博物館に行くと、五谷先帝の像といふのがある。是れは、『炎帝神農氏を祝るもの

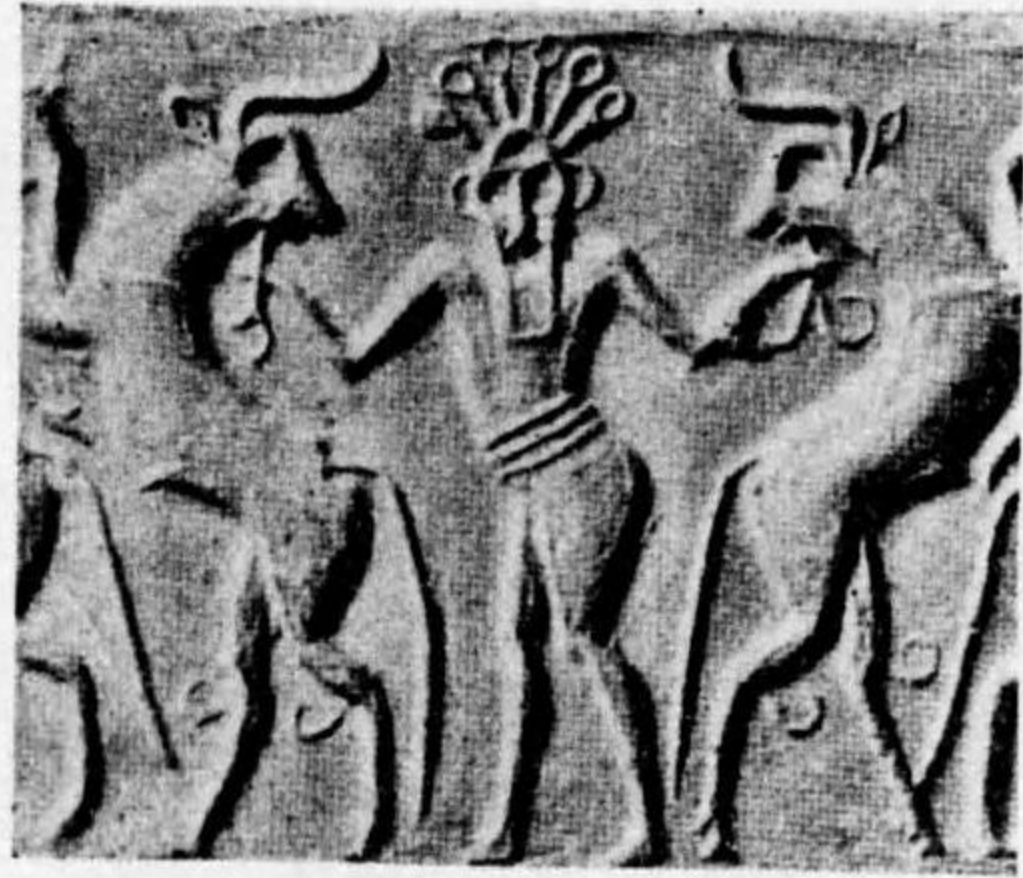


第六圖 ヒツチトの彫像

にして五穀の神(——五谷の谷は穀に通ず——)として崇信せられ、凶作をさけ、虫害をふせぐ等、此神に祈求するを常とす』と説明して居る。然るに倫敦博物館の東洋學者リアン・ド・ラ・クウブリは神農氏を以てアツシリヤのサルゴンだと説いた。茲に興味のある一事は、此神農氏の像が黒人の色と相貌とをなして居ることである。そして西洋の學者中には、カルデヤ文明は黒人が開拓したのだと主張する人もあつて此像を連想せしめるのである。又日本の大黒天は大國主のことであるとの説もあり、或は其大國主の大黒天は此黒人即ち神農氏より轉化したものかも知れない。(第八圖参照)或は此五谷先帝といふ名稱も、印度ベンジャブ地方から來たものかも知れない。何となれば(Tamoni)は五ツの谷河といふ意味であるからである。

神武帝の御兄五瀬命の名稱も或は此ベンジャブから由來したのかも知れない。最も三千餘年以前には此地方をセプタシンド (Sepashindu) と稱んだ處を見ると、極く太古には七ツの河が彼の平野を滋ほしたものであらう。然るにアレキサンドル大帝は此『五河』國に滯留したとの事なれば當時は既に五河に成つて居たのであらう。カルデヤ文明は東北方に走つて應て支那に入り、東南に來て印度を開いたが、其兩派は共に日本に傳つて來たのである。

十三、樂器



第七圖バービロンの彫像

古事記神話の中には樂器の記事は見えない。従つて神話研究としては本項は關係の無いものであるが、唯だバビロンやヒツチトの文明の研究としては、些かばかり叙述したいことがある。

上野の博物館に行くと、正倉院の箏篋の模造が飾られてある。(第九圖参照)そして其箏篋はアツシリヤ或はバビロンから傳はつたのだと稱せられる。又、バビロンやヒツチトの遺した浮彫像には、日本の三味線と全然同一形の樂器を日本人と同一姿勢で弾いて居るのがある。尤も此三味線は日本には極めて近世になつて傳



第八圖大黒天に似たヒツチト彫像

へられたもので、其時は弾方も解らなかつた位であれば、昔から日本に傳はつて居たとは思はれない。或は太古の時代に傳はつて居たかも知れないが、それは日本の文明には何の影響をも與へては居ないのである。唯だ箏篋は今日も尙ほ保存されてある位であるから、聊か茲に記述を加へて置く。

是に就き斯界の權威たる田邊尙雄氏の『南倉階上にある箏篋に就て』といふ一章が上野博物館發行『正倉院の樂器の調査報告』中にあるから、其れを茲に借用して置く。田邊氏は曰く、

『南倉階上にある箏篋は所謂ハープの一種なるが、其の形頗る特種なるものなり、此の樂器が他種のハープと全然異なるものは、次の二點となす。

(一) 下部に脚柱のあること。

(二) 上部の木匡を空洞にして共鳴装置をなせること。

此の二個の特徴を有せるハープを古代樂器中に求むるにアツシリア、バビロンの外に之れあるものなし。

古代エジプト、ユダヤ、ギリシヤ、ペルシヤ、インド等のハープは孰れも下部に脚柱を有せず、且つ共鳴装置は必ず下部にあり、但し古代ギリシヤの瓶の畫にあるハープは上部に共鳴装置あれども、此れは正倉院のものと其形全く異なり。

有名なる信西入道舞樂圖(第十圖参照)中にある箏篋はインド系のものなるべく、下部に脚柱なきのみなら



第九圖上野博物館に於て模造品を鑑賞す

す、上部の木匡に共鳴胴なきを以て正倉院の箏篋とは全然其趣を異にせり。支那に行はれたるハープに堅箏篋と臥箏篋とあれども、此れ等は全然その形を異にせるものなり。

支那に於て堅箏篋と名付くるものは、蓋し此の正倉院のものと同形なるべきか。杜氏通典に曰く、

堅箏篋胡樂也、漢靈帝好之、體曲而長、二十三絃、堅抱於懷中、用兩手齊奏、俗謂之擘箏篋。

又隋音樂志に曰く、

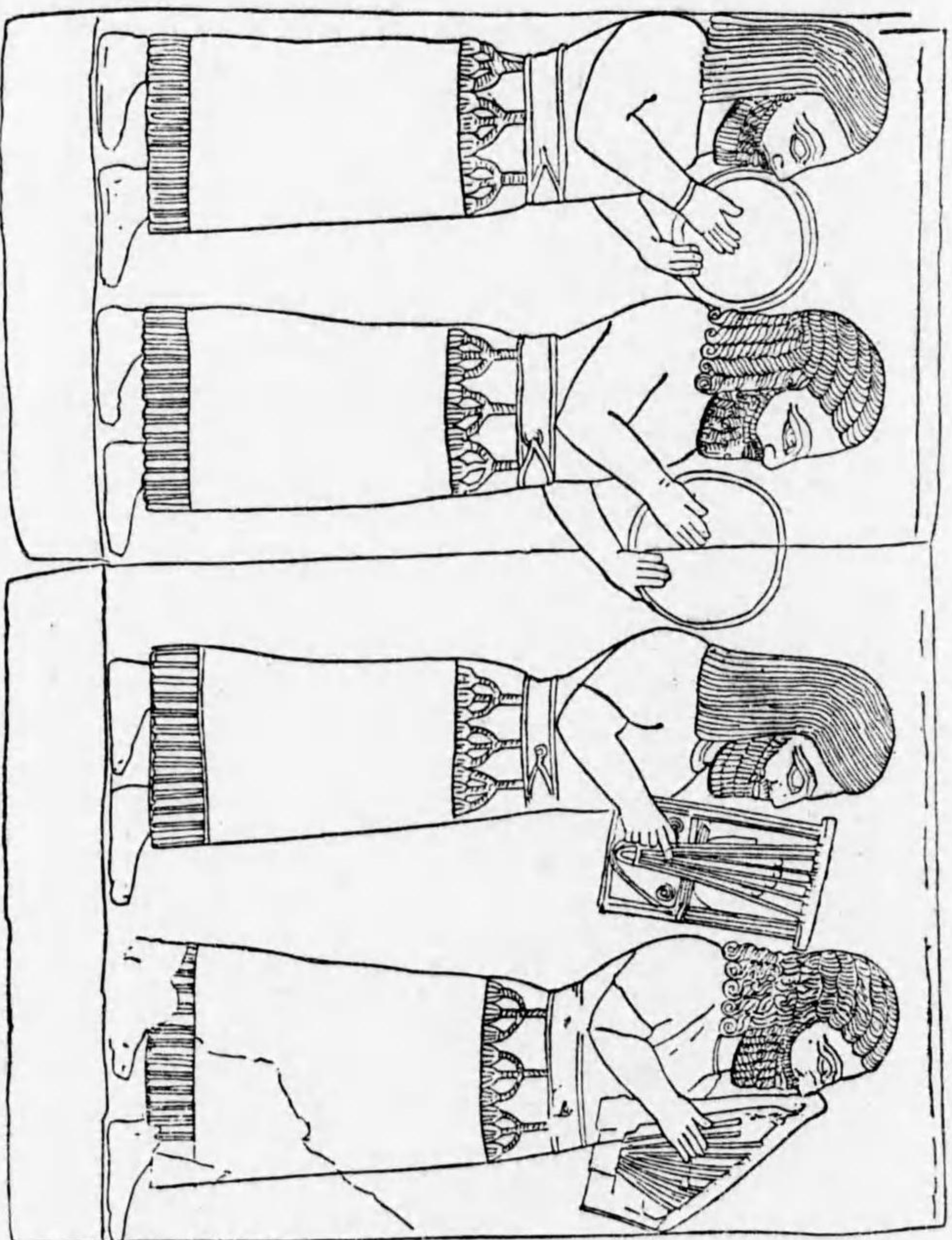
立箏篋出自西域、非華夏舊器。

と。茲に西域とあるはアツシリアの樂器が中央亞細亞を経て、支那に入りしものなるべし。

支那の近世の繪畫に此樂器を片手に提げて持てるものありと云ふ、又その横軸の一端を椅子に立て掛けて、その脚柱を地板上に立て、之れを奏せる形を見はせるものありと云ふ、此樂器は古代のものにして、中世以後之れを使用したることを聞かず、故に此等の繪畫は孰れも想像に依りて畫きたるものなるべく、その用法は孰れも誤まれるものなりと信ず、蓋し地板上に置くハープは、その上部に共鳴胴を作るの必要なきのみならず、却



第十圖一信西入舞樂の圖



第十圖一信西入舞樂の圖

つて上部に共鳴胴あるときは、不利益の結果を來すべし、實際上部に共鳴胴あるは、アツシリアに於けるが

如く、之れを高くかさして奏する爲めと看むより外なし。

尙ほアツシリアの樂器はその浮彫によりて考證すべきものなるが、アツシリアの浮彫は人物動物草花器物等、孰れも大小の割合に於て頗る寫實的なり、乃ち浮彫中のハープの大きさ人物の大きさ等を比較して、正倉院の箏篋と對照するに、實に其の形及び大きさに於て、驚くべく合一せるを見る。

此の故に予は正倉院の箏篋を以て、アツシリア系のハープ（それが支那又は朝鮮に於て造せられたものか）なりと斷定するものなり』

と。然るに第十三圖に示せる『最古バビロンのハープ』はスメル、アツカド時代のもので、極めて原始的の形體を具へて居る。田邊氏の所謂アツシリア系のハープとは些か其趣を異に



第二十圖ギリヤシ古瓶の畫

し、上部に共鳴胴も見えない。バビロンの遺像中には此圖の如く坐して弾くものと起立して高くかさして奏



第三十圖最古バビロンのハープ

する圖と兩者を存すれば、恐らくは兩種の樂器が發明されてあつたのであらう。第十一圖のヒツチト浮彫のハーブは起立して奏するものである。併し其れにしても正倉院の立琴が田邊氏の言へる如きアツシリア系のハーブであることは何人も疑はぬであらう。

最後に田邊氏の説によると、日本の古樂の一たる林邑樂はバクトリヤより印度を経て日本に傳はつたものだといふ。其バクトリヤ文明は即ちバビロン文明を直承したものである。

十四、神輿の起原

今日日本にある神輿が、何時代から存在するものやら、又それが果して日本で發明されたものか或は外國から傳來したものか、私はそれを委しく知らない。日本に於ける神輿の起原に就いては、それ／＼専門家の研究が世にも現はれて居るらしいが、それすら拜誦するの機會を得ない。私は唯だ相變はずヒツチトの歴史に現はれた神輿に就いて一言して置くに過ぎない。それは、ヒツチト帝國の隆盛であつた時分の事、多分カツシル二世の時代であらう、其王女の一人が癩癘を患つた。而して其れは惡魔に附かれたのだと信ぜられた。そこで埃及王ラムゼス二世は我が守護神コンシユをカチの國に送つて王女の平癒を祈らせた、といふ



第十四圖 惡疫驅除の爲に埃及及ヒツチトの國に
送られたるコンシユ神輿の古圖

ことがある。(註) 其コンシユの神輿は第十四圖に示す如きもので、直ちに日本の神輿の起原では無いかと思はしめるではないか。且つ日本語の『コンシ』も或は此『コンシユ』から來たては無いかと疑はしめる。尤もコンシユは月神其ものゝ名で輿の名ではないが、何時の間にか、其れが輿の名になつたのではあるまいか。其様に思はれぬ事もない。惡疫驅除の爲に神輿を擔ぎ出す習慣は日本各地に傳はつて居る。

(註) King "Babylon" 二二三頁

十五、佛教の起原

西洋の基督教宣教師が初めて印度に來た時、印度の佛教儀式の多くが基督教儀式に似て居るのに驚き、『佛教徒等は

基督教儀式を借用して居るのだ』と叫んだといふ。すると佛教徒の方では『冗談言つちやいけない、佛教は基督教よりはすつと先きに起つたもので、お前達こそ佛教の眞似をするのだ』と争つたといふ。何れが眞實か分らないが、佛教徒はトレミイ王朝の時には既にアレキサンドリヤに招聘せられて佛陀の福音を傳へ、シ



像の代時アデグー圖五十第

ーザーよりも以前に佛國ランゲドック地方にまでも入り込んだ形跡さへある。併し、佛耶兩教の何れが先きで何れが借用し

た、といふ様な争は、一朝カルデヤ人の宗教生活を見れば消散して了ふであらう。西洋の學者は基督教の『エデンの園』はバビロンの『歡樂の園』の傳説から由來したものだと言ふ。

そして私は佛教の極樂淨土だの西方淨土だのといふ思想も矢張り基督教のエデンの園と同様にカルデヤの

『歡樂の園』から由來したものだと思ふ。佛教の『地獄』の思想も亦カルデヤの傳説から出たといふことは第四章の黄泉國の説明中に述べる通りである。

尙ほ第十圖の寫眞に示す處の人物は、其姿勢や服裝が全然今日の佛僧そつくりである。是れがカルデヤの太古スメル、アツカド時代の遺像なのであるから頗る興味が深い。尙ほ同時代の浮彫を見ると、宗教儀式の主要な地位を占める大人物は悉く剃髮して居る。そして其れが禮拜には合掌して居る。前掲立琴の寫眞『最古バビロンのハーブ』（第十三圖）中に見る上部の人物などは能く其事實を物語つて居るのである。かうした種々な事實を綜合すると、佛教が其思想其儀式の源泉をバビロンから汲み來つたことに氣が着くであらう。私は茲に唯だ眼に着いた點を略叙したに過ぎない。専門的の智識を以て詳細に研究すれば尙ほ多くの驚異すべき事實を發見し得るであらう。

十六、更科 そば

是れも古事記神話とは關係の遠い事件であるが、更科そばの起原に就いて些かばかり述べて置く。是れは唯だ日本の事物が多く世人の思ひも寄らぬ外國から傳來したといふ一例を示すに過ぎない。若しかうした事

バビロン及びヒツチトと日本文明

實を多く集めやうとすれば際限も無く、其れのみにも大きな一巻の書を成すとも足らぬ位である。

曾て横濱に住居した一西洋人は、自ら『おそば』の通人を以て任じ、そばの味を知らざれば未だ日本を知れりといふことは出来ない、というて居た。實際、そばは極めて無味な様で、而もするくゝと咽もとを通過する際の趣味といふものは又格別である。其極めて平民的にして而も粹な處も亦其特徴である。是を以て能く日本國民性を發揮したものとなせる某外人の言は、蓋し妙を得たものと言へやう。

然るに此、そばの名稱を更科といひ、最近まで、そば屋の看板には多く『更科』の文字が加へられたものである。而して此更科の名は單に日本に於て行はれるのみで無く、西洋諸國に於ても用ゐられて居る。佛蘭西に於ては、そばのことをサラザンと言ひ伊太利にては之をサラシノと稱する。私は此事實を不思議に感じて之を人に問うた。然るに其れは昔時アラビヤから勃興して北阿弗利加を征服し更に西班牙までも其權力下に服したるサラセン人が之を持つて來たので此名稱が付せられたのだといふ。アラビヤはニギノ命や穗々手見命の生活した國であれば天孫民族には極めて因縁の深い處である。但しサラシナの名を持つたそばが古事記時代に傳來したものであるかどうかは分らないが、兎に角、ツラニヤン人に次でバビロン文明を開拓したセミチック人や、猶太建國者たるヘブリエウ人と同人種であるアラビヤ人よりして、日本の更科そばが持ち來されたことは争はれないと思ふ。

×

×

×

以上、私はカルデヤ文明から流を發した諸種の文物が日本にまで傳はつた事實を略記した。古事記神話がカルデヤから傳はつたことは勿論のことであるが、武器や、服装や、社會政治の諸制度や、短歌の様なものまでが、日本の太古に於て既にバビロンから傳來したことを想像し得るのは驚くべきである。更に其後に及んで傳來したる音楽や宗教も、其本源をたゞせば矢張りカルデヤから出て來たのである。吾等若し自らカルデヤの古蹟を踏査することが出來たならば、更にどれ程興味あり又貴重なる發見をなし得るであらうか。私其大事業が日本人自ら發起せらるゝの時機あらんことを熱望する。

空山不見人。

但聞人語響。

返景入深林。

復照青苔上。

第三章 三大創世記の類似

一、カルデヤ神話と古事記

西洋の學者は、舊約聖書の創世記がカルデヤの神話から出て來たものと主張する。勿論舊約聖書の創世記はヘブリユウ人が自分の社會に生長して居た宗教思想を背景にして書いたものであるから、カルデヤの自然崇拜的思想の中に語り傳へられた神話とは大ぶ其趣きを異にして居る。けれども其ヘブリユウ思想を以て書かれた創世記の中に、カルデヤの傳説から出た多くの記事の存在することは、諸學者の間に確定した學説となつて居る。例へば創世の順序、洪水の傳説、黄泉國降下事件、の如きは兩神話中に最も著しい類似點となつて居る。

然るに日本の古事記神話を讀むと、其記事が右の二神話に類似點を持つて居ることは驚くばかりである。

殊に其思想は寧ろカルデヤの神話に酷似し、ヘブリユウ神話とカルデヤ神話との關係よりも一層近接して居ることが明らかに覗はれる。勿論、海陸を遠く隔てた極東の小島國にまで長い旅行をして來る間には、種々の點に於て、變化があり、脱落があり、附加が行はれてゐるので、不注意に古事記を讀過するものには、其類似點を發見し得ぬかも知れない。併し乍ら、若し地理學的、歴史學的な眼を以て古事記の神話を注意して讀むと、あの記事の中には、種々な地方の種々な社會の傳説や生活が編入されて居ることに氣が付くと同時に、其最も重要な中心的諸記事がカルデヤ、ヒツチト、ヘブリユウ等の傳説或は生活から由來したものであることが發見される。

併し私は本章に於て、唯だ日本、カルデヤ、ヘブリユウの三民族が後世に傳へた創世記を比較するに止め其地理學的、歴史學的、社會學的の比較研究は、之を他章に試みやうと思ふ。

二、創世記の結構

古事記神代記の記事は、天地初發の混沌状態から諸神の生成を叙し、イザナギ、イザナミ二神の亂世平定を叙し、次で二神の諸國創造、自然萬物創造、イザナミ神の逝去、黄泉國降下、等の諸事件に及び、更に天

照大御神、月讀命、須佐之男命の誕生を叙して居る。そして須佐之男命の叛亂、天岩屋戸會議を以て最後の一波瀾とし、茲に古事記神話の創世記は一段落を告げたものと見ることが出来る。其れより以後の大國主神の一條は、之を舊約聖書のアブラハムの記事に比すべく、天孫降下の記事は寧ろ之をエピソードに比すべきである。

カルデアの神話にも、天地混沌の狀から、諸神の成生を叙し、たゞよへる世界即ちチアマトの叛亂とマルダク（或はマルデユク）神出征の狀を叙し、マルダク神の成功と其後の世界構造を叙してある。此外黄泉國の傳説、洪水の傳説等が之に加へられてある。そして以上の諸傳説の趣向に於て古事記とカルデア傳説との間に頗る近似した處がある。そこで私は先づ古事記とカルデア傳説との原文を少しく對照して見たいと思ふ。古事記の最初の記事は次の如くである。

三、古事記神話

『天地の初發の時、高天の原に成りませる神名は、
天之御中主神、次に

高御産巢日神、次に

神産巢日神、

此三柱の神は皆獨り神成まして御身を隠し給ひき。

次に國稚く、浮脂の如くにして、くらげなす、たゞよへる時に、葦牙のごと崩へあがれる物に因て成りませる神の名は、

ウマシアシカビヒコヂノ神、次に

天之常立神、

此二柱の神、亦獨り神成まして、御身を隠し給ひき。上の件五柱の神は別天神。

次になりませる神の名は、

國の常立神、次に

豊雲野神、

此二柱の神、亦獨り神成りまして、御身を隠し給ひき。

次に成ませる神の名は、

ウヒヂニノ神、次に妹、スヒヂニノ神、次に

三大創世記の類似

ツメグヒノ神、次に妹、イクグヒノ神、次に

オホトノチノ神、次に妹、オホトノベノ神、次に

オモダルノ神、次に妹、アヤカシヨネノ神、次に

イザナギノ神、次に妹、イザナミノ神、

上の件、國の常立神より以下、イザナミノ神まで、併せて神世七代と稱す。

こゝに天つ神諸々の命以て、イザナギノ命イザナミノ命二柱の神に、此たよへる國を、修理固めなせと詔りごととして、天の沼矛ぬぼこを賜て、言依よきし賜ひき。

此二柱の神、天の浮橋に立たして、其沼矛を指下して畫き給へば、鹽ををろ、こをろにかき鳴して、引上げ給ふ時に、其矛の末よりしたゝる鹽、つもりて島と成る。是れおのころ島なり。』

四、カルデヤ神話

古事記の神話は、是よりイザナギ、イザナミの二神の八尋殿に於ける交合となり、諸神諸國の創造となるのであるが、對照の便を得る爲めに、其れは別段に分けて述べることにする。そして此處には直ちにカルデ

ヤ傳説の創世記を引照する。

『上には天に名も無かつた時、

下には地にも名が稱ばれなかつた。

是を發した最初のアプシュ(註一)と

是を産んだ騷擾のチャマト(註二)とは

總ての水を混合した。

野も形を成さず葦も芽を吹なかつた。

ドンな神も産まれず、

ドンな名も呼ばれず、

ドンな運命も定まらない時に、

神々は造られた。

ラクムとラカムとは産み出された。

永い時は経過した……………。

アンシャルとキシナルとは造られた。

三大創世記の類似

日は長くなつた……………。

アヌ……………。

アンシヤル……………。

(註一) アプシユは大洋或は大洋の深淵を意味す

(註二) チャマトは海を意味し、同時に騷擾を徴象する

バビロン人が遺したドキュメントは不幸にして此後部數句を缺いて居る。學者の説によるとカルデヤ人は尙ほ此間に多くの諸神の産れたことを語り傳へた。『アパソン(アプシユ)の配偶者トオテ(シアヤト)は總ての神の母と稱せられた。此二神は獨りのモイミス(ムンム)を生んだ。是れは尙ほ無形の世界であつたらしい。是れと同様な時代が尙ほ續いた。即ち第二は、ダケとダコス、第三はキサレとアソロス、次は三神でアノス、イリノス、アオス等の名があり、アオスとドオケの子にベエロスが生れた。其ベエロスは創造主であつたと言はれる。然るに其職分はエア神の子のベル・マルデユクが握つてゐたことはドキュメントに明記されてある。前段に掲げた詩の缺損の箇處には、天の神たるアヌの出現の後に、地の神たるベルや、海の神たるエアの出現を記してあつたのであらう。』(註)

(註) A. Loisy 氏 "Les Mythes Babylonians" 第六頁参照

さてアプシユとチャマトとは諸神に對する叛逆を謀つた。

總てを造つた黄泉の海(註)は

抵抗し得ない軍兵を備へ

利があつた牙を持ちて、憐……………を持たぬ

大きな蛇を産み、

其全身には血の代りに毒を充たし、

怒れるドラゴンに脅嚇の衣を着け、……………、

蛇や、ドラゴンや、ラクミヤ、

怪物や、狂犬や、蠍人や

狂魔や、毒人や、破墟挺やを前進せしめ

何物をも吝まぬ軍兵は戦を怖れない。

(註) チャマトを意味す

五、カルデヤの八百萬神

八百萬の神はアンシヤル神の前に大集會を催して、荒ぶる海のチャマトの軍を討破すべくマルデユク大御神の出征を決議した。マルデユクは武備を急いだ。愈々チャマト派とマルデユク派との大激戦になつた。マルデユクの剛力は遂に其投鎗を以てチャマトを撃破して了つた。其より天下を平定し終つて、愈々世界の組織に着手するのである。それまでの序事詩は古事記と對照すべく餘りに長いものである故に、此處には之を省略する。

バビロンの守護神マルデユク太神の出征を決議した大會議は恰も古事記の岩屋會議に髣髴たるものであるが、其マルデユク太神がバビロンにては男性の武神であるに、古事記の天照大御神が愛の女神である點は頗る異つて居る。そしてカルデヤにては叛亂のチャマトが女性であるに反して、日本の古事記にては叛亂のサノヲノ命は勇猛の男神である。是れは恐らくヒツチト民族に傳つた女性崇拜の信仰と混合してそれが日本に傳來したのであらう。兎に角、春の太陽の徵象とされるマルデユクが其隠逃所たる山陰にて八百萬の神と出征前の評議を凝らしたといふ神話は頗る古事記の岩屋會議に近似して居る。(註)

(註) 本書岩屋戶會議の神話學的研究の章參照

この記事が古事記にては大分後方にあり、創世の後に挿入せられた爲めに前後の關係が少し異つたに過ぎない。海原のスサノヲノ神と荒海のチャマトとが同じ叛逆的地位に置かれた點が重要である。

古事記神話のイザナギ、イザナミ二神の條には『たゞよへる國をつくり固めなせ』といふ諸神の言葉があるばかりで、カルデヤ神話のチャマト叛亂に相當する記事が無い。又従つて之に對する戦闘も無く、唯だ『二柱の神、天の浮橋に立して、其沼矛を指下して、かき給へば、云々』とありて、極めて無造作に諸國、諸物諸神の創造が始められてある。是れは岩屋戶會議の記事を後方に送つた編纂の順序として、茲には單に『たゞよへる國』と言ひ、『沼矛を指下してかき給へば』と叙して、戦亂の叙述に代へたものであらう。

六、舊約聖書の創世記

さて、古事記神話並びにカルデヤ神話と舊約書の創世記とを比較すると其趣は大分異つて居る。それはヘブリユウの思想が當時既に一神教を信じて居たことも原因して居るであらう。カルデヤ神話や古事記の様に八百萬の神の會議などと言ふことも無く、諸神生成の叙事も存在しない。ヘブリユウの舊約聖書の初頁には

三大創世記の類似

次の様な記事がある。

『元始に神天地を創造りたまへり。地は定形なく、曠空くして、黑暗淵の面にあり、神の靈、水の面を覆ひたりき。神光あれと言ひたまひければ光ありき。神光を善しと觀たまへり。神光と暗を分ちたまへり。神光を晝と名づけ、暗を夜と名づけたまへり。夕あり朝ありき。是れ首の日なり。神言ひたまひけるは、水の中に穹蒼ありて水と水を分つべし。神穹蒼を作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを別ちたまへり。即ち斯くなりぬ。……神言ひ給ひけるは、我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造り、之に海の魚と、天空の鳥と、家畜と全地と、地に匍ふ所の諸の昆蟲を治めしめんと。神其像の如くに人を創造りたまへり。即ち神の像の如くに之をつくり、男と女に創造りたまへり。神彼等を祝し、神彼等に言ひたまひけるは、生めよ繁忙よ地に滿益よ、之を從服せよ、又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸ての生物を治めよ、云々』

かくてエホバ神は『土の塵を以て人を造り、生の氣を其鼻に吹入れたまへり。』是れがアダムである。エホバ神は其アダムを、エデンの東方に設けた園に置いた。そして『エホバ神、其人に命じて言ひたまひけるは園の各種の樹の果は汝意のままに食ふことを得、然れど善惡を知るの樹は汝その果を食ふべからず。汝之を食ふ日には必ず死ぬべければなり。』エホバ神は、アダムが熟睡する間に其一本の肋骨を取つて女を造つた。其れはアダムの妻となつた。アダムの妻は智慧の實のなる樹を見て其誘惑にまけた。そして先づ自ら之を食

ひ、次で之を其夫に與へた。之に因つてアダムと其妻エバとはエデンの園から追はれた。それから人類は繁殖したが、神は其墮落の狀を憎んで、遂に大洪水を來らした。それがノアの洪水である。然るに其大洪水で救はれたノアの子孫は又繁昌した。そしてソドムとゴモラとの人民は再び神の怒りに觸れて大天災を下されて滅亡した。

七、洪水の傳説

此大洪水の傳説がカルデヤの傳説から出たものであることは諸學者の一致する處である。カルデヤの洪水傳説は随分長い英雄物語的の史詩を成して居る。前のチャマトの傳説も海の徵象が叛亂をするので、洪水と殆ど同じ様な意義を持つたものと解釋することが出来る。舊約聖書にノアの洪水とソドム、ゴモラの大天災とを記すのと同様である。

古事記神話中には、最初にイザナギ、イザナミの二神が天の沼矛を以て、たゞよへる國を修理した、といふ簡単な記事があり、次に須佐之男命が『よさし給へる國を知らさずして、八拳鬚むなさきに至るまで、なきいさちき。其泣き給ふ狀は、青山を枯山なす泣からし、河海は悉々に泣き乾しき。是を以て惡ぶる神の音

なひ、狭蠅なす皆満き、萬の物の妖ひ悉々に發りき。』といふ社會騷亂の歴史を傳へて居る。此記事は恰もカルデア傳説のチャマト叛亂にも類し、又、スサノヲ命が我が所命の海原を知らさずして騷亂する様は洪水傳説の轉化せしものと見ることが出来る。古事記編纂時代の日本には大洪水を以て萬民滅亡を來らす程の大河川無く、從て洪水の傳説を其儘編入することが出来なかつたのであらう。前の『たゞよへる國』の記事も洪水の傳説と見ることが出来るにも係はらず、頗る簡單なのである。又、スサノヲ命は再度叛亂を行つて居るが、此處には聊かも洪水的の記事を留めないで、寧ろ此一條こそカルデアのチャマト叛亂の傳説に酷似して居るのである。即ちスサノヲ命が『勝さびに、天照大御神の營田の阿離ち、溝埋め、亦其大嘗考しめす殿に糞まり散し……天照大御神忌服屋に坐まして、神御衣をらしめ給ふ時に、其服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墮し入る時に、天の衣織女見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。是に、天照大御神、見かしこみて、天の石屋戸を閉て、刺しこもり坐しましき。すなはち、高天の原皆暗く、葦原の中つ國悉々に闇し。此れに因りて常夜往く。是に萬の神の大聲は、狭蠅なす皆わき、萬の妖ことごとに發りき』といふ記事は殘暴なチャマト叛亂に酷似するのである。

そして前にも言つた通り、チャマト征服の武神マルデュクが山陰に匿れて八百萬の神と出征の評議を凝らした事件は、恰も天照大御神の石屋戸會議に鬚髯し、春の太陽たるマルデュクの勝利は同じ太陽たる天照大

御神の石屋戸より出現したる光景と對比することが出来る。

舊約聖書の創世記にては、エホバ神は、最初アダムとエバとが智慧の果を喰つたのを憤つて、彼等をエデンの園から放逐し、次で大洪水を送つてノア一族の外は總ての人類を罪惡の塊りだとして滅して了ひ、更にソドムとゴモラの人民はエホバ神の激怒に觸れて殄滅せしめられた。然るにカルデアのチャマト叛亂や洪水の傳説にも、又古事記のスサノヲの命の事件にも、天神が人民を懲戒するといふ意味は聊かも含まれて居ない。粗暴野蠻の状態は可なりに現はれて居るが、然し至つて單純で小供らしい事件である。殊にカルデアの傳説も、日本古事記の神話も、此大問題を決するに八百萬の神の大會議を以てした點は、一神教たるヘブリユウの傳説と甚だしく其趣を異にして居る。

八、世界創造の順序

さて、武勇にして春の太陽を徵象するマルデュク神は、チャマトを征服した後、萬物の創造に着手した。先づ天の諸星を整理して一年を十二月に定め、七日を以て半月冠を造り、十四日にして満月冠を現はした。世界最古の陰曆は是から始まつたのである。更に彼は其れからバビロンを創造した。

『マルデユクは諸水の前に堤防を築いた

彼は塵埃を造つて堤防の近傍に撒布した

諸の神を心地よき住居に在らしめる爲めに

彼は人間を造つた。

アルルは彼と共に人間の種を造つた。』

アルルは女神である。バビロンの半歴史的、半神話的の人物ジルガメスの詩中にもアルルの名は出て来る。ジルガメスの同伴者エアバニを造つた者は即ちアルル女神である。アルル女神は、アヌ神の僂を其心の中に形づくり、其手を洗ひ淨め、粘土を捏ねて其れを地上に投げた。かくして女神は元氣あるエアバニを造つた。さればエアバニは、舊約書のエホバ神が土を以て造つたアダムの模型をなすといふても宜しからう。神の詩は尙ほ續く、

『彼（マルデユク）は野の獸物や凡そ田舎に生活する總てのものを造つた。

彼はチギリスとユウフラテスを造つて、之を其地位に置いた。

彼は歡びを以つて其等の名を呼んだ。

彼は芝生や、牧場の草や、葦や、樹木を造つた。

彼は野の草木を造り、

國々や、牧場や、

牝牛や、仔牛や、牝羊や、仔羊や、

森や、林や、を造つた。』

マルデユク神は、煉瓦を重ねて壁を造り、家を作り、町を建て、町に群衆を置き、ニツプルを造り、エキユルを建て、エレクを作り、エアナを建てた。（註）

（註） Loisy "Les Mythes Babyloniens" 六五頁参照

カルデア神話にては、マルデユク大神が、アルル女神と共に造りたるは勇者エアバニだけで、他の一切の創造はマルデユク神が獨りで行つた。然るに古事記神話に於ては之と全然反對で、イザナギ神はイザナミ神と交合して諸國諸神諸物を創造し、唯だ最後に獨りにて天照大御神と月讀命と須佐之男命とを生ませられた。古事記神話中最も重要な地位を占めて居る此三柱の神がカルデアのエアバニの誕生と反對に男神のみより生れたのは奇である。唯だエアバニを産むべくアルル女神が先づ手を洗つたのに對して、イザナギの命は先づ身を滌ぎ、左眼を洗つた時に天照大御神が生成し、右眼を洗つた時に月讀命が生成し、鼻を洗つた時に建速須佐之男命が生れたといふ。アルル女神も、イザナギ男神も、共に身を清めた處に深い意味が潜んで居る。

九、古事記の創造説

イザナギ、イザナミ二神は、天神より受けたる天の沼矛を以てオノゴロ島を造り、『其島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき』といふ。之から結婚式になる。

『こゝに其妹、イザナミの命に、汝が身は如何に成れると問ひ給へば、吾が身は成り成りて、成り合はざる處一處ありと曰し給ひき。』

こゝにイザナギの命のり給ひつらく、我が身は成り成りて成り餘れる處一處あり。

かれ此吾身の成り餘れる處を、汝が身の成合はざる處に刺しふさぎて、國土生み成さんとおもふは奈何にと詔り給へば、イザナミの命、しか善けんといひ給ひき。こゝにイザナギの命、然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、みとのまぐはひ爲せと詔り給ひき。

かく言ひ期りて、乃はち汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむと詔り給ひ、約り竟て廻ります時にイザナミの命、先づアナニヤシエヲトコヲと言ひ給ひ、後にイザナギの命、アナニヤシエヲトメヲと言ひ給ひき。』

かうして二神は日本史上最初の男女交合を試みたが、最初のは成就せず、水蛭子ひるこを生み給ひ、此子は葦船に入れて流しつた。是れは舊約書のモオゼが葦船にて棄てられたことを思ひ出させる。イザナギ、イザナミ二神は更にやり直しを行つて今度は成功した。そして諸島國を生んだ。之を大八島國といふ。二神は國を生み竟へて更に諸物諸神を生みましました。

『次に海神、名は大綿津見神おほわたづみを生みまし、

次に水戸神、名は速秋津日子神

次に妹、速秋津比賣神を生みましき。

.....

次に風神、名は志那都比古神を生みます。

次に木神、名は久久能智神を生みます。

次に山神、名は大山津見神を生みます。

次に野神、名は鹿屋野比賣神を生みます。

.....

次に生みませる神の名は、鳥之石楠船神、亦名は天之鳥船と謂す。

三大創世記の類似

次に大宜都比賣神を生みまし、

次に火のやぎはやをの神を生みます。」

此創造の順序や状態が、カルデアのマルデュク神の其れと符節を合す如くであることは不思議なほどに感ぜられるであらう。此中、天の鳥船は多分交通の神であらう。大宜都比賣は食物或は農業の神であらう。何となれば須佐之男命に關聯して次の如き記事があるからである。『こゝに大げつひめの鼻口又は尻より種々の味物たみものを取出して、種々作り具へて、奉る時に、須佐之男命、其態しむぎを立ち伺ひて、きたなきもの奉ると思ほして、乃ち其大げつひめの神を殺し給ひき、かれ殺させ給へる神の身に成れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻穗生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰ほとに麥生り、尻に大豆生りき、かれ是に、神産巢日御祖の命、これを取らして、種となし給ひき。』

以上に叙述した如く、カルデア神話の創世記と日本古事記の創世記とは、其の順序に於て、其思想に於て極めて類似したものであることは何人も疑ふことが出来ぬであらう。西洋の學者は、ヘブリユウの創世記がカルデアの神話から出たと信じて居るが、古事記神話がカルデア創世記に近いことは、ヘブリユウの其れよりも勝るのである。

十、八尋殿の交合

本章を終るに當つて、尙ほ一事の記すべきことがある。其れは前にも掲げた、イザナギ、イザナミの兩神の『ミトノマクハヒ』の一條に就いてである。古事記に曰く、

『其島(オノゴロシマ)に天降あちりまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき。こゝに(イザナギの命)其妹イザナミの命に、汝が身はいかに成れると問ひ給へば、吾身は成り成りて成り合はざる處一處あり、と曰し給ひき。こゝにイザナギの命のり給ひつらく、我身は成り成りて成り餘れる處一處あり、かれ此吾身の成り餘れる處を、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土生み成さんとおもふは奈何にと詔り給へば、イザナミの命、しか善けんまなと曰し給ひき。こゝにイザナギの命、然らば吾と汝と是天の御柱をまな行き廻り逢ひて、ミトノマクハヒなせと詔り給ひき。かく言ひ期りて、乃ち汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむと詔り給ひ云々』

此記事に對し、久米邦武氏は『マクハヒとは上國下國合體の約の成りたるに喩ふ。其時二尊が柱を左旋し右旋せし事を記したるは陰陽説の附會にて取るに足らず』と苦も無く叩き付けて居る。久米邦武氏の様に、

何もかも戦争ごつこや我利我利亡者の政略運動と解釋されては、古事記の記者の靈も一千數百年後の今日を振り返つて、さぞ泣いて居るであらう。久米博士の様に解釋されては、あの美しい詩、あの無邪氣な神話もメチャクチャである。勇武無邪氣にして同時に詩情に富んだ天孫民族の特徴といふものは總て破壊されて了ふ譯である。私は此美しい記事は、其文字の儘に解釋して、之に依つて上古の天孫民族の生活を覗ひ、古事記記者の眞摯な態度を讚美したいと思ふ。

柱或は神木を廻りて結婚式を行ふ風俗は、三千年以前からヒンドウクツシュの谿谷地方に行はれて居た事實である。そして其ヒンドウクツシュはカルデヤの隣接地といふても可い地方である。此風俗は他の諸事實と共に日本に傳はつたものと見ることが出来るかも知れない。エリゼ・ルクリュは『地人論』中に右の印度の風俗を記して曰く、

『結婚に最も大きな格式を興へる儀式は、樹木や雜草に古い友情を證明することである。其原始的な徴象に於て、蓮の蕾や、花や、果實や、花束や、花飾りや、喬木或は灌木は、人間の上に同情友愛を注ぐものだといふ意味を表はす。若き乙女は自ら小さな灌木の妹と考へ、其愛人を以て立派な大木の兄弟と信ずる。……従つて結婚に際しては、乙女は先づ花冠を着け、手に葉と果とを携へて、幾度か一の神木を廻る。是と同時に其戀人は種々な抱擁の身振りをして他の神木を刺激する。』(註)

(註) Reclus 氏 『L'homme et la terre』第三卷一四六頁

此の如き詩的な生活事實が言ひ傳へられ、或は行ひ傳へられて古事記の記事となつたと見るとは、決して無意味では無いと思ふ。併し尙ほこの『柱』はカルデヤ神話中でも最も大きな感化を西方亞細亞に與へた『アシラ像』から由來したものであるかも知れない。舊約聖書に出て居る『アシラ像』は即ち女性を徴象化したものである。

自昔懷清賞。 神遊杳露間。
如今不是夢。 眞箇是虛山。

第四章 黄泉國の傳説

一、古事記の記事

古事記神話によると、イザナミの命はイザナギの命と共に諸國諸神を生みたる後、火のカグツチの神を生んだが『此子を生ますにより、ミホト彥かえて病臥せり。……火神を生ませるに因て、遂に神さりましぬ』然るにイザナギの神は、其最愛の女神戀しさに黄泉國に尋ねて行つた。古事記は其時の光景を次の如くに書いて居る。此記事が如何にもカルデヤの神話に似て居る故に、私は之を比較して見たいと思ふのである。

『こゝに其妹伊邪那美命を相見まく欲して、黄泉國に追ひ往でましき。すなはち殿騰戸より出向へます時にイザナギの命語らひ給はく、愛しき我なもの命、吾と汝と作れりし國、いまだ作り竟へずあれば、還へりまさねと詔り給ひき。』

『こゝにイザナミの命答へ給はく、悔しきかも速く來まさずて、吾は黄泉戸喫しつ、然れども、愛しき我なせの命、入來ませる事、かしこければ、還りなんを、まづ具らかに黄泉神と相論らはん、我をな見給ひそ。かく白して、其殿内に還り入り坐せる間、甚久しくて待かね給ひき。』

『かれ、左のみ、づらに刺せるゆづつまくしの男柱一つ取り闕きて、一つ火燭して、入見ます時に、うじたかれとろろぎて、御頭には大雷居り、御胸には火の雷居り、……合せて八雷神成り居りき。』

『こゝにイザナギの命、見畏みて、逃返ります時に、其妹イザナミの命、吾に辱見せ給ひつと言し給ひ、やがてヨモツシコメを遣はして、追はしめき。』

『また、後には、かの八種の雷神に千五百の黄泉軍を副て追はしめき。』

二、久米邦武氏の所説

日本古代史の權威久米邦武氏は、此記事を以て、諸尊の出雲鎮定の計畫を記したるものとなし、『火の神の一段は、其が原因となりて上國下國の合和が破壊となりたることの譬喩なるは明らかなれども、之を事實と

して解するには参考の料なきに苦しむなり。火神はたゞ海川以下の例を推して亦伴造國造の一なるを知る。再命(イザナミ)の本國たる出雲の急要地に變を生じたるによつて、再尊は耦神の位をすてて遽に歸國ありたるを、神さり給ふに譬へたるものと見る解釋は大方は違はじ『諾尊(イザナギ)は火神の處分に時日を移し、兵を隨へて出雲の鎮服に赴き給へば、出雲の激黨は既に再尊を要して反抗せん事を決し云々』と述べて居る。(註)

(註) 日本時代史古代上、七一―二頁

是れは決して平凡な解釋ではない。古代人の神話的感情を無視して、政治的な、近代的な、巧利主義的な解釋と想像とを無限に延長するならば右の如き意味も出て來るであらう。併し、古事記の文章中、唯だ『千五百の黄泉軍』といふ文字のみが些か戦争を想像せしむるの資料となるばかりで、其他の點には其様な想像を喚起すべき文字は一つも無い。又假令、久米氏の如き解釋を施した處で、然らば、何故に右の如き政治的の事件に『黄泉國』だの『神さり』だのといふ譬喩を借りて來たか? といふ疑問が起つて來る。是れは如何に解釋すべきであらうか。古事記の註釋中には、黄泉國の思想は印度佛教思想から由來したのだと説いたのがある。或はさうかも知れない。けれども、古事記に表はれた黄泉國の思想には決して宗教的の色彩が出て居ない。あれは全然ブリミチーヴな民族の思想で、寧ろ佛教や基督教の地獄思想の起原をなしたものと知るべきである。

るべきである。

三、カルデヤ神話

然るに其佛教や基督教の思想の本源が何れもカルデヤに存し、そして其カルデヤ神話中に、古事記の黄泉國と殆ど全然一致すると思はれる様な事實があるのは驚くべきである。そこで私は茲にカルデヤ神話中の一部を摘録して見ようと思ふ。其神話はイシュタル女神が若き戀神タムヅを慕ふて黄泉國の門に到着し、茲で英雄神ジルガメスの爲めに拒否されるといふ筋である。古事記の方では黄泉國に下つたものは女神で之を慕ふて行つたイザナギ神が男になつて居て男女が轉倒して居るが、事情は極めて類似して居る。

『誰一人歸つて來ない國、暗黒の場所に、

シン(註)の娘イシュタルは意を傾けた。

(註) シンは支那語の神の起原ならん

イルカラ神の坐所、暗黒の館に

一度入れば出づること無き家に

黄泉國の傳説

一度通過すれば歸へることなき道に
其訪問者は必ず光明を絶たるゝ家に
塵埃をパンとし泥濘を食料とする所に
シンの娘は意を傾けた。

不歸國の門に近づいて、イシュタルは
其門番に言葉をかけた

オ、門番よ、お前の門を開け！

お前の門を開け、私が這入れる様に。

若しもお前が、私を入れぬ爲めに、其門を開かぬならば

私は其扉を打ち其門を破壊するであらう。

私は其闕を破り、其扉を打放すであらう。

私は死を復興し之に喰はしめ生かすであらう。

.....

門番は口を開き女王イシュタルに曰ふ、

「待たれよ、オ、貴婦人！

何とぞ其處を壊さない様に！

私をして、アラツ女王に通ぜしめ給へ。」(註)

(註) King "First Step in Assyrian" 一八二—一八五頁、楔形文字註釋より摘録す

其不歸暗黒な國の狀態は、古事記黄泉國の狀態に髣髴たるものがある。『訪問者は必ず光明を絶たれ、塵埃をパンとし泥濘を食とする』有様は、黄泉國の『一つ火ともして、入見ます時に、蛆たかれ、とろろぎて(註).....八の雷、神成り居りき』といふに殆ど同じである。

(註) とろろぎは、トロケテといふ意である

四、イシュタル女神

次にイシュタル女神がジルガネスと戀の問答をする件がある。是れが果して黄泉國の事件の続きであるかどうか判然せぬが、併し、其中にイシュタル女神の若き時の配偶タムツ神に關する問答が行はれて居る。そ

してジルガメスは遂にイシュタル女神を受け容れないで之を追ひ還へして居る。此イシュタル女神の戀人タムヅは太陽神で其太陽神が暗黒の國に隠れたといふことは、古事記の天照大神岩屋戸御閉居と同様な意味が含まれて居る。併し天の岩屋戸會議の事實は寧ろカルデア神話のマルデユク神が山陰にて八百萬神と軍議を凝したといふ方に近似して居るのである。多くの時と處とを隔てて傳はつた神話であるが故に、甲の事實が乙話に混入し、乙の一事實が甲の方に入り、或は一事件が二事件中に分出され、或は二事件が一事件となつて混成された點もあらう。是れはヘブリユウの舊約神話とカルデア神話との關係に於ても極めて屢々見される事件である。

イシュタル女神が傳說的又は宗教的に西方亞細亞に残した印象は頗る大きなもので、シリヤ、パレスチン、小亞細亞等の神話、傳説、宗教を研究する者に取りては極めて重大な問題となつて居る。是れに就き英國ヒツチトロジイの權威サイス博士は次節の如く言ふて居る。

五、女神と西方亞細亞

『埃及王ラムゼスとカデシの王とが締結した條約文に由ると、ヒツチトの最高神はステク (Sutekh) と稱は

れ、女神はアンタラタ (Antarata) と言ふ。セミチツクのアシトレト (Ashitoreh) である。然るに其後になつてカルケミシの女神はアタルアチ (Ater Ahi) といふ名前知られて居る。之を希臘人はアタルガチス (Atargatis) とかデルケト (Derkeho) といふ様な風に變へて了つた。而してデルケトはセミラミスの事だなどと訛傳され、其セミラミスは又アツシリヤ女王であるなどと希臘人に傳へられた。併し其セミラミスとは實際イシュタル女神のことで、カナン人は之をアシトレトと呼び、カルケミシのアラメヤは之をアタルと名づけたのである。デルケトはセミラミスの別名で、此名に依て此亞細亞の女神が傳へられたのである。鳩は此女神に奉獻された。……デルケトはフリジャにてはキベレ或はキベベといふ名で知られ、『大祖母』の稱號を以て崇拜された。其像は乳房を以て蔽はれて居る。其れは人類が其生命の資料を搾出す所の母地を徵象する爲めである。此女神の諸性質はバビロニヤのイシュタル、カナンのアシトレトから借り來つたものである。カルケミシにて發見されたる浮彫は、裸體にて、高き冠を戴き、兩手を兩乳房の上に置き、兩肩の背後から羽翼がそびえて居る。此女神がヒツチトの上に大勢力を有つて居たことは、是れバビロニヤ宗教が此民族の上に及ぼした感化を物語るので、又従つて、此民族に依つて小亞細亞の人民の上に傳播されたことを明らかにするのである。……バビロニヤのイシュタル女神は、其子にして花婿たる若き太陽神のタムヅを伴ふて居る。此神の夭折の神話は民衆の心裡に深い印象を與へた。ゼルザレムに於てすら、エゼキルは、其神

殿の扉の内に、タムヅの死を悲しむ婦人の落涙して居るのを見たほどである。シリヤにてはタムヅ神はハダドと稱ばれ、リムモン神と同一視せられる。ゼカリヤがメジドの谷に於けるハダト・リムモンに就いて語つたのも是れである。(註)

(註) 撒加利亞書第十二章一節

六、アシラと柱

イシュタル女神がヒツチト民族によりて遠く小亞細亞及びパレスチンにまで其勢力を及ぼしたことは前述の如くである。此イシュタル(或はイスタル)女神がゼルサレム神殿に位を占めてアシエラ(Asherah)と呼ばれたことは學者の信する處である。(註)

(註) 本書第十七章第三節参照

そして此アシラの語こそ、日本に傳はつて『柱』となつたのだといふ人のあることを私は聞いた。古事記に幾柱の神などといふ其柱である。諸神を數へる言葉である。私は本書『第十三章天孫民族』中に柱の語はヒツチトの形象文字から出来したのであらうと説いたが、若し其形象文字と『アシラ』の語とを照合したな

らば此間に新しい發見をなし得るかも知れないと思ふ。聖書にあるアシラ像と言ふは如何なる形體を持つたものであるか。其像とヒツチトの形像文字とは果して何等の關係もないか。是れも興味ある問題である。併し、今日は唯だ此問題を遺すだけで其研究を進める時間を持つて居ない。

七、地獄思想の傳播

イシュタル女神の神話と同時に、黄泉國の思想も諸方に傳はつた。殊にヘブリユウ民族の思想中に深入したことは諸學者の共に信する處である。ヘブリユウ民族にとりては、埃及は黄泉國或は地獄と同様に見られた。アブラハムもモオゼも此國を脱出して居る。カルデヤの黄泉國思想を埃及に適用したのだらうと學者は言ふ。ヘブリユウ民族思想の特徴たる神罰の對象となつたソドムとゴモラの譬喩も正しくカルデヤの地獄思想を借りたのだと言はれる。佛教の地獄思想がカルデヤから傳つたことも亦學者の疑はない處である。

以上叙述した處の事實は、人をして黄泉國の思想がカルデヤから出て來たことに合點せしむるであらう。其傳達者が誰であつても、或はヒツチト民族、或はセミツツ人、或はマレイ人、或は又バクトリヤ人、何れであつても、兎に角、其起原をカルデヤに發したことは蓋し疑はれぬであらう。

第五章 四つの結婚の類似

一、四つの結婚

私は第十四章『出雲民族』中に於て、大國主神はイスラエル人のアブラハムであると書いた。大國主神が其後裔に大三輪氏を有して、日本の宗教々權を一族に集め有した點も、アブラハムの後としてふさはしいことである。然るにアブラハムの子イサク及び其子エソウ及びヤコブの傳記と古事記の穗々手見命及びニギの命の生涯とに多くの類似點を存してゐることは更に驚くばかりである。

日子穗々手見命即ち火遠理命は其兄火照命との間に、海さち山さちの事に就いて争ひを生じ、鹽椎の神の助言を得て、海神の女豊玉比賣と婚を結ぶに至る。然るに其結婚の媒介となるのが井であつた點がアブラハムの子、イサクの結婚の場合と全然其光景を同じくし、そしてイサクの子のエソウとヤコブとの相續争ひが

火照、火遠理二尊の相續争ひと頗る似寄つて居るのである。

更に又、ヤコブとラバンの二人娘との結婚事件と、ニギの命の大山津見神の二人娘に對する關係が符節を合せた如くなのも不思議なほどである。

二、穗々手見命

私は先づ古事記の記事を拔萃して穗々手見命の相續争議のことより結婚の一條に至る大略を示し、それから之に比すべき舊約書の記事を紹介し、最後に些か私の註解を加へやうと思ふ。古事記は記して曰く、『火照命は、海さち比古として、はたのひろもの 鱈廣物、はたのさあもの 鱈狭物を取り給ひ、火遠理命は、山さち比古として、けのあらもの 毛麤物を取り給ひき。こゝに火遠理命、其兄火照命に、各かたみに佐知を易へて用ひてむといひて、三度乞はししかども、許さざりき。然れども遂に繩かに得かへ給ひき。かれ火遠理命、海佐知を以て魚釣つりすに、都かつて一魚ひとをも得給はず。亦其鉤をさへ海に失ひ給ひき。

こゝに其兄火照命、其鉤つりはりを乞ひて、……今は各々佐知返へさむと謂ふ時に、其弟火遠理命答り曰く、汝の鉤は魚釣りしに一魚も得ずて、遂に海に失ひてきと詔り給へども、其兄あながちに乞ひはたりき。

四つの結婚の類似

こゝに其弟、海邊に泣き思ひ居ます時に、鹽椎の神來て問ひけらく、……鹽椎の神、我汝命の爲めに善き
議とこほかりせんといひて、即ち無間勝間の小船を造りて其船に載せ奉りて、教へけらく、我其船を押流せば、
や、暫し往いでませ、うまし御路あらむ。乃ち其道に乗りて往いでましなば、魚鱗いづこの如造れる宮室みや、それ綿津見神
の宮なり。其神の御門に到りましなば、傍の井の上に湯津香木あらん。其木の上に坐ませば、其海の神の
御女、見て相議あひまん者ぞと教へまつりき。

かれ教へしまにまに少し行いしけるに、備に其言の如くなりしかば、即ち其香木かぐらに登りて、坐ましき。

こゝに海神の女、豐玉比賣とよたまひめの從婢まかたち、玉器たまひを持て水酌みづしやくまむとする時に、井いに光かあり、仰あぎて見れば、麗うしき
壯夫あり、いと異奇とおもひき。

かれ火遠理命、其婢を見給ひて、水を得しめよと乞ひ給ふ。婢まかたち乃ち水を酌しやくみて、玉器に入れて貢進こうしんりき。

こゝに水をば飲給はずして、御頸の瓊たまを解かして、口に含みて、其玉器に唾つよき入れ給ひき。

こゝに其玉、器につきて……得離とたず、玉つけながら、豐玉比賣命に進まりき。かれ其玉を見て、婢に、若
門の外に人ありやと問給へば、我井の上の香木の上に人坐ます。いと麗うはしき壯夫にます。我王にも益えきり
て甚と貴し。かれ豐玉比賣命奇しと思ほして、出で行いて乃ち見感みかて、目合まぐはして、其父に、吾門わがとに麗うしき人

いますと白し給ひき。

こゝに海神自ら出見て、此人は天津日高の御子、そら津日高にませりといひて、即ち内に率もて入れ奉りて、
美智みちの皮かわの疊かさね八重をしき、亦繩なづな疊かさね八重を其上かみに敷しきて、其上かみに坐ませ奉りて、百取ももとの机代きよしろの物を具もへて、御
饗あして、即ち其御女豐玉比賣とよたまひめを婚よめせ奉りき。故三年といふまで、其國に住給ひき。』

三、山サチと海サチ

以上の文章中、海佐知、山佐知の一條は、兄弟の相續の爭議を記したものであらう。そして是れはアブラ
ハムの孫のエソウとヤコブとの爭議と其傳説の起原を同じうするものでは無いかと思はれる。第一に『佐知』
といふ語が、セミチツク語である。サアダ、サアド、サアチ等の語は何れも幸福の意である。サイド或はサ
イダは其形容詞である。日本にある佐治、佐田、佐渡、齊田、などといふ姓は何れもセミチツク人の姓から
由來したものであらう。言ひ換へれば、バビロン、ヘブリユウ、アラブ等の諸人種の何れからか出たもので
あらう。佛語のサチスフェール (Sachaire) 英語のサチスファイ (Sachisfy) は何れも同語から出たもので、
満足させる或は幸福にするといふ意味の文字である。即ちサチをなすといふ意味である。次に火遠理命が婚

した豊玉比賣は例のサチのアラビヤの邊にありし一族では無いか。往昔ソロモン王と關係したサバの女王の物語なども連想されるのである。サバは即ちサチのアラビヤの一角に位し、上古、寶玉の國として有名であった。豊玉比賣命の名は寶玉の國の一族として、ふさはしい名前である。次に又、『無間まなし勝間かつまの小船』はバビロンやヘブリユウの洪水傳説にある方舟はつぶねと同様のものであらう。或は寧ろモオゼの傳説にある葦舟の様なものであつたかも知れない。

四、エサウとヤコブ

さて此火遠理、火照の二尊の爭議をエサウとヤコブとの爭議に比較すると可なりに其趣を異にしては居るが、参照の爲めに舊約創世記の一節を摘録する。井の媒介によりて良妻を得たるイサクは老年になりて失明したので其長子エサウを召んで曰く、

『視よ我は今老て何時死ぬるやを知らず、然れば請ふ汝の弓矢を執りて野に出で、わがために鹿を狩りてわが好む美味を製り、我にもちきたりて食はしめよ、我死ぬる前に心に汝を祝せん。』
イサクの妻リベカは之を聞き、エサウの出獵の後、其事を次子のヤコブに告げて曰く、

『汝、群畜の所にゆきて、彼處より山羊の一箇の善き羔を我にとりきたれ、我之をもて汝の父の爲に其好む美味を製らん。汝之を父にもちゆきて食はしめ其死る前に汝を祝せしめよ。』(註)

(註) 創世記二十七章九—一〇節

そこでヤコブは母の言に従つて山羊の料理を鹿と偽りて父に供し自らエサウと偽る。父イサクは乃ちヤコブを祝して曰く、

『ねがはくば神、天の露と地の腹あはらおよび饒多の穀と酒を汝にたまへ、諸の民汝につかへ、諸々の邦汝に躬を鞠めん、汝兄弟等の王となり、汝の母の子等汝に身をかゞめん。汝を詛ふ者はのろはれ、汝を祝する者は祝せらるべし。』(註)

(註) 同前二八—二九節

然るに長子エサウは、ヤコブが此祝福を受けて辭し去つた處に獲鹿を携へて歸つて來た。父は眞實のエサウの歸來を聞いて大いに戰兢しながら今行ひしことを告げると、エサウは『大いに哭き痛く泣き……ヤコブを惡めり』

母のリベカは之を知つて、ヤコブに告げ、ハランに居る我兄ラパンの許に逃れしめ、兄エサウの怒の釋けるまで其處に居らしめた。是れは丁度、穂々手見命が三年間、海神の許に留まつたことに相當する。それか

ら、ヤコブも穂々手見命も、再び故郷に歸つて兄と和睦が成立するのである。

五、ヤコブの結婚

然るにヤコブが伯父ラバンの許に居る間に其娘と結婚する記事は却て穂々手見命の父ニギの命の結婚に符合し、穂々手見命の結婚は、却てヤコブの父イサクの結婚と一致して居る。私は今、ヤコブの記事を續けて来たから、茲にヤコブとニギの命との結婚を比較し、次に穂々手見命の結婚に歸へることにする。創世記は記して曰く、

『茲にラバン、ヤコブに言ひけるは、汝は我兄弟なればとて空しく我に役事ふべけんや、何の報酬を望むや我に告げよ。』

ラバン二人の女子を有てり、姉の名はレアといひ、妹の名はラケルといふ、レアは目弱かりしが、ラケルは美しくして妹^{かほ}し、ヤコブ、ラケルを愛したれば言ふ、我汝の季女ラケルのために七年汝に事へん。……ヤコブ七年の間ラケルのために勤めたりしが、彼を愛するが故に之を數日の如く見做せり。

茲にヤコブ、ラバンに言ひけるは、わが期満ちたれば、わが妻をあたへて、我をしてかれの處にいること

を得せしめよ、是に於てラバン處の人を盡く集めて酒宴を設けたりしが、晩に及びて其女レアを携へて之をヤコブにつれ來れり、ヤコブ即ち彼の處にいりぬ。……朝に至りて見るにレアなりしかば、ヤコブ、ラバンに言ひけるは、……汝何ぞ吾を欺くや、云々』

エホバ、レアの嫌はるゝを見て、其胎をひらきたまへり、然れどラケルは妊^{はらみ}なきものなりき云々。(註)

(註) 創世記第二十九章一五節以下

六、ニギの命の結婚

此記事を古事記の木花佐久夜姫の條に對照すると殆んど一致するのである。

『こゝに天津日高日子番のニギの命、笠沙の御前に、麗^{かまよ}き美人^{をとめ}の遇へるに、誰が女ぞと問ひ給ひき。答へ白し給はく、大山津見神の女、名は神アツツ姫、亦の名は木花佐久夜比賣と謂し給ひき。又汝が兄弟ありやと問ひ給へば、我姉、イハナガ比賣ありと答へ白し給ひき。』

かれ詔り給はく、吾汝に目合せむと欲ふは奈何にと詔り給へば、僕は得白さじ、僕が父大山津見神ぞ白さむと白し給ひき。

かれ其父大山津見神に乞ひに遣はしける時に、太く歡喜びて、其姉石長比賣を副へて、百取の机代の物を
持しめて奉出しき。

かれこゝに、其姉はいと凶醜によりて、見かしこみて、返し送り給ひて、唯其弟、木花佐久夜比賣をのみ
留めて、一宿、婚はしつ。

こゝに大山津見神、石長比賣を返し給へるによりて、太く恥ぢて白し送り給ひける言は、我が女二並べて
立奉れる由は、石長比賣を使はしてば、天神の御子の命は、雨零り、風吹けども、恒へなる石の如く、常
盤に不動に坐ませ、亦木花佐久夜比賣を使はしてば、木花の榮へるが如、榮え坐ませとウケヒて貢進りき。
かゝるに今石長比賣を返して、木花佐久夜比賣獨り留め給ひつれば、天神の御子の御壽は、木花のあまひ
のみ坐なむとすと白し給ひき。』

ニニギの命の場合も、ヤコブの場合も、共に兄弟娘二人あり、姉が醜くて妹が美しく、其娘達の父が共に
姉を同時にめあはせやうとし、男子は何れも其美貌の故に妹を選ぶといふことなど、兩方の物語が一致する
のである。舊約書の方の姉のレアは子があるけれども妹のラケルは子が無い。古事記の石長比賣の子は長命
するだらうが、妹の木花佐久夜姫の子は短命だといふ。此一事も亦よく相應するのである。

七、穂々手見命及びイサクの結婚

さて、ニニギの命とヤコブとの記事は此れにて止め、翻つて穂々手見命とイサクの結婚を比較して見よ
う。穂々手見命の結婚の記事は本章の始めに摘録した通りである。即ち穂々手見命は鹽椎の神の助言により
て綿津見神の宮門に至り、井の傍なる湯津香木の下に居ると、豊玉比賣の從婢が玉器を持つて水酌みに來
る。從婢は其麗しい男を見て驚いて之を豊玉姫に告げ、豊玉姫は出て乃ち之と結婚し、火遠理命（即ち穂々
手見命）は此宮に留ること三年の後、故郷に歸へるのである。古事記には火遠理命が井の傍の木の上に登つ
たと書いてあるが、日本書記には『其樹の下に就きて、從倚ひ彷徨みたまふ』とある。此方が事實らしく讀
める。

然らば舊約書のイサクの記事はどんなであるか？

『(アブラハムの僕は) 起ちてメソポタミアに往きナホルの邑に至り、其駱駝を邑の外にて井の傍に跪伏し
めたり。其時は黄昏にて婦女等の水汲にいづる時なりき。……リベカ瓶を肩にのせて出できたる。彼はアブ
ラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルに生れたる者なり。其童女は觀るに甚だ美しく、且處女にして

未だ人に適きし事あらず、彼井に下り其瓶に水を盈て上りしかば、僕はせゆきて之にあひ、請ふ我をして汝の瓶より少許の水を飲ましめよといひけるに、彼、主よ飲みたまへといひて、乃ち急ぎ其瓶を手におろして之にのましめたりしが、飲ませをはりて言ふ。汝の駱駝のためにも其飲みをはるまで水を汲みて飽かしめん、……其人之を見つめエホバが其途に幸福をくだしたまふや否やをしらんとして黙し居たり。……言ひけるは汝は誰の女なるや請ふ我に告げよ、汝の父の家に我等が宿る隙地ありや。女彼に曰ひけるは、我はミルカがナホルに生たる子ベトエルの女なり。又彼にいひけるは家には藁も飼草も多くあり、且宿る隙地もあり……茲に童女走せ行き其母の家に此等の事を告げたり。リベカに一人の兄あり、其名をラバンといふ……ラバンとベトエル答て言ひけるは、此事はエホバより出づ、……視よりベカ汝の前にをる、携へてゆき、彼をしてエホバの言ひたまひし如く汝の主人の子の妻とならしめよ。アブラハムの僕彼等の言を聞きて、地に伏してエホバを拜めり。……是に於てリベカ起ちて其童女等とともに駱駝にのりて其人にしたがひ往く、僕乃ちリベカを導きてさりぬ……イサク黄昏に野に出て黙想をなしたりしが、目を舉げて見しに駱駝の來るあり、リベカ目をあげてイサクを見……イサク、リベカを其母サラの天幕に携れ至り、リベカを娶りて其妻となして之を愛したり。云々』(註)

(註) 創世記二十四章一〇節以下

右の記事に於て、アブラハムの僕は主人の教に従つて少女を求めに遠い旅に出た。博識なる鹽権神の教によりて火遠理命が航海に出たと同じである。井水を媒介の標的としたのも全然同一である。舊約聖書では僕が求妻に出て行き、古事記では命自身が出て行き、又、古事記では從婢が先づ出で會ひ、舊約ではリベカ自ら出で迎へたのである。此點が兩書相轉倒して居る。

八、熱帯地の出來事

抑も井が、結婚といふ人生最重要な事件の媒介をなすといふ一事は特に注意することを要する。私は前にスサノヲノ命の『八雲立つ』の戀歌は雲霧崇拜の意を含み、従つて此歌を生んだ地方は早魃の國であらうと述べた。井の場合も矢張り同様である。飲水を尊重する感情は、熱帯地、砂漠地を旅行した人にして始めて能く味ふことが出来るものである。大國主神の傳説中にも『井の神』の一事あり、此處にも亦井が重要な役目をしてゐる點は深く注意せねばならぬ。即ち火遠理命の此事件が熱帯地或は熱帯に近き砂漠地方に起つたものだといふことが想像されるであらう。更に之を具體的に言へば、此事件がカルデヤ、或はパレスチン、或はアラビヤ、或はアフリカ邊に行はれたことであらうと想像されるであらう。

四つの結婚の類似

次に井の傍に湯津香木があつたといふ一事も亦熱帯地方を想像させるのである。柚とかオレンジとかいふ植物は本来熱帯植物である。加ふるに其熱帯植物が井の傍にあつたといふ點が亦重要である。水分の缺乏せる熱帯地方なるが故に井の傍に植える必要があつたのである。熱帯地でも水分多き處では井は左程に重要では無い。

又、豊玉比賣の從婢が玉器を持つて水酌みに來たといふ記事も注意せねばならぬ。此玉器は一種の壺であると思ふ。日本書紀の一節には之に『瓶』の文字を用ひ、『つるべ』と讀ませて居る。是れは『つるべ』ではあるまい。熱帯地方を旅行する者は、今日も尙ほ大きな壺を以て水汲みに出る少女のビトレスクな姿を薄暮時に見るであらう。創世記にリベカが瓶を肩にのせて水汲みに來たといふ記事は實況を語るのである。又リベカが井に降つて水を汲んだといふ記事も今日の熱帯地方の風俗を思はしめる。是れは『つるべ』を以て汲み出すのでは無い。石段を下つて、瓶に水を滿して頭上或は肩に載せて家に運ぶのである。豊玉姫の從婢も玉器を持つて來て、之から直接に水を飲ましめようとし、又之を持つて家に歸り、主人の姫に示したのである。今日日本に行はれる『釣瓶』で無いことは明らかに想像が出来やう。

九、高田下田

本章を終るに當りて尙ほ一事の記すべきことがある。其れは、火遠理命が綿津見大神の宮を去るに當り、大神が之に教へて、

『其兄高田を作らば、汝命は下田を營り給へ。其兄下田を作らば、汝命は高田を營り給へ』

と言ふた事是れである。抑も此神話時代の日本に果して高田下田の耕作が行はれて居たか。此困難な耕作をせねばならぬ程、平野の缺乏を感じてゐたのであらうか。高田下田を水戦の場所とする程であれば、之は可なりに廣大な範圍に亘つて開拓されて居たことと思はれるが、此様な狀況を我が日本の事實と想像することが出来やうか。私は矢張り之を以てアラビヤの南方、幸のアラビヤ、即ちヒミヤリト地方のことと思ふ。此地方は埃及やバビロニヤと同時代に既に山岳田の水利耕作法が非常に發達して居たのである。他の諸種の記事から考へても、此事件が同地方に行はれたと想像することは決して無理ではないと思ふ。(註)

(註) 本書第二章八節參照

以上の諸記事により、四つの結婚が互に符節を合す様に似て居るばかりでなく、諸種の事實が熱い地方、早魃の地方を連想せしめるといふことに、何人も合點するであらう。但し古事記の神話がヘブリユウの傳説其ものから由來したのであるか、將た又、ヘブリユウ神話も古事記神話も、共に或る他の神話——カルデア神話の如き——から出たものであるか、今日にては尙ほ明言はできぬにしても、この三神話が密接してゐることは争はれない。

第六章 日本短歌の起原

一、希臘三十一文字

古事記に出て居る最初の歌はスサノヲ命の『八雲立つ』の戀歌である。そして此歌は古事記の他の場所にある諸歌よりもずつと新らしいものだといふ説もあるが、併し、三十一文字の歌としては日本最古のもものと見てもよろしからう。然るに此三十一文字は希臘古代に行はれた三十一シラブルの短歌から來たものでは無いかと西洋の學者は言ふ。(註)日本を征服した民族が、もつと古いトラジションを日本へ持つて行つたものに相違ないと言ふ。

(註) Munsterberg "Influences Occidentales dans l'art de l'extreme orient" 一七頁

併し私から言へば、希臘に行はれたといふ三十一シラブルの短歌こそ我が天孫民族たるヒツチトに依つて

希臘に傳へられたのではないかと思はれる。何となれば、私は楔形文字で書かれたアツシリヤの古文書から五句三十一文字の短歌を発見するからである。アツシリヤの古文書はバビロンの其れに多少の變更が加へられて居るかも知れない。更にスメル・アツカド時代の言語に比すれば可なり多くの變化が存在するに相違なし。

今私の紹介しようとするアツシリヤ古文書は大抵其スメル・アツカド時代から傳はつたものらしいので、少くとも今日から五六千年以前に行はれたといふことが出来る。従つて原始的の文字に對して多少の變化が加へられて居るかも知れない。併し其言語は些か變化して居るとしても、其歌の形式や調子といふものは大體變化を受けずに歌ひ傳へられたものと思ふ。そして此古いバビロンの短歌は、バビロン文化と同時にヒツチトによりて希臘人に傳へられたのでは無いか。但し、希臘短歌の歴史を詳知しない私は、之を強説するほどの確信を持つて居ない。

二、バビロンの三十一文字

アツシリヤ楔形文字を以て書かれた神話の多くは、皆一種の有律文を成してゐる。多くの神話學者はその

有律文を読んで驚異と讚美とを極めて居る。然るに其文章のリズムが多く古事記に出て居る長歌のリズムに酷似して居るのは一層私を驚かしたのである。殊に之を讀過する間に非常に屢々五七調或は七五調に遭遇する事は吾々日本人に對して言ひ知れぬ快感を與へるのである。私は茲に三十一文字の一例としてバビロンの日出讚美の歌を二首紹介して置く。但し此歌はアツシリオロジイの權威キング氏のドキュメントでは恰も二首を合せて一篇として居る様に思はれるが、歌の意味及び形式から見ても之を二首とする方が宜しいと思ふ。

イル、シャマシュ（オ、日の神）イナ、インドシャメ（み空の涯に）タブハムマ（燃え出でぬ）シガル、シャメ、ルチ、タブチ（輝やく天の門を開き）ガラ、シャメ、タブタ（天の扉を開きて）

此歌の第四句は大分字餘りになつて居る様に見えるが、原語の音を假名文字に譯した結果かうなつたので原語にては八シラブルを以てなり、唯一字の字餘りなのである。尙ほ右の歌を日本の短歌風に譯すと次の様になる。拙いけれども意譯の儘である。

おゝ日の神、大空の涯に、燃え出でぬ、御門開きて、扉開きて。

第二首は次の如くである。

イル、シャマシュ（日の神は）アナ、マチ、リシカ、タツシャ（首を揚げて）イル、シャマシュ（日の神は）メラムメ、シャメエ（天の光明をもて）マタチ、タクツム（地を蔽ふ）

イルシヤムシイナイシシマメ タポハムマ
 シガレ シヤメ ルチ タポチ タラ
 シヤメ タポタ イルシヤムシ アサ マチ
 シヤメエ マタ チ タクツム

歌の『美讃田の口』の字文形楔ヤリシツア一圖六十第

此第二句も大分長くなつて居るが、原語ではハシラブルに過ぎないのである。即ち翻譯した爲めに長くなつたに過ぎない。歌の意味は挿入されたる文字にて充分に了解されるであらう。

右の二首の歌の如きは、私の讀んだ極めて少數のドキュメントの中から発見したものに過ぎない。少し多くの時間を有する人が氣長に調べて行つたならば、随分多くの興味ある発見をなし得るであらうと思ふ。

第七章 岩屋戸會議の神話學的研究

〇一、冬と夜との徵象

私は、古事記神話を以て、純神話と歴史とを混合せるものと考へる。或は之を神話的傳説と社會的傳説とを混合したものと云ふ方が適當であるかも知れない。殊にかの天の岩屋戸集會の一條の如きは、其最も著しき事件である。而して私は次章に於て其社會生活の方面に就いて説明を試みるつもりなれば、本章に於ては主として其神話學的研究を試みようと思ふ。

天の岩屋戸集會の召集せられし原因たる須佐之男命の事件は、大和民族の社會生活を研究する上に極めて重大なる事實であるが、之を神話學の資料とする時は、更に意味深く趣味多き記録であると思ふ。此事件に於て天照大神が太陽を象表し給ふことは何人も之を承認する。須佐之男命の事に就いては或は之を以て暴

風の人格化されたものと主張する者もあるが、私は此神を以て冬と夜との徴象なりと信ずるものである。

『須佐之男命、よさし給へる國を知らずて、八ツカ鬚、胸さきに至るまで啼きいさちき、其泣き給ふ状は青山を枯山なす泣からし云々』

その『青山を枯山なす』といふ一句の如きは、如何にも冬をシムボライズしたる文字と解釋するの外いたし方が無い。かくて須佐之男命は伊弉岐命の怒に觸れて追放せられ、さて天照大御神に會はんとて高天の原に上つて行つた、之を聞いた天照大御神は大いに驚きたまひて、

『我那勢の命の上り來ます由は、必ず善はしき心ならじ、我國を奪はむと欲すにこそと詔給ひて……弓腹ふり立て、堅庭は向股に踏なつみ、沫雪なす蹶散らかして、云々』

とばかり其登上の理由を問ひ給ふた。其『我國』とは即ち高天の原、太陽の國、光の國を意味する。然るに其日光の國の主神が『沫雪なす蹶散らかして』伊都の男建踏み建ひだ、とあるから、其既に雪深き冬の國が迫つて居たことが分る。然るに須佐之男命は自ら邪心無きことを誓ひ、其證據にとて天照大御神に對し、『各々宇氣比て子生まな！』と言ひ、兩神の間に幾柱かの御子を生み給ふた。天の忍穗耳命も實に其内の一柱の神であつた。然るに須佐之男命は之に勝ち誇りて、暴動を起した。此に於て、『天照大御神、見畏みて、天の岩屋戸を閉て、刺こもり坐まし』『即ち高天原皆暗く、葦原中つ國悉に闇し、此れに因りて常夜往く』といふ

有様になつた。夜の國は冬と共に來襲する。太陽の道が低くなれば低くなる程、夜は長くなる。そして冬は烈しくなる。『常夜往く』の一句は、最も能く冬に對する太古の民の感情を表示したるものである。そして是より安の河原の大集會となり、日光の神の復活となり、世界は明るい喜びの生活に入ることとなつた。

こゝに注意すべきは、古事記神話の多くの記事が熱帯地的雰圍氣を現はしてゐるのに、この二大神の争ひの記事のみは『沫雪』や『常夜』などいふ文字が出て、熱帯地ならざる氣分をたゞよはしてゐることである。これは天孫民族の祖神が北方山岳地から南方熱帯地に降下したことを想像せしめるものではないか。天孫ニニギノ命やホホデミノ命の記事になるとその舞臺が全然熱帯的に變はつて來ることに注意すべきである。

二、諸神話の類似

さて以上の如き寓話的事實は不思議にも諸國の神話に殆んど共通に存することで、之に就いては私の英國の老友故エドワード・カーペンターの著『異教及び基督教の信條』(Pagan and Christian Creeds)中に詳細、深遠なる研究が施されて居る。

『ナザレのイエス存生の當時、或は發現の當時（記録されたる）及び其以前數世紀に亘りて、地中海及び其近隣地方には、多くの異教の信仰と儀式とが存在し行はれた。希臘人中にはアポロ或はデオニサス、羅馬人中にはヘルキュルス、波斯人中にはミツラ、シリヤ人及びフリジヤ人中にはアドニス及びアツチス、埃及人中にはオシリス及びイジス及びホーリユス、バビロニヤ人及びカルタアジ人中にはバアル及びアスタルト等の如き諸神に對して、實に無数の殿堂が建立せられた。

『予は勿論、今是等諸種の教義に就て細説することは出来ないが、併し、前記諸神の殆ど全體に就いて、次の諸事項が言ひ傳へられ、信ぜられた、と言ふことだけは先づ肯定することが出来やう。

(一) 是等諸神はクリスマス(イザナギ)の日に、或は其日の前後に出生したること。

(二) 是等諸神は未通母(イザナメ)より産れたること。(註)

(註) 譯者曰、天照大御神はイザナギの命のミソギし給ふによりて生れ給ふた

(三) 地窖或は地下室に於て生れたること。(註)

(註) 譯者曰、天照大御神はイザナギ命が黄泉國より出でミソギし給ふによりて生れた

(四) 彼等は、人類に對して勞苦の生活を遺した。

(五) 而して光明の主、救治者、仲介者、救世主、解放者等の諸名を以て呼ばれた。

(六) 然し彼等は暗黒の力に征服せられた。

(七) そして地獄或は黄泉國に下つた。(註)

(註) 譯者曰、諸神の生誕地窖は天照大御神の隠れさせ給ふた岩屋戸に一致し、この地獄或は黄泉國は、イザナギノ

命が大御神を生む前に下り給ひし國と一致する

(八) 彼等は死より復興して、天國に於ける人類の先達となる。

光明の神が暗黒の力に迫害せられて地獄に隠れ、更に復活して、天國に於ける人類の先達となる、といふ如き實に吾が天照大御神に關する神話に對する特別の註釋を読むの感がある。

三、オシリスと天照大御神

更に我が天の岩屋戸會議の光景と埃及のオシリス神に關するブルタークの記事とを参照すると、其一致點を存することは驚くばかりである。カアペンター翁がブルタークより引用せりとて記する處に曰く、

『オシリスは年の三百六十一日目（即ち十二月廿七日）に生れた。彼は、ミツラやデオニサスの如く大なる旅行者であつた。埃及の王として彼は人民を教へて文化に導いた。之を訓陶するに音楽と温情とを以て

して、決して武力を用ゐなかつた。彼は穀物と酒との發見者であつた。而も彼は暴風即ち闇の力に襲はれて殺害せられた。此事件はアーサー月の十七日、即ち太陽が天蠶宮に入るの時期（即ち冬至期）に於て行はれた。彼の身體は柩内に納められた。然るに其後、即ち十九日に彼は更生した。彼のミツラヤ、デオニサスヤ、アドニスヤ、其他の儀式に於けると同様に、匣中の畫像は取出されて禮拜者等の前に飾られ、拜禮者は一齊に「オシリスは活きた！」と歡喜の叫びを以て之を禮拜する。』

然らば之に對照すべき古事記の岩屋戸集會の記事はどうであるか。左に其中の數節を摘録して見よう。

『是を以て八百萬の神、天安の河原に、神集ひ集ひて、高御産巢日神の御子思金の神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて鳴しめて、……イシゴリドメの命に科せて鏡を作らしめ、……天の香山の五百津マサカ木を、ココジニコジで、上枝に八咫勾瓊の五百津の御スマルの珠を取りつけ、中枝に八咫鏡を取り繫げ……天のウズメノ命……天の石屋戸にウケ伏せて、蹈みとどろこし、神懸りして、胸乳を掛き出で、裳緒を番登に忍し垂れき。爾れ高天原動りて、八百萬神共に咲ひき。』

『是に天照大御神、怪しと以爲して、天の石屋戸を細に開きて、内より告給へるは、吾が隠りますに因りて天の原自ら闇く、葦原の中つ國も皆闇けんとおもふを、何どて天のウズメは樂びし、亦八百萬の神諸咲ふぞと詔給ひき、爾ち天のウズメ、汝命に益りて貴き神坐ますが故に、歡喜咲樂ぶと言しき、かく言すあ

ひだに天兒屋根命、布刀玉命、其鏡を指し出で、天照大御神にみせ奉る時に、天照大御神いよ／＼奇しと思して稍戸より出でて臨ます時に、其隠り立てる天の手力男の神、其御手を取りて引出しまつりき。……カレ天照大御神いで坐せる時に、高天原も葦原の中つ國も自ら照り明りき』

かのオシリスの信者が、匣中より畫像を取り出で、『オシリスは活きた！』と歡喜の叫びを發すると、天照大御神のシムボルたる八咫鏡をサカ木の枝に繫けて、八百萬神が一齊に咲ひ、是によりて大御神は巖穴より出で給ひ、『高天原も葦原の中つ國も自ら照り明り』たると、其自然開展のドラマが描かれて相類似せるは極めて興味深きことである。而してオシリスも天照大御神も共に太陽の人格化されたものである。（註）

（註） Max Mueller の "Mythologia" に依る

四、鷄鳴の傳説

須佐之男命が冷と冬とは是に伴ふ暴風をシムボライズされたるものなる事は、他の諸神話の例に参照して益々明白になつたであらう。従て天岩屋戸集會が、日神更生の祭禮が、冬の眞夜中に行はれしことも略ぼ察すること出来るであらう。波斯のミツラ神は十二月二十五日に生れ、埃及のオシリス神は其二十七日、ホオ

リユス神は廿八日に生れ、イコスは其二十五日に降誕した。天照大御神の降誕は如何なる日時なりしか明瞭で無いが、其岩屋戸の更生が冬であつた事は前述の如く明白である。そして鶏が其長い終夜を啼き明かしたといふクリスマス・イーヴの傳説は、常世の長鳴鳥に鳴かしたといふ古事記の記事に符合する。アポロが唯だ一本の髪を以て生れ出たといふ傳説は、冬の日の太陽が弱い光線(髪に比ぶ)を表示したものである。サムソン(註)が其髪——光線を徴象する——を失つた時、全く其臂力を失うたといふ傳説も同意義を有する。

(註) ヘブリユウ語のシユムシ、即ち太陽から出た名稱

五、冬の神話的意義

何故に冬は、各國民族に對してかくも深い印象を與へたであらう。是れは岩屋戸會議の神話學的研究に於て重要な一題目をなすのである。然るに此問題に就きては、エドワード・カアペンター翁が其著『異教及び基督教の信條』中に詳論して居るので、私は左に其數節を譯出して置く。

『如何なる種類の曆をも存せざる太古の時代に於て、かの素材にして内氣なる民人が、其光明と溫暖との發源所が日々に衰頹し沈落することを目撃せし場合を考へよ。何人も知る如く、一年の最後の三週間ばかりは、實に晝が最も短かく、又其些かも變化せぬ時期である。抑も其時どう考へられるであらう？ 勿論、時運拙なく日神は殫ると考へられる。暗黒の主君タイホンは之を襲ひ、夜の女皇デリラは其髪を剪る。……かくて神は益々衰へて遂に斃るゝであらうか？ 將た最後に及んで勝つであらうか？ 吾等は今想像することが出来る、深き懸念を以て上古の男女が晝の延長の報知を待ち望みたることを。而して神主(或は僧侶、當時の學問の代表者)が簡單なる觀測の後に、晝の時間の延長し始めしことを神殿の階段上から報告したる時に全衆の歡喜は如何ばかりなりしかを。』

以上の説明によりて、天の岩屋戸會議が神話學上如何なる意義を有するか、須佐之男命が冬と夜と暴風の徴象なること、世界諸民族神話の最大事件が基督教のクリスマス前後の時期にあること、而して其事件が天岩屋戸集會の結果と同じく、太陽神の復活或は降誕を意味すること等の諸事項が明白になつたであらう。

行すりに一枝をりし梅が香の深くもそてにしみにけるかな

(西 行)

第八章 岩屋戸會議の社會學的研究

此一篇は、今より二十餘年以前、即ち大正元年九月、地方の一雜誌に『日本太古の國會』と題して掲載したものを基礎とする。本書の初版以來第十版までは其まゝ掲載したが、今日の私から見れば、些か異なつた氣分が此中に濫つて居るので、今度は大修正と増補とを試みる。

一、萬機公論に決す

『萬機公論に決す』といふ維新の御誓文は、何人も能く心得て口にする所である。是をモットオとして明治の政治史は開展せられ、是を第一義として憲法政治は唱導せられ、是が實行の第一着として國會は開かれた。而して其憲法政治も國會制度も皆な歐米諸國よりの舶來品で、日本の國體には斯くの如き精神も制度も曾て

存在しなかつたもの、様に思はれて居る。實際今の憲法政治や國會制度は舶來品である。併し遙かに太古神代記時代の歴史に遡つて見ると、天照大御神以來大和民族建國の精神は此の御誓文の通りであつた。乃ち此の一事を論證する爲めに本篇は書かれたのである。

然らば何に依つて此の様な議論をするか。何か正確なる典據が存在するか。有る、確かに有る。先づ第一に證據となるべきものは古事記である。古事記中の神代記である。此神代記は一種の神話であつて、之を實史と見做す事は出来ぬと言ふ人があるかも知れぬ。併し是は日本民族の太古の生活状態を知るには唯一の手掛りとなるべき典據である。各民族の實史以前の生活状態を研究するには其民族に傳はりたる神話が最上の典據をなす如く、日本民族の太古における生活状態と精神状態とを知るには先づこの古事記に依るの外に道はない。

二、比較研究

併し是れのみでは、未だ満足は出来ない。近世學術の進歩は、社會學といふ一科の學問を起し、殊に古代社會の研究に依りて種々なる新しい材料と、新しい智識とが開發された。此新しい智識と材料と、古

事記の神話とを比較研究して、茲に本篇が成立するに至つた次第である。而して北米紐育州の土人の中に永らく生活して其實生活を研究したるモルガンの『古代社會』の如き、又之に新たに人類學的經濟學的研究を加へたるエリゼ・ルクリュの『地人論』やエンゲルスの『家族私有財産及び國家の起原』の如き、何れも此小篇に有力なる典據となつたものである。

三、最古最大の臨時議會

太古の國會には種々なる性質があつた様である。例へば大事件が勃發した場合に臨時の國會を開き、平常時は一定の期日を定めて會議を催すと言ふ如き是である。併し之を一々研究して行つたら、むづかしい問題ばかり群がり起つて來て、ちよつと纏まりが着かぬことになるであらう。故に、茲には最も有名なる一つの臨時議會に就て稍々細かな研究を施したいと思ふ。其れは、神代史中で最も有名なる『天の岩屋戸』の會議である。私は之を以て一種の臨時議會と見做す者である。精しく言へば、須佐之男命の叛逆に由りて催された國家危急の場合の臨時議會であると見做す。而して是れは日本の歷史上最古の國會にして、且最重大なる事件であつたと思ふ。故に、先づ國會開催の原因たる須佐之男命の叛逆からして研究しなくてはならぬ。

『故こゝに天照大御神、見畏みて、天の岩屋戸を閉ぢて、刺しこもり座しき、爾ち高天の原皆暗く、葦原の中つ國、悉に闇し、此れに因りて常夜往く、こゝに萬の神の聲は、狹蠅なす皆涌き、萬の煩ひ悉に發りき、是を以て八百萬の神、天の安之河原に、神集ひ集ひて云々』

とは古事記に記する所である。而して是れ須佐之男命の暴動の結果、天孫民族たる八百萬の神が集會して國民全體の大會議を開催するに至るの順序である。

四、皇大神と須佐之男命

然らば須佐之男命は如何なる暴動を起したか、之を叙するには、先づ天照大御神と須佐之男命との二柱の神の御關係から研究せねばならぬ。抑も此二柱の神は共に伊邪那岐の大神の御子である。而して天照大御神は高天原を知ろしめすこととなり建速須佐之男命は海原を知ろしめすこととなつた。然るに須佐之男命は之を厭うて『天照大御神に請して罷りなむと申給ひて乃ち參上ります』こととなつた。處が其時『山川悉にどよみ、國土皆震りき』とて仲々の勢力であつた。『こゝに天照大御神聞き驚かして、我那勢の命の上り來す由は必ず善はしき心ならず、我國を奪はむと欲すにこそと詔給ひて、……何故上り來ませると問ひ給ひき』須

佐之男命は之に答へて、『僕者邪き心なし』と申し、此に御兩方にて八人の御子を儲け給ふた。

然るに速須佐之男命は平穩無事に暮す事が出来なかつた。乃ち命は『天照大御神に白し給はく、我が心清明、故に我が生めりし子手弱女を持つ、此れに因りて言さば自ら我勝ぬといひて、勝佐備に天照大御神の營田の阿離ち溝埋め、亦其大嘗聞しめす殿に糞まり散し』たのである。

而も須佐之男命の暴動は益々募つた。

『天照大御神、忌服屋に坐まして、神御衣織らしめ給ふ時に、其服屋の頂を穿ちて天の斑馬を逆剝に剝ぎて墮入る時に、天の衣織女見おどろきて梭に陰上を衝て死せにき。』

抑も此須佐之男命の行動は如何なる意味を有するか？ 見る人によりて元より觀察を異にするであらう。或は男系の民族と女系の民族との爭議と見る人もあるであらう。或は命の單純なる暴行と見る人もあらう。併し私を見る所では、此一段の記事の中には種々なる事實が含まれて居ると思ふ。例へば糞まり散らすと言ひ、斑馬を逆剝に剝ぐと言ふ如きは、命一個の暴動とも見る事が出来る。然るに『自ら我勝ちぬといひて、天照大御神の營田の阿離ち溝埋め』といふ事は、社會學者の所謂母系組織が父系組織に變革せんとする暴動と農制革命との並發であるとも言へる。

五、萬邦の同型

日本最古の國民大會を開催するの動機となれる須佐之男命の暴動を討究するに當り、私は深く比較研究の必要なることを感ずる。世界人類の生活が地理的にも歴史的にも未だ多大の分化を來さなかつた時代に於ては、其生活、習慣等に甚だしき差異を生じなかつた様に思はれる。三百年大平の夢を食ぼつて居る徳川幕府下の人民は、突如として浦賀の沖に天降れる黒船を見て驚天動地して爲す所を知らなかつた様であるが、能く／＼史籍を調べて見ると綠眼金髮の『異人』の生活と大和民族の生活状態とは太古にありては餘程似て居た様である。

例へばゲルマン民族の五月野の會合が新日の夜間を期して開催せられし如く、天の岩屋戸の會合も夜であつた。また、太古の民族が社會集團の大小事件を議決するに、成年男女同等の權能を以てしたることは、何地の民族に於ても同様であつたらしい。モルガンの研究した北米紐育洲の土人イロコア民族の如きは其模型である。是と同様に各民族の社會生活變遷にも同型の現象が行はれた様に思ふ。元より時代と形態とに小異細差はあるにしても、大體に於て同意味同形態の生活状態と變遷状態とがあつた。そこで私は須佐之男命の

暴動を以て社會の母系組織より父系組織に變遷するに際して生起せし一現象と見做すので、此點に於ても歐米の古代民族と同様な順序を経過したものと察せられる。然らば母系組織とは如何なるものなるか、父系組織とは如何なるものなるか、先づ此事に關する簡略なる説明から歩を進めて見よう。

六、母系組織の社會

母系組織といふのは、社會萬般の組織と作用が凡て母系を中心として行はれることである。例へば人の身分、人の氏族などを定めるに母を本據となし、又財産の相続にしても子は父の財産を相続せずして母の財産を相続し、父の財産は父の兄弟姉妹及び姉妹の子女、又は唯姉妹の子孫が相続するといふ如き法則は、母系制度の特徴の一つである。されば今日の男子又は父と同様な地位と權能とを太古の女子又は母が持つて居たのである。何故に此様な制度が行はれたものであるかと言ふことは、今から詳細に説明することは困難であるが、群婚 (Group marriage) 又は對婚家族制 (Pairing family) 又は一妻多夫制度 (Polyandrie) の自然的の結果であると言へば先づ大過無きを得るであらう。對婚家族制と言ふのは、男子は多數の婦人と婚する中に一人の主婦を選び有し、女子も亦多數の男子と婚する中に一人の主夫を選び有するの制度である。此時

代にありては子に對して關係の最も親密なる者は父に非ずして母である。子の母は何時も明白であるけれども大多數の場合に於て、父の何人なるかは分明で無い。而して富の増殖尠なく經濟的生活の極めて單純であつた社會に於ては、人間の社會的生活を支配するの力は實に此身分關係、血統關係であつた。従つて女子の權勢が強大であつたのは當然である。而して當時の社會が母系を中心として組織せられたのも、亦自然である。然るに此母系組織に對して大革命が行はれた。それは素より有史以前のことであるから、之を詳細明確に知ることは出來ぬ。併し此母系組織のことを研究し發見したるパホーフ・ヘンは父系制度に變革せる後に至るまで存続したる母系的法律を集めて其革命の跡を説明して居る。

七、母系より父系へ

日本建國の基礎を成せる天之安河原の大會議は母系組織の社會より父系組織の社會に推移する時代に起れる一現象で、適々以て太古の大和民族が歐米太古の民族と同じく萬機を公論に決したることを明證するのである。パホーフ・ヘンの發見によると、太古而も開化せる民族にありて主權を有したものは女子であつた。然るに漸く世の中が發達して、耕作法、貯蓄法、產物貯蓄法及び其他の産業と器具との進歩に由りて富は著し

く増殖せられた。従来氏族團體の共產制度は單純に行はれて來たのが、漸次に種々なる財産上の問題が起つて來た。フリードリッヒ・エンゲルスの説に依ると、此富の増殖は對婚家族制及び母系制度の社會に強力なる衝動を與へた。自然母(法律又は道德上の母に對して言ふ)は其子の自然父を認定した。其認定は今日の多くの場合に於ける「父」よりも確實であつたに相違無い。何となれば何人を父と認めやうが道德上の制限が無いので、極めて自由に之を行ひ得たからである。而して是れは母が其子に對する愛情の結果、其子の爲に其富を増殖し保存するの必要を感じ、而して夫の扶助を希ふ様になつた結果なのである。此時に當り、産業の發達と共に簡單なる分業が起つて來た。食物を收得し、耕作に必要な器具を作るの業務は男子に專屬し、從て當時の財産の大部分たる是等の物件は男子の占有する所となつた。而して婦人の保管するものは家庭用の貨物だけに限られる様になつた。此趨勢が益々進むに従つて、女子と男子との地位は漸く轉倒する様になつた。此革命は決して困難では無かつた。蓋し女子自身、母自身が之を希望し之を便利としたからである。而して此革命は有史以前久しき昔に成就せられた。以上のエンゲルスの説は必ずしも事實とは言へない。それと反對の説と事實とを後段に述べよう。古事記の記事は即ちそれを立證するのである。

七、支那の母系制

かうした記録は支那の史書にも散見される。『綱鑑易知錄』卷之一、太昊伏羲氏の項に次の如き記事がある。「人生之始や禽獸と異なるなし。其母あるを知つて、其父を知らず、愛あるを知つて、其禮を知らず、臥すれば則ち吐々、起れば則ち吁々、飢れば則ち食を求め、飽けば則ち餘を棄つ云々。」更に進んで「上古は男女別なく太昊始めて嫁娶を別し、儷皮を以て禮となす、姓氏を正し、媒妁を通じ、以て人倫之本を重んず、而して民始めて濟さず」と言つてゐる。この後段の記事は本書の編者の意見が加はり、頗る近代的の香がたゞよつてゐるが、前段の記事は母系制の存在を夙に示したものと云へるであらう。然るに莊子はかうした事實を神農の世に認めてゐる。その著『盜跖篇』中に「神農之世、臥すれば則ち居々、起れば則ち干々、民その母を知り、その父を知らず、」とあるのがそれだ。之によつて見れば莊子も『易知錄』の記者も同じ傳説を記したものであらう。兩者の言ふところ、時代を異にする點が出所の正確でないことを證明するものである。

八、母系制の文化的地位

フリードリッヒ・エンゲルスや、支那の學者達は、この母系制を以て人類が原始的狀態に於て經過したものと考へてゐたやうであるが、それは頗る疑はしいものである。エリゼ・ルクリュは、かうした學者の假定を疑つて次の如く言つてゐる、「この假定を最も疑はしくするのは、母系制度が非常に下級な未開民族、例へばブラヂル人や、カリフォルニア沿岸の印度人達の最も未開な民族の中に見出されないことである。母系制家族の形體が見出される社會は、既に文明の長い過去を持つてゐる土民の中にある。」「農業が婦人獨特の勞働となり、夫や息子達が殆ど常に外に出て、狩獵に、漁獵に、戰爭にと従事するところに於ては、……部落の通常經濟上に特に有用な役目は婦人に屬してゐる。農業は彼女に殆ど常に一定量の收穫を提供するに反し、男によつて齋らされる生産は、冒險や、偶然や、天候等によつて異なる。一般の繁榮は絶對的に母親達の秩序立つた、平和な、また彼女等が一家族中に齋らす處の和合の精神を以てする善き管理に待つものである。彼女等を圍む子供達が自然に彼女等を愛慕する情は宗教的感情となつて發達する。彼女達に先づ相談する事なしには如何なる決定もなされない。家族的財産の絶對的分配者として彼女は、又あらゆる社會的政治

的事務の處理者となりさへもする。そして男はより力強いにせよ、精神的主權の前に屈服する。アメリカのワイヤンドツトの間では、國會は四十四人の婦人と四人の男子によつて組織された。その四人の男議員は實際上、女性の意志の實行委員に過ぎなかつた。」(註)

(註) ルクリュ著(拙譯)『地人論』第一卷二二四—二三〇頁

このルクリュの説は、わが古事記神話の事實を最もよく説明するものである。それは「いみ服屋ハキヤに坐まして、神御衣織らしめ給ふ時」にスサノヲの命の暴動があり、また「天照大御神の營田ミツタの阿はなち、溝うめ云々」とあるによつて、天照大御神が自ら農業を司らせ給ふたこと明かであり、母系制の完備した實例と見られるのである。

九、母系制の多様性

大體に於て平和に食物が得られるところに於ては母系制が成立した。そして戰爭によつて餘り脅威されず男子が防護者または征服者として暴力を最高位に置かない地方に於ては、それが持續された。併しながら、戰爭自體が必ずしも男子に最上權を與へた譯ではない。なぜなら、新舊兩世界に於ける武勇婦人に關する傳

説——アマゾンの傳説の如き——は、古昔、戦闘民族の政治的統治が婦人によつて指揮された事實を物語るものである。然るに南アフリカのオヴ・ヘレロ (Ova Herero) に於ける如く子孫が母系によつて地位を定められた遊牧民にあつてさへ、婦人は主權を握るところではなかつた。即ち婦人は服従した。それは富の殆んど全部が男の勞働から來たからである。

また、子供に對する母親の權利は必ずしも夫の横暴性を妨げるものではない。その母權は、謂はゞ家族の統制上、仕事が簡単にされるだけに過ぎない。例へばマラツカ半島に住むオラン・ラウ族に於ては、子は母のみに屬する。これこそは母系制度であるが、女は極めて哀れむべき生活を營んでゐる。夫は女を打擲し、自分の前で食事することを許さない。以上の如く、母系制にも様々な形式があると同時に、何れの民族も必ず母系時代を経過したといふ譯ではない。父系制もその起源は有史以前、否人類以前にありと言はれる。ルクリユは言ふ「環境と進化との相異は必然的に極めて多數の煩瑣な差異を生ぜしめた。たゞ極めて一般的には、母系制度は『子の出生』といふ自然的事實によつて理解されるし、父系制は、力の業、奪略、征服、歴史的事件を起源とするものだと言ひ得る。」「故に父系制度——家長制——は徐々たる進化の結果ではなく、反對に暴力的原因、突發的事變に由來するものである」(註)

(註) ルクリユ『地人論』(拙譯) 第一卷三三三頁

この點も亦、古事記の記事をよく説明するものである。エンゲルス等の説を覆へすものである。即ちスサノヲの命が子供の認定に就て暴力を揮ふに至つた事實は、この間の消息を傳へるものではないか。エンゲルスが、母系より父系への變化は經濟狀態の發展に伴つて平和的に自然的に行はれたといふ主張とは全然反するるのである。

十、父君認定農業革命

以上の研究の結果に徴して見ると、天の岩戸の事件は極めて明瞭に想察することが出来ると思ふ。須佐之男命が暴動を起す前に當り、天照大御神は須佐之男命に告給はく。

『是の後に生ませる五柱の男子は、物實我物に因りて成りませり、故おのづから吾が御子なり、先に生ませる三柱の女子は、物實汝の物に因りて成りませり、故すなはち汝の御子なり』

是れ父君の認定である。天照大御神自らの御認定である。然るに須佐之男命は漸く權勢を擅にせんとするの有様を呈するに至つた。

『爾に速須佐之男命、天照大御神に白し給はく、我が心清明き故に我生めりし子手弱女を得つ、此に因り

て言はば自ら我勝ぬと言ひて、勝ちさびに天照大御神の營田の阿離ち溝埋め云々』
是權勢に乗じて急激なる産業改革を計り給へるものである、『營田の阿離ち云々』は是れ農業の革命ではあるまいか。

然るに寛仁なる天照大御神は、尙ほ之を許し給ふた。須佐之男命が『大嘗きこしめす殿に屎まり散』せしに、之をも宥し給ふた。而して『營田の阿離ち溝埋め』の如き所業は之を農業の改革なりと認許し給ふて『田の阿はなち溝埋るは、地をあたらしとこそ云々』と詔直し給ふた。寧ろ辯護し給ふたのである。蓋し天照大御神は命が多少權勢を振ひ給ふても、尙ほ之を忍ぼうと思し給ふたであらう。

然も須佐之男命は『猶ほ其の惡しき態止まずて轉てあり』と言様であつた。

『天照大御神、忌服屋に坐まして、神御衣織しめ給ふ時に、其服屋の頂を穿ちて天の斑馬を剝ぎて墮入る時に、天の衣織女見驚きて梭に陰上を衝きて死せにき』

是れは須佐之男命の暴動である。此暴動が無かつたならば或は問題にはならなかつたであらう。従つて天の岩屋戸の臨時國會も催されなかつたであらう。然も不幸にして命は餘りに放縱に陥り給うた。而して不思議にも之が却つて當時の社會状態を研究するの一資料となつた。

十一、國會議事録

斯くて天照大御神は天の岩屋戸にこもり坐ますに至つた。此に於て、『高天の原皆暗く葦原の中つ國悉に闇し、此に因りて常夜ゆく、こゝに萬の神の聲ひは、狭蠅なす皆わき、萬の妖ひ悉に發りき』國家騷亂の狀は眞に想察するに餘り有る程である。『是を以て八百萬の神、天の安之河原に神集ひ集ひて』此に國民の大會を開くに至つた。

然らば其大會は如何に行はれたか、古事記の記する所は極めて詳細であるが、併し其れは多く宗教的儀式或は神話的寓話的事實である。故に茲には之を省略し唯だ其國會の主眼たる須佐之男命の處分に就て、古事記の記する所を研究しよう。古事記は録して曰く、

『こゝに八百萬の神、共に議りて、速須佐之男命に、千位置戸を負せ、又鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神夜良比夜良比き』

太古の議會が社會問題を議すると同時に裁判も行ひたることは社會學者の記する所で其習慣は今日の西洋の司法制度に傳はつて居る。千位置戸とは一種の贖罪である。財物を出して罪を贖はしめるのである。今

日で言へば罰金である。財産刑である。鬚を切り、手足の爪をも抜かしむるは、是れ今日の身體刑である。今日に於ては殆ど身體刑を存しないが、明治以前にありては種々なる身體刑を施した。次に神夜良比夜良比きとは今日の所謂自由刑の部類に屬するものにして、即ち追放刑である。『夜良比き』はヤリキと同意義にして之を追放と解して差支無からう。流刑とか遠島とか言ふ昔時の刑罰と同種類である。

以上の記事は之を今日より見れば、一種の議事録である。然らば何故に之を國會となし、國民の大集會と見做すか、是れ更に少しく研究を要する問題である。

十二、太古の國會

天の岩戸の神集ひが、大和民族の史上に傳れる最古の國會である事は、前段既に之を述べた。併し其論據となるべき事實は、古事記中の『八百萬神。天の安之河原に神集ひ云々』の文字なのである。故に是のみにては讀者は未だ安心して予の説を信用せぬであらう。是に於て聊か西洋の學者の糟粕を嘗めるの必要が起きて来る。太古の社會狀態の研究は近時益々盛んに行はれて居るのであるが、其先驅とも言ふべきはモルガンと言ふ特志な男である。モルガンは北米印度人(註)の中に住居し、其風俗習慣を調査して古代社會觀の上に

一新生面を打開した。

(註) 歐洲人が米國を發見するの以前より住居せる土人

其モルガンの記する所によれば、其印度人中には自由、平等、博愛の精神を以て成れる立派な政治、殊に國會が行はれて居たとの事である。普通の政治史に依るも、ゲルマン民族は太古に於て萬機を公論に決した事が分る。更に多くの實例を近時に至るまで持續して來た所の歐洲諸國殊に露國に存在したるミルの集會の如きは其著しき實例である。日本に於ても市町村制が實施せらるゝ以前までは、村の『寄會ひ』^{よひ}と言ふものが行はれ、村の大小の事件は此全村の男子全體の會議たる『寄會ひ』^{よひ}にて議決せられたものである。是れは古から傳つて來た習慣ではあるまいか。茲に模範的實例として、モルガンの調査したるイロコア氏族の會議に就て大略を記する。

十三、イロコアの會議

イロコアとは北米に住居せる土着の住民の名稱である。此民族は全體が同盟して全氏族議會を開くと同時に、其内の各氏族も亦分れて自己の會議を有する。先づ其氏族の會議より説明しよう。

歐洲人が初めて米國に渡航してイロコア人社會を見た時は、其社會には自由平等友愛の思想が行はれて居た。従つて其會合も亦其趣旨に應合して居た。エンゲルスの記する所に依れば、其氏族集團は各々の會議を設け、成年に達したる同氏族全體の男女が平等の投票權を持つて集會した。

此模範的インディアン氏族の權利義務に就きて、モルガンは記して曰く『イロコア民族の人民は皆人格を認められて悉く自由であつた。彼等は互に他の自由を防護するの義務を負ふて居た。彼等は自由權に於て又人格的權能に於て平等であつた。彼等は血統を以て結ばれたる兄弟であつた。自由、平等、博愛は形式的には未だ表はされなかつたとは言へ、既に同氏族の根本精神を成して居た』(註)

(註) Lewis H. Morgan "Ancient Society" 八五頁

是より此イロコア氏族の聯合議會の構成を説き、以て日本神話の『神集ひ』に論及しよう。

十四、イロコア聯合議會

イロコア氏族の集團は幾つか結合して種族の集團を成し、更らに其種族の五集團が聯合して茲にイロコア同盟を構成して居つた。其イロコア同盟を構成したる五集團とは、セネカ、ケネガ、オノンダガ、オネイダ、

モホウノ等是である。其種族の數は二萬を超えなかつた。

(一)、この同盟の基礎は五種族が血統を同じうするにある。勿論其族語は、多少語調に相違はあつても、共通である。此種族は父祖を同じうしたる兄弟であつて、相互の問題に關しては平等と獨立とを維持した。

(二)、同盟の中央の機關は即ち五十人の酋長の聯合議會是れである。勿論各人皆平等である。同盟の一切の事件に就て最後の決定を與ふるものは此議會である。

(三)、同盟議會の決議は總て全會一致を以てせねばならぬ。

(四)、五種族中の何れの種族も其同盟議會を召集するを得る。但し其議會自ら之を召集する事は出来ない。

(五)、此聯合議會は萬民の集會せる所に公開する。各イロコア人は發言權を有する。然れども最後の決定權はカウンシルにある。

以上は、是れイロコア人が少くとも四百年以上持續し來りたる憲法の一部である。

十五、天の岩戸の會議

天の岩戸の神集ひとして現はるゝ會議は、果して如何なる種類の會議であつたか。今精確に知る事は出来ぬが、小氏族の小集會では無かつた様に思ふ。何となれば彼の會議には多くの『命』が列席して居る。此『命』の事は此に精しく私見を述べる事は出来ぬが、私は此『命』を種族の特稱であると思ふ者である、切言すれば『命』とは天孫民族の種族名稱であると信する者である。

『何々の命』と言へば即ち『命』民族中の一氏族の名稱又は其代表の名稱ではあるまいか。果して然らば其多くの氏族又は其代表者が集會せし議會は、種族議會か或は同盟議會であつたらうと思ふ。イロコアの種族議會に就ては別に説明しなかつたが、同盟議會と氏族議會との中間に位するもので、其形式も大同小異である。要するに天の岩戸又は天安之河原の大會は多くの氏族の會合であつた事は、想像するに難くは無い。

太古のゲルマン民族にもせよ、右のイロコア民族にもせよ、皆萬機を公論に決した。其議會に於ては今日の所謂裁判をも行つた。天の岩戸の會議も亦須佐之男命の裁判を行つた。又ゲルマン民族の五月野の會議と同じく暗い夜の會議であつた。其裁判に於て言渡した刑罰も獨逸刑法大家リスト等の唱導する如く、個人の復讐心に基けるもので無くて、社會の秩序を維持せんが爲の刑罰であつた。

上古より傳はつた『祝詞』には『高天原に神づまり坐ます』と言ふ語が必ず冒頭に付いて居る。『神づまり』は『神集り』と言ふ事だ。高天原は今日の高原であらう。是れも太古の天孫民族が高原に大集會を催して國

家の大事を評議した事が傳つて来て後世國家の大事を祈る場合に儀式語となつた次第ではあるまいか。

要するに大和民族の祖先は萬機を公論に決したものと想像するのは最も精確なる事と言ふ事が出来やう。

十六、共 産 制

岩屋戸會議に關連して最も興味ある事實は、スサノヲの命の犯した八罪其他の罪に關する規定に財産上の罪の規定が存しないことである。太古から日本に傳はつた種々の『祝詞』といふものを讀んで見ると、その中に『六月晦大祓』といふのがある。これは『みなつきつごもりの、おほはらへ』と讀むのである。此大祓は百官以下天下萬民の罪穢を祓除する爲に行はれる儀式で、昔皇城朱雀門で行はれたものだといふ。十二月にも同様に行はれたのだ。で、私に興味を與へた點は、その祝詞の中に列擧された『罪』にある。その罪は天津罪と國津罪とに別けられてゐる。天津罪といふのは即ち須佐之男命の犯した八罪で、あはなら畔放、みぞうめ溝埋、ひはなち樋放、しきまき頻蒔（一度種子を蒔いた上に重ねて蒔くこと）、くしきし串刺（尖つた串を田に刺して農夫の足を傷けやうとすること）、いきはす生剝、さかはず逆剝、くそへ尿戸、是である。串刺から上の諸犯は總て農業破壊の行爲である。次に國つ罪といふのは、い生剝、はだち死膚斷、しろひ白人（俗に云ふ白子）こ胡久美（疣瘡の類）己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せ

る罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高つ神の災（雷に打たるゝ如き）高つ鳥の災、畜仆し、虫物せる罪、等である。

是れは總て太古に行はれた犯罪と穢とを列挙したもので今日の刑法の如きものである。けれども太古に於ては是等の犯罪が行はれた場合には、此宗教的儀式によつて罪障消滅を祈つたのである。罪と穢とを同列に置いた點と、その罪を社會共同の責任として、總ての人のためにその穢れを清めやうとした點とは社會心理人類心理の研究上最も興味深き處である。併し此大祓に就て私の驚異する點は、右の如く極めて微細なる罪穢を列記しながら、一つも他人の財産に對する罪といふものを擧げてゐないことである。是れは太古の社會に財産に對する罪が無かつたことを證據立てるのではないか。何となれば、此祝詞は當時の社會に於ける總ゆる罪と穢とを清める爲めの儀式だからである。そして若し財産に對する罪が無かつたとすれば、それは太古の社會にかうした犯罪の對照となるべき財産又は所有權といふものが無かつたことを想像することは出来ないか。或は些か所有といふ事實は存在したかも知れないが、それは今日の様に犯罪の目的となる程のものではなく、凡そ私有權と名づくべきものではなかつたと想像することができる。そのみならず、天つ罪——卍放、溝埋、樋放、頻蒔其他——は公の罪として扱はれ、私有財産に對する罪として扱はれてゐない。岩屋戸會議は即ち天下の公事を議したものである。直接に社會の公安に關するものと見なされたものである。こ

れ等のものが、皆社會の公有であつたことを證するものではあるまいか。

十七、特權的分業制

岩屋戸事件に際して行はれた事實によつて、吾々は當時既に特權的分業制が存在したことを發見する。即ちこの大國難に際し、天の安の河原に八百萬神が集まつた時、

「天の堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛人天津麻羅を求めて、伊シゴリドメの命に科せて、鏡を作らしめ、

玉の祖の命に科せて、八咫の勾璽の五百津の御須麻流の珠を作らしめて、

天の兒屋根命、布刀玉命を召びて……この種々の物は、布刀玉命、布刀御幣と取り持たして、

天兒屋根命、布刀詔戸言ねぎ白して、

天手力男命、戸の掖に隠り立たして、

云々」

とあり、各氏族が各々特殊な職業を持つて居たことを思はせる。即ち鍛冶、磨玉、神官、等自ら家業が定

まつてゐたらしく、その氏族の名稱そのものが、直ちに職業を表現してゐるのも、それが家の特權であり、家傳秘傳であつたことを思はせるものである。

以上の十七項に分つて述べたところにより、岩屋戸事件の記事が如何に社會學的研究の對象として重大なる意義を存するかが分るであらう。

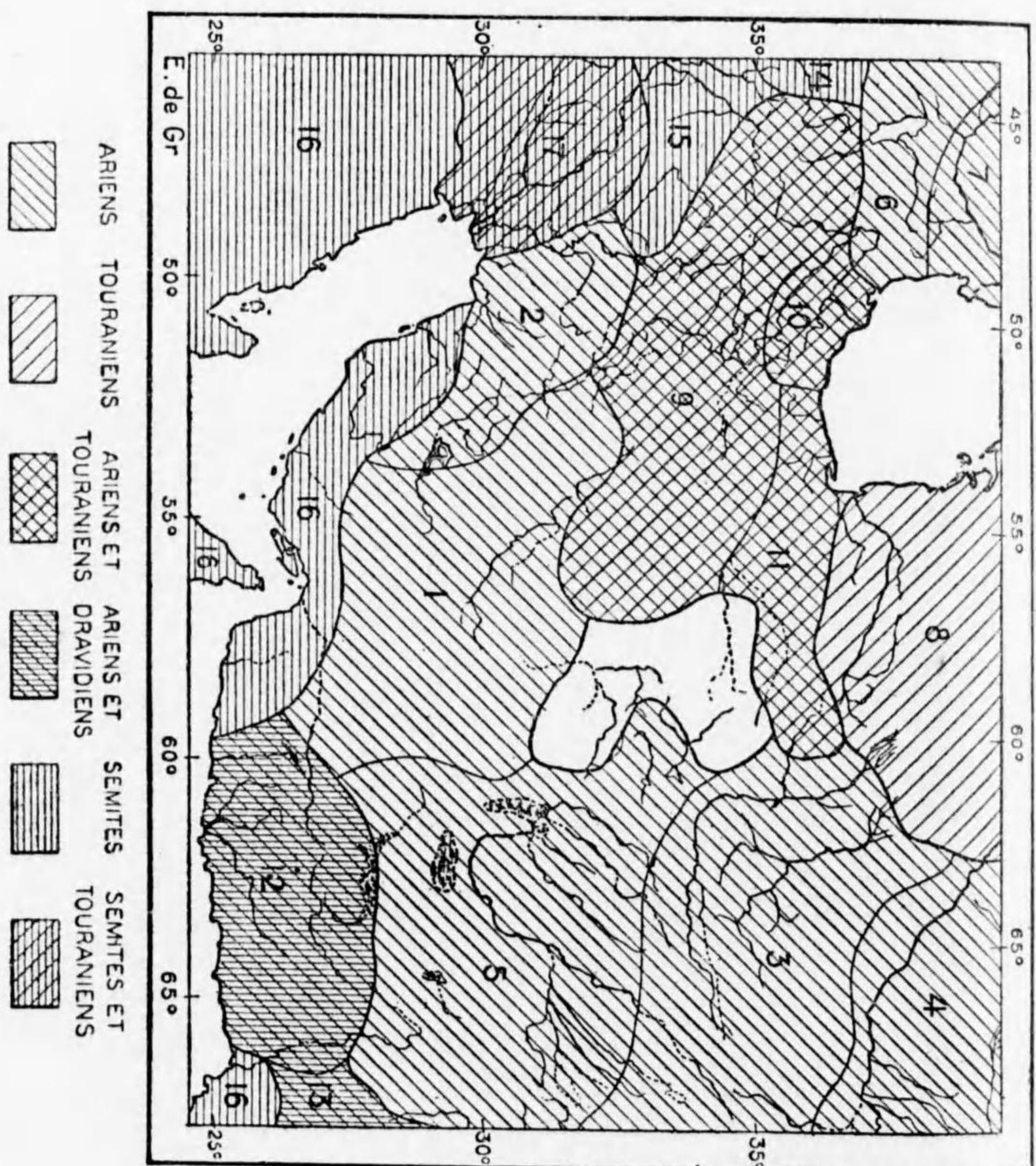
第九章 太古西部亞細亞の形勢

世界文明の曙光は西方亞細亞のペルシャよりアナトリアに至る地方から發揚せられたることは、屢々記せし如くである。此地方は世界最大のパミール高原と程遠からずペルシャ灣と印度洋を有し、チグリス、ユウフラテス二大河を包容して西は直ちにイスス灣より地中海に通じ、北はキヤスピヤン海及び黒海に面して水上交通の便あり、西南は或はオロント及びジョルダンの流域に沿ふて或はアラビヤの原野を過つて、シナイ半島の紅海に達するの便あり、印度洋の影響にて氣候は緩和せらるゝ、降雨を多くし、植物の繁殖を豊饒にしかくて總ゆる國の總ゆる人種の總ゆる言語の民族が集合し來り、茲に世界最古最大文明の端緒を開いたのである。

此メソポタミヤ地方に蝟集し來れる民族の大多數は、或は其以前パミール高原を降下して來たのかも知れぬ。或は氣候の變化、生活の困難に追はれ、此高原に發源する無數の谿流を辿つて四方に散り行きし一部の

民族が或は西方直ちにペルシヤ高原に降り、或はカスピヤン海東岸の地に移住したのかも知れぬ。ペルシヤの高原も太古の時代に於ては頗る多量の雨と水を有して居たのが、時経るに従て乾燥し來り、其住民は漸次に此地を去りてメソポタミヤの水郷へと移轉することとなつたであらう。勿論ペルシヤの高原は今日も尙ほ生活し得べからざる程の難地に非ず、唯だ隣接せる沃地メソポタミヤを望んでは、之を地上の理想郷として慕ひ赴いたに相違ない。

『パミールの高原より、メソポタミヤの平野一體に至る地方の人類學的研究によりて、吾等は其歴史開闢時よりしてこゝに三種の民族の住居せしことを知る。セミチック、アリヤン、及びトゥラニヤン、是れである。其内のセミチック人はザグロス連山の南麓に至りて其前進を止め、アリヤン人とトゥラニヤンとは互にペルシヤ高原を占領せん爲に争ふた。但し何れの人種が先きに此地に來住したかは今日明白で無い。此トゥラニヤンは果して彼のアルタイ・トゥラニヤン(タルタル、モンゴル、トルコ人、匈牙利人、フィンランド人等)と同血族なるや否や明證すること困難ではあるが、兎に角、彼等は、先づカスピヤン海の東南角を過つてペルシヤに入り、更に古代メデヤの地アトロパテンに侵入したことは事實らしい。而して更に南進してシユス谿谷地の上部を占領した。かくて之と同種族の『山人』即ちアツカド人は遂にメソポタミヤの平野に降り、此處に諸方より來られる諸民族と相接することとなつた。其諸民族の多くは南方及び西南方より移住して來



第十七圖一太古西亞細亞の諸人種

たもので、其大部分は多少他種族と混化せるセミチツク人種であつた。(註)

(註) Reclus 『L'Homme et la Terre』第一卷四一六頁

メデヤ地方に於て、アケメニデス王廳の命令によりて刻まれたる政治上及び行政上の記事には、アリアンの上流語(即ち古代ペルシヤ語)が其儘使用せられて居る。併しながら、ペルシヤ高原西北方に於ける被征服人民は、尙ほアリアン語ならざる國語を長く常用して已まず、ペルシヤの王は遂に之を帝國公用語の一として採用せざるを得なかつた。今日尙ほ存する岩壁上の三國語並記の文書に於て、ペルシヤ語に次で第二位を占むる國語は、即ち一種の接合語にして、専門家は、其頗るトルコ語法に類似することを認める。そして此國語は傳説を語る處の普通語として尊ばれ、四國語併記文書中には、アリアン語の次位、バビロニア語の上位に置かれ、埃及語を最下位に置いてある。更に古代メデヤ國內の或る二地方に於て、多くの探検家は單一國語を以て書かれたる古文書を發見したが、其國語は、アリアン人に征服されたる古代住民の用語即ちトウラニヤン語であると言ふ。

私は、古事記に出て居る天つ神の一族は、今より三千五百年前にユウフラテス河の上流、カパドシヤ高原に本據を定めて一大帝國を成せるヒツチト人種なりと信ずるものであるが、其ヒツチト人は、右のトウラニヤン人種と血統を同じうするのでは無いかと思ふ。そして其トウラニヤンの一派アツカド人がペルシヤ高原

を経てメソポタミヤに降りたると異なり、ヒツチト人は却てカスピヤン海岸を辿りてコオカサスの麓、クラ河或はアラクス河の河口に到達し、是より兩河に沿ふてアルメニア高原を登り、遂にユウフラテスの上流に及びカパドシヤの地に巖穴生活の大部落を建設したのではあるまいか。

要するに此世界文明搖籃の地を争ひたる太古の民族を、今、假りに三大別して、右の説明を試みた。併し之を詳細に研究すると、カルデヤの地には既に黒人も來て居たらしく思はれる。蒙古人なども來て居たかも知れない。ヒツチト人は蒙古人種では無いかとまで考へる學者もある。併し大體に於て、之をアリアン、トウラニヤン、セミチツクの三人種が此地方を占領し、互に混入錯綜して居たことを知れば、目下の研究の爲めには充分である。

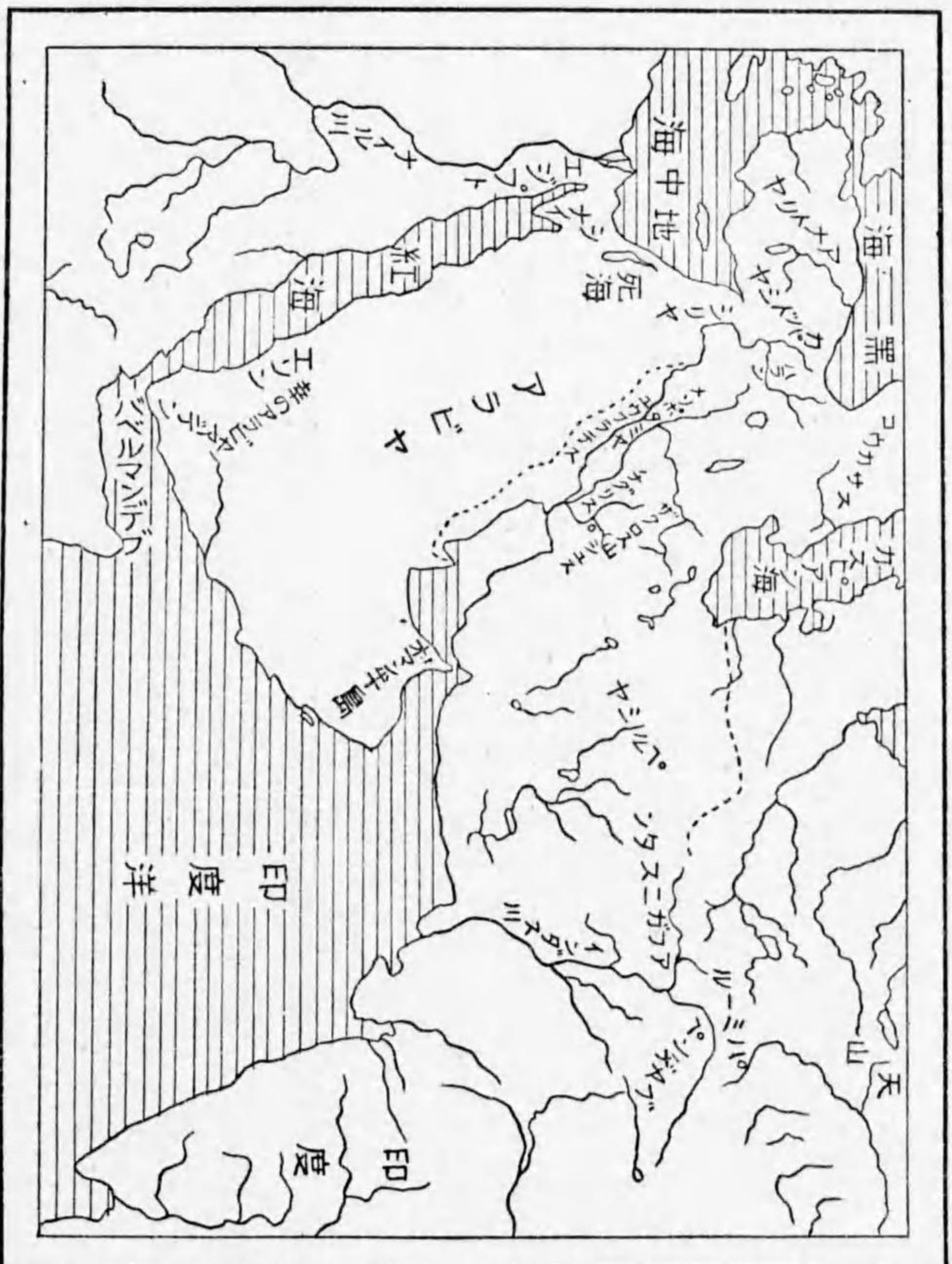
第十章 古事記神話の地理

一、緒言

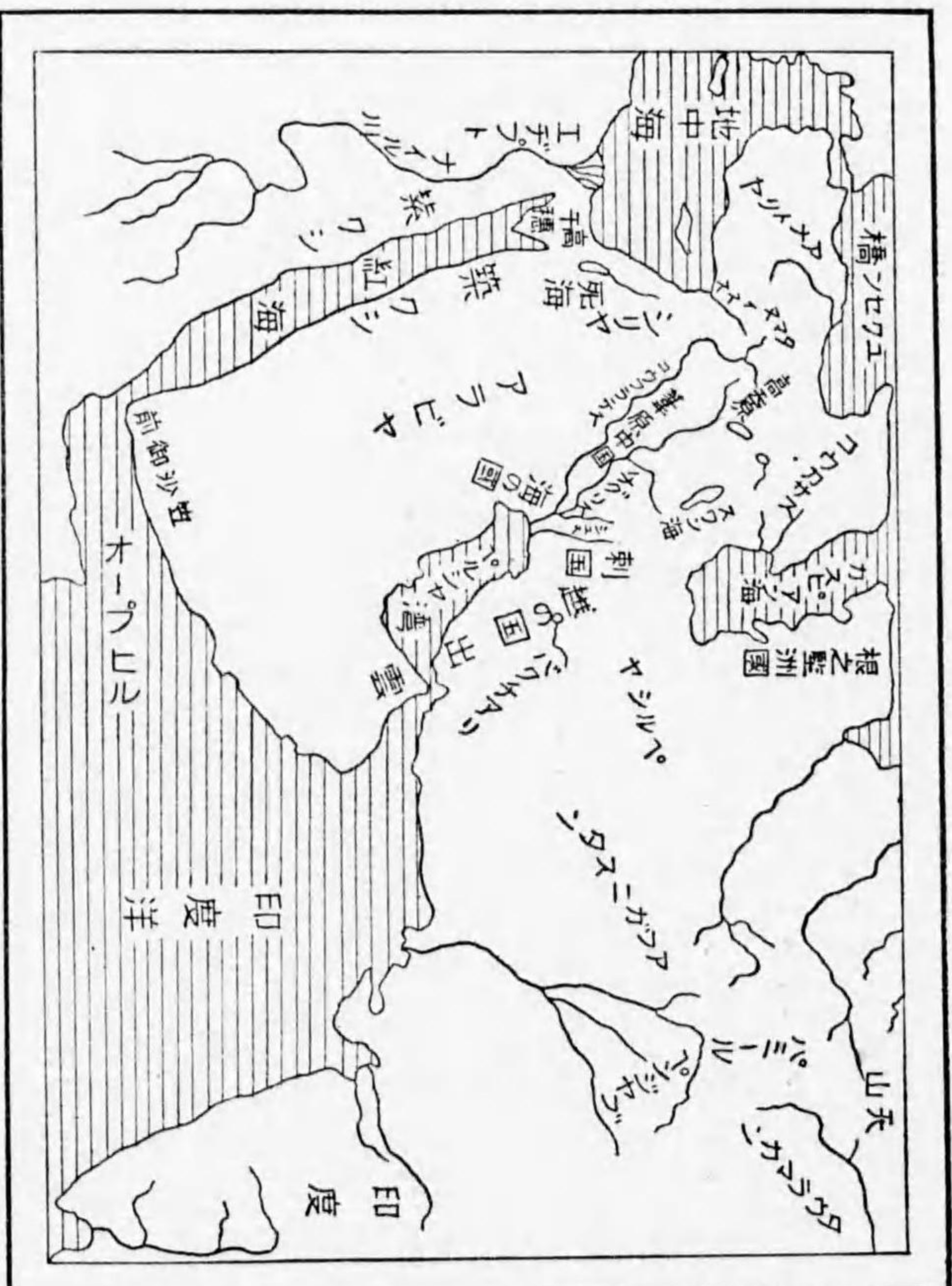
私は第一章に於て、世界最古の文明が東漸した有様を略説した。私は古事記の神話も亦此文明の東漸と共に移住して日本に渡來したものであると思ふ。其れは前段にも言ふた通りである。従て神代記に記されたる重要な地名人名の如きも亦其神話發源地及び其住民の名稱を採りたるもの多きは自然である。而して此の如き例は世界の歴史に屢々見らるゝ事實である。例へば米國のニュー・ヨークやニュー・イングランドは其英國の移住者が故郷の地名を追慕して同地に命名したる者なることを想像し得るであらう。又、米國のニュー・オルレヤンは佛國人の植民地なりしことを直ちに想像し得るであらう。蓋しオルレヤンは佛國の地名である。サン・フランシスコの名稱は亦西班牙人の命名せしものなること其發音法にて自ら明かにせらるゝである。

あらう。されば、私の是より研究せんとする神話の諸地名が、西方亞細亞に存在せりとなすも決して不自然なる解釋では無い。自分の祖先の住居したる地名、或は遭遇したる人名等を長く記憶して、之を新たなる定住地たる日本の諸地に命名するは極めて自然の人情である。殊に太古の醇樸單純なる人民が自分の祖先を憧憬し、祖先の地を追懐すること深きは近代人の想像も及ばぬ程である。されば西方亞細亞の地名や人名や出來事極東の日本に傳はりて其地名や物語となつたといふことは決して不可思議でも、牽強附會でもないのである。

古事記神話に記されたる高天原民族移住の目的地、即ち約束の地たる『豊葦原の中ツ國』或は『水穗の國』は、到底之を日本の國土に於て發見し得ない。日本の如き山岳的島國は豊葦原とは言へない。此島の周圍には葦などは茂つて居ない。又、茂つて居たとも思はれない。又神代記中に屢々遭遇する處のワニの傳説の如きも、決して日本に起つたものではない。かうした種々なる疑問を懐いて、私は神代記中の傳説の發生地を國外に求めた。最初私は『豊葦原の中ツ國』といふのは支那のことでは無いか、とも思つた。即ち黄河と揚子江との中間地方ではあるまいか、と想像した。然るに支那人は自ら其國を中國と稱するが、豊葦原の中ツ國とは言はない。天孫民族約束の地として古事記傳説に残る程の豊葦原の中ツ國なれば、最初、顯著なる評判が行はれて居なければならぬ筈である。支那人の中國といふは世界の中心といふ意味で葦原に挾まれたる



第十八圖—ヤマトタマヤ附近の地圖



第十九圖—古事記神話の地圖

中間國といふ意味では無い。然るに世界の太古史を讀んで行く間に、私は忽ち彼のメソポタミヤの地に注意を傾けることゝなつた。そして其れから其れへと連絡の道を辿つて種々發見する處があつた。即ち是より其大體を叙述しようと思ふ。

二、高 天 原

古事記神話の天照大御神が所知し給へるといふ高天原は何處であらう。吾等は吾等が祖先の地として此高天原の名を知れども、其何れの地に在りしか、曾て學者の明示せる者あるを聞かない。高天原を單に高原、或は天界と解釋して了へば其れまである。併しながら、苟も歴史上の事實、或は傳説として研究する以上は之を實在として穿鑿せねば心がすまぬ。

高天原は之を詩或は歌の文字として見れば、極めて面白い、品の高い文字であるが、之を事實の記載としては、如何にも解釋し難い文字である。私は古事記の筆者が、『タカマノハラ』といふ音に『高天原』の文字を當てはめた苦心と技能とに深く感服する者であるが、併し之を以て學究的欲望を満足することは出来な

5。

高天原を以て地上の高原と解釋することは私の素より反對せぬ所である。併しながらその高天原と歴史家の記したものを何故に地上の高原と解釋するか。之れには確實なる理由が無くてはならぬ。私は先づ其『タカマノハラ』といふ字音の意義から始めて研究して見たい。私は『タカマノハラ』の字音に當てるに『嶽間の原』の文字を以てしたい。之は元より研究上の便宜からのもので、吾等の祖先の詩的憧憬の對象を表示するには『高天の原』の文字がどれ程適當して居るか分らない。

併し、私が『嶽間の原』といふ文字を用ゐるに就ては研究上の便宜の外に尙ほ種々なる理由がある。私は『タカマノハラ』を以て小亞細亞ユウフラテス河上流の一點にありと信ずる者であるが、此地を指示するには『嶽間の原』といふ文字が適當して居るのである。抑もコウカサス地方、アルメニヤ地方に於て、高山をダク (Dagh) と稱したること、今日より之を想像することが出来る。例へばコウカサス連山の北方、カスピヤン海に面したる地方をダゲスタン (Daghestan) と稱し、又同連山南方にビンゲルダク (Bingolagh) と稱する高山あり、更にユウフラテス河の上流、ハランの都を北方に去る四五十里の地に、カラチアダク (Karadiahagh) のある如き、之を顯著なる例とすることが出来る。ダゲスタンは即ち山國の意、ビンゲルダクはビンゲル嶽の意なることを知らば、私がユウフラテス上流にありとする『タカマノハラ』を『嶽間の原』と書するも決して無理ではあるまい。或は『高』も『嶽』も其語原は一に歸するかも知れず、又、何れの文字を用ふ

るも意味には大なる相違なければ、説明に便宜なる文字を探るが最も適當とせねばならぬ。

然らば私は何故に此高天原がユウフラテス河の上流に在りとなすか。之にはユウフラテス及びチギリス兩河流域の歴史地理及び、同地方民族の状態等から説明して行かねばならぬが、複雑を避くるが爲に、茲には唯だ『高天原』といふ吾等祖先の神都を直示して置く。耶蘇教舊約聖書の創世記中に、ヘブリユウ人の祖先としてアブラハムの名がある。そのアブラハムが住居した國の名を『ハラン』又は『カラン』といふ。『ハラ』の國(或は都會)は即ちユウフラテス河の上流に位し、東はバビロン、ペルシヤ、印度、西は地中海諸地方、南方はオロント、ジヨルダン河を経て鑛業地たるシナイ山や埃及にまで達し得べき、交通の十字道頭になつて居た。私は此高原を以て吾等が祖先の地と見做したい。

一たび地圖を披けば一目瞭然たる此交通の十字交叉點にして而も一大高原たるハランは即ち天照大御神の知しめしたる高天原では無かつたか。即ち高山間に挟まれたハランの都を以て嶽間たけまの原はら(ハランをハラと變じて)と見なす事は出来ないか。佛領印度支那トシキンの東京を日本流に發音すれば『トウキョウ』と讀まれる如くハランの(Haran)『ン』の發音を變じ或は省いて『ハラ』或は『ハラ』と稱するは極めて尋常の發音法である。佛人が『n』の發音を省略すること多きは人の知る處である。例へば(monsieur)を『モツシユウ』とSiv(Lanennais)をラムネーと稱するが如き是れである。此く諸例を引き來る時は(Haran)をハラと稱

するも決して無理の釋解とは言はれない。

高天の原がアブラハムの故郷たるハランの都であると見なすべき理由は尙ほ多數の事項によりて説明することが出来るが、其は神代記の説明全部によりて始めて了解せらるべきものなれば、茲には詳説しない。茲には唯だ私が此地を以て古事記神代記の發生地と見なすに至れる動機を示すに止む。私は古事記の天津神が統治の目的とせられたる『葦原の中つ國』を以てチギリス、ユウフラテス双流の地方、即ちメソポタミヤなりと見なし、猿田彦神を以てカルデア民族となし、大國主神とはカルデアのオルクハム祖神とヘブリユウのアブラハムとを合せたるもの、その遠祖たる須佐之男命は波斯灣頭シユス國民の祖なりと考へ、須佐之男命の孫、刺國大神は同じくシユス國の首長たりしと信じ、思兼の神は其性格極めて基督教舊約書のモオゼに似たりとし、月讀命が統治すべく指定せられたる『夜の食國』オスケニとは高架索山中の『オス』民族の國と見なし、天照大御神はギリシヤの祖神ヘレス女神とカルデアの女神アスタロス(イスタル)とを合體せるものと信じ、大和民族は今より三千年前、アルメニヤの高原を下りてパレスチンの谿谷或はダマスの砂漠を通過し、ヘブリユウ人と混じつゝ遂に高千穂宮に定着したりと見なし、其高千穂とはシナイ山を其一部とするジエベル・エル・チフの事なりと信する者である。されば是等の論證によりてハランの地が大和民族最初の首都なりしことは餘り牽強附會せずとも自ら明示されるであらう。

更に一の重大なる論據は、大和民族の祖先は、今より三千五百年前に此地方に強大なる帝國を建て、四方に雄を揮ひたる『ヘト』或は『ヒツチト』民族であつたらうと云ふことは是れである。此ヘト國民が遺せる兩頭の鷲（私は此兩頭の鷲を以て彼のヤタ鳥なりと主張す）の石像は、近代史上に雄を揮ひたる獨、露兩武斷國の國章として採用せられたのである。小亞細亞山嶽地方、カパドス地方には今日尙ほ同民族石屋生活の跡を存すといふ。而して其石屋生活の跡と、古事記の天の岩屋戸の神話とを對照すると自ら合點されることが多い。尙ほ之に就いては、詳細なる説明を要する。

私は高天の原をユウフラテス河の上流『ハラン』の都であると論定したが、併し古事記の記事は多く口傳の説を修飾記録したもので必ずしも明確では無い。亦た太古の人民が其移動するに従て民族の崇拜點たる高天の原も度々移轉したかも知れない。最初の高天の原は更に北方或は西方の山間であつたかも知れない。或は更に東方に遡つて、パミール高原であつたかも知れない。

三、夜の食國

夜の食國は天照大御神の弟月讀命の統治國として指定されたる國である。私が歐亞漂浪中携へ持てる『古事

記讀本』の著者は之に註釋して曰く、『ヲス國とは御孫命の知しめす此天の下をすべるといふ稱にしてヲスはもと物を食ふことなり、楮、物を見るも聞くも知るも食ふも皆他の物を身に受入るといふ意ゆゑに……君の御國を治めたもちますを知らずとも、をすとも、聞しめすとも言ふなり』と。然しかく解する時は『汝命は夜の食國をしらせ』との神語は意味をなさず、知らず國を知らせ、と言ふことになりて、同語を重疊せる拙劣なる語句とならん、私は此『ヲス國』を以て當時コウカサス山中に生活せる『ヲス人の國』と解釋したい。地理學、社會學の泰斗エリゼ・ルクリュは此コオカサスに就いて記して曰く『人類歴史の起原より、キヤスピヤン海とユクセン橋（黒海の事）との中間の山脈は南北兩面によつて全く反對せる性質を現した。即ち南面は文化光明を表し、北面は野蠻暗夜を徵表した。』而して此山中に於けるオス人に關して曰く、『歴史の起原よりして、自らイロンと稱するオス人が此山脈の横斷點（即ちクラ河とテレス河の兩水源の接近せる地點）に強固に定住し、出入兩面の進口を占領したることは、疑無しとせらる。』此山間の國が太古に於て夜の國と呼ばれたると、古事記の『夜の食國』の語とを参照すれば自ら合點することが出來やう。此ヲス國人は古事記神話に重大なる地位を占めて居らぬ故茲には右の説明にて充分である。唯だ此民族が如何にしてユウフラテス河源の高天の原と交通せしかは一言せねばならぬ。歴史家の研究によると此民族は商業仲介を以て其職業となし、此民族の仲介によりて高架索地方と西北方遙かに隔てたバルチック沿岸地方との間に古代より規

律ある貿易が開かれて居たとのことである。されば此民族がアルメニヤ山間の高天原の民族と交通せるのみならず、其統御の目的となつたことは之を推察することが出来る。

四、葦原の中ツ國

高天の原の天津神等が統治せんとした最大目的地即ち約束の地は葦原の中ツ國であつた。而して其葦原の中ツ國とは即ち今日世界第一に豊饒の地と稱せらるゝメソポタミヤであると私は信ずる。今回の世界大戦に際して英軍は波斯灣より攻め上つたのであるが、高天の原の大和民族はユウフラテス河の水源地から征下したのである。何故に葦原の中ツ國をメソポタミヤと見做すか。第一に葦の繁茂した廣原にして而も二河に挟まれたる中ツ國は日本には存在しない。第二にチグリス河とユウフラテス河との流域は世界最古の穀物耕作地であつた。埃及の如きも此メソポタミヤより遙かに移住し來れる民族により穀物耕作法を學んだらしいと歴史家は言ふ。第三はメソポタミイといふ希臘語の語意が又中ツ國の意に合致する。即ちメソは其中間の意、ポタミイは水流の意にして、中ツ國といふ語はメソポタミイと言ふ希臘語と一致するのである。第四、此メソポタミヤは太古以來地上のパラダイスとして四方の民族の野心の目的となつたこと史蹟の明示する所であ

る。葦原の中ツ國は即ち今日の英國民が必死の努力を以て占領せんとするチグリス、ユウフラテス兩河の流域であつたといふことには何人も反對することは出来ぬであらう。メソポタミイの語は希臘語ではあるが此兩河の流域を中間國と呼ぶ習慣は既に太古より同地方人間に普及して居たに相違ない。而して希臘人は其地方人の慣用名稱を其儘採用したのであらう。今より六七千年前に此地方に住居せしスメル人は、此地を『ケンジ』と呼んだ。『ケンジ』とは溝と葦との國といふ意味だと學者は言ふ。そして其『ケンジ』は之を日本の優雅な發音法に従へば『ケニ』となり、『ケニ』は直ちに『クニ』と變化する。そして此『ケニ』は即ち『國』の語源をなしたるものであらう。『水穂國』の名稱も亦是から出來たに相違ない。されば私がカルデヤ人と見做す所の猿田彦神やアツシリヤ國都たりしシユスの祖神と見做す所の刺國大神が、此葦原の中ツ國より出でたるは當然である。チグリス河畔のニニヴの都には有名なるサルダナルといふ王様さへあつた。チグリス河に近きシユス（或はスサ）の都を中心としてアツシリヤ帝國は四方に雄を振つた。而して日本に渡來して一新王國の建設を企てたる天津神達が果して直接に是等の諸國と交渉したのか、或は唯だ其傳説を傳へたのみか此點は明白では無いが、兎に角、神代記の記事に葦原の中津國と稱するはメソポタミヤのことであると、猿田彦神はカルデヤ人のこと、大國主神の父、刺國大神がシユスの祖神なるべしとの推定は、疑を挟むの餘地が無からうと思ふ。

五、出雲の國

出雲の國は須佐之男命の結婚地、『八雲立つ』といふ戀歌の地である、が實際何れの地であつたらうか。須佐之男命は天照大御神と御兄弟であつたが、高天の原を去られて出雲の國に渡られた。此出雲の國は後に大國主神の居所となつた。而して其時代には高天の原民族との間に種々なる交渉が行はれ、前者は後者を懐柔する爲に随分苦心したらしい。須佐之男命が須賀の宮を建てたる、又、其後裔たる大國主神の住所たりし出雲の國は、少くとも高天の原民族の目的地たりし葦原の中つ國と接近して居たに相違無い。私は大國主神の父神たる刺國大神を以て『シユス』國の首長と信する者であるが、其シユス(スサ)の都はケルカ河(チグリス河に投合する)の沿岸にある。太古に於ては、波斯灣が此シユスの都まで達して居たとのことである。而して『大國主神、出雲の大の御前ミサキに坐す時に、波の穂より天之羅摩船に乗りて……歸來る神あり』(古事記)との記事に徴せば、出雲は海邊を占めたる國であつたに相違無い。又、『天鳥船神を建御雷神に副へて……出雲國の伊那佐之小濱に降到て云々』とあるも同様の想像をなさしむる。そこで私は是等種々なる記事を綜合參照して之を波斯灣の邊りに求めた。然るに猶太創世記の地圖に依りて、アラビヤ國ペルシャ灣口なるオマン

半島に *Seha* の地名を發見した。(Seha) 或は (Sabean) 人の名を採つたのかも知れぬと思ふたが、併しサベアン人の地は南方にサバとして表示されてある。そこで私は直に合點した、是れぞ須佐之男命が詠じた『八雲立つ』出雲の國である。と云ふのは、*Seha* はアラビヤ語の *Shaha* 即ち雲と同語であらうと考へつたからである。現にアラビヤ語の *Saba* は創世記の *Saba* 或は *Saba* と實際差別無く耳に響く。アラビヤの大部分が大砂漠を成して常に乾燥を極むるに對し、此オマン半島及び紅海と印度洋とに挟まれたるアデン半島の地は、印度洋ムウスン風の持ち來る雲霧によつて毎日午前中は地上を浴すると云ふ。さればアラビヤの住人は此雲霧を以て天來の恵として崇め尊ぶのである。日本最初の詩歌たる須佐之男命の戀歌にも彼が如何に其地を包み圍める雲霧を嘆美したか、想像される。メソポタミヤの沃地を去りて、乾燥を極むる砂漠を眺めつゝ漸く此オマン半島に辿り着き、測らずもアグダル山の綠葉に烟れる様を望み見たる時、我が心すがしと叫んで遂に茲に須賀の宮を建つるに至れるは眞とに須佐之男命の雄大なる生活であつた。尙ほ太古に於ては、オマン半島の突角はペルシャの地と接壤して居たかも知れない。そして出雲とは此ペルシャ灣北岸一體をも含んで居たかも知れない。

オマン半島と砂漠地方とを遮斷して北半島を保護するジェベル・アグダルの名は甚だ意味が深い。ジェベルはアラビヤ語の山にして、アグダルは即ち青緑の意である。大國主神が其協同者たる少名毘古那神を失ひ

哀傷に沈める時『海を光らして依り來る神あり、其神言ひ給はく、御前みまへを能く治めてば吾共與に相作り成てなん……吾をばも、倭の青垣東山の上に伊都岐奉れと言ひ給ひき、『古事記』此青垣東山あながきひかのやまこそ實に今日アラビヤ人の呼ぶジエベル・アグダルでは無いか。即ち其名稱が『青緑の山』なると同時に砂漠地方に對する乾燥防禦の垣をなし、又當時の其國に於ては之が東の地であつた。

六、根之堅洲國及高志國

須佐之男命は『海原をしらせよ』と命ぜられたが之を好まず、母の國たる『根之堅洲國に罷らむと欲ふて』哭いたと云ふ。又大國主神は兄弟の争議にて難境に陥りし時、祖神の告げに隨ひ、須佐之男命の坐ます根堅洲國に到りて其助力を求めたとある。此根之堅洲國とは何れの地であらうか。之を出雲の國と同一視する事は勿論出來ない。大國主神の一族は當時、波斯灣沿岸からメソポタミヤの下部地方を占領して居たと思はれるが、堅洲國は之より遙かに隔たりたる所と思ふ。『古事記讀本』(加藤高文著)の註釋には『根は下つ底にあるを云ふ、カクス國は片隅國の意なり』とある。是れは極めて曖昧な解釋といはねばならぬ。根は下つ底にあるといふは可として、カクス國を片隅國とのみ解したのでは何れの方向の片隅なるや不明である。高天の原から見

て根の國といふは何れにしてもアルメニヤ山の下方に位すること勿論である。然るにこのアルメニヤ連山は極めて廣大に跨り居れば堅洲國の地位を定めるのが甚だ困難である。唯だアルメニヤ山の南方は一體にユウフラテス及びチグリス兩河の流域を成して之を葦原の中つ國と稱する以上は、堅洲國は他の方面に位するものと見ねばならぬ。さて私が高天の原民族として指定する『ヘト』或は『ヒツチト』民族はセム人種でもアリアン人種でも無く、タルタルか或はモンゴル民族に屬するとの事である。要するに古代の文明人が呼んでトゥラニヤン民族と名くる總稱中に含まるべき人種であつた事と思ふ。而して此民族の大部分が中央亞細亞から起り、カスピヤン海の東岸を傳ふて或は波斯高原に出で、或はアルメニヤ高原を過ぎて小亞細亞まで進入し、かくて到る處にアリアン人種、セミチツク人種と接觸して、茲にカルデア文明を醸成したのであらう。されば須佐之男命の母の國といふは此トゥラニヤンの國といふ意味になるであらう。而して根の堅洲國とはカスピヤン海の東北方の國を指す事になる。かうなると堅洲國の語が活きて來る。元來西部シベリアの地は太古の時代には堅氷を以て蔽はれて居たといふ。其堅氷に蔽はれてる地を茲にカクス(堅氷)國と稱したので、古事記の記者が之を堅洲國と記したのは極めて巧妙な用字法であつたと思ふ。アルメニヤ地方に於ては河川の普通名詞に『ス』の音が用ゐてある。倒へばユウフラテス河の上流を『カラス』と呼ぶ如き其一例である。(註)

(註) カラは黒、スは水又は河の意なり

要するに古事記の堅洲國といふは堅氷に蔽はれたる國の意にて、南西部西伯利亞の地を指したものであらう。併し大國主神が訪問したる須佐之男神の住所が果してシベリヤであつたかと言へば其れは如何かと思はれる。又強ちかく解するの必要は無い。祖先傳來の傳説によりて昔時住居せる方向を指して一體に堅洲國と稱したかも知れない。コロムブスは、亞細亞の印度に到達した積りで亞米利加の地を印度と稱した。高天の原も天の安の河原も幾ヶ所もある如く、堅洲國の地位も變じて來たであらう。そして大國主神が訪問した所は波斯の高原邊になつて居たかも知れない。

高志國は越の國だと古事記讀本の註解にある。『越』の文字は最も適當して居ると思ふ。然し前段からの解釋に準じて行くと、其越の國は決して日本の越前越後等の地方では勿論無い。古事記讀本の註解(高藤高文氏著)に『高志國は越國なり、後に越前、加賀、能登、越中、越後など、分れつれど歌には猶なべて越とよむなり』とあるは、日本國土の事としては了解できるが、古事記神話の解釋としては合點が出来ない。そこで私は高志國の所在を葦原中國即ち今のメソポタミヤから根の堅洲國の方向に達する道筋に於て搜索した。そして私はバビロン帝國と中央亞細亞との唯一の交通關門なるザグロスの關近傍一體の山嶽地方に於て之を發見した。波斯灣北岸よりチグリリス河東岸に沿ふて幾重とも無く皺波を成せる大連山がある。地圖には之をザグロス山脈と記してある。ザグロは即ちアラビヤ語のザガルより由來し、其のザガルとは、即ち谿道の意味

だといふ。此山岳地域に太古より引續いて住する人民をコセと稱する。バクチアリと稱せられるのも亦同一民族であらう。歴史上此コセ人は或はカルデア或はアッシリヤ或はエラミット或はベルシャに從屬したが併し其れは唯だ名義上のみであつた。何れの主權者たちも唯名義上の統治のみにて其虚榮心を満足せざるを得なかつた。而して此自然の城壁重疊せる地方には曾て攻入することが出来なかつた。其れのみならず、彼の波斯王アケメニデス王朝の最盛最強の時代に於てすら、其ユクハタンからバビロンに到り、ペルスポリスカラシユスに到る場合には、何時も此コセ人に通行料を支拂はざるを得なかつた。實に此コセ地方を越すことは單に自然地理上に於て難關たりしのみならず、社會的に又一難關であつた。されば此難趣のコセ人國に與ふるに『越』の字を以てし、之をコシと發音するのは眞とに正當なる順序である。古事記讀本の註釋が高志は越なりと言へるは此點に於て結構至極である。此く考證して來ると、越の國は出雲と堅洲國との中間に位し、八千矛の神即ち大國主神が高志の國に沼河比賣を訪ひたるは即ち其堅洲國訪問の時に際してのことであることが了解される。此高志國に就ては別に第十二章に於て説明する。

七、高 千 穗

高千穂の峰は倭民族の生活に一新紀元を劃せる所なれば、歴史研究の上には重大なる意味を有する。然らば其日本歴史上に最も神聖なる意義を有する高千穂は何れの地にあるか。私は之を搜索する爲に、天孫民族が岩窟生活を経て、猿田彦神を案内者として高千穂に到着するまでの道筋を考へて見た。是に關する古事記の記事は極めて簡單である。『故爾に天津日子番能ニギノ命、天の石位を離れ、天の八重多那雲を押分けて伊都の知和岐ちわきて、天の浮橋に、うきじまり、そりたゝして筑紫の日向の高千穂のくじふるだけに、天降りましき。』古事記の記事はかく簡單であるが、併し實際此旅行に費したる時日は數十或は數百年に達したであらうと思ふ。私は今此旅行を、彼の『ヘト』民族（ヒツチト民族）移住の跡に依りて考照して見たい。今より三千五百年前、ユウフラテスの上流シリヤの高原を中心として四方に雄を揮ひたるヒツチト民族は埃及、アツシリヤ兩強國より挾撃せられて滅亡するに至つた。之に就いて碩學エリゼ・ルクリュは曰く『埃及人の壓迫を受けて、既にシリヤの優勝者たる地位が動搖し初めた時に、彼等は更に他に恐るべき隣國アツシリヤの襲撃に遭ふた。而して數世紀間に亘れる其防禦は彼等を甚だしく疲弊せしめた。そしてカルケミシンの都（ユウフラテス上流の沿岸にあり、ハラン市より遠からず）の陥落を以て其國民的生活は最期を告げた。此争亂はメソポタミヤとシリヤ海岸とに住する兩セム民族間の商業を全然遮斷するに至つた。さればアツシリヤの諸王は其最大の希望としてユウフラテス上流の歴史的大通路を自己の利益の爲に開通する必要があつた。かくて今より二十六世紀以前、此ヒツチト民族は全然頽廢した。其勢力は永久に破壊せられ、其民族は或は服従し、或は遠方に散亂するに至つた。既に之に先つて、彼等の一團はアモレの國（パレスチンの南方、死海に近き處）の南方に其避難所を求めヘbron山の邊りに定住するに至つた。かくて、イスラエルの子孫と交渉を生じ、更にユダヤに滞在し土着の民と混血して漸くセミチック化し、かくてゼルサレムの建設にヘブリユウ人と協力するに至つた。』(註)

(註) 地人論第二卷三四頁

以上の記事は私が天孫民族の祖先と見做す所のヒツチト民族の旅行の道筋を示したに過ぎない。日本に渡航して新帝國建設に著手した一團體は今（一九二一年）より三千三百八年前のカデク戦争（埃及との）以前に既にシナイ半島に達して居たかも知れない。尙ほ別章に詳説する。

古事記の記する處は極めて簡單であるが、之をルクリュの記する『ヒツチト』移住の事實と参照すると自ら其光景が想像される。カパドシヤの天の岩位を離れ、シリヤの高原を棄て、八重多那雲を押分けてオロントの谿流を攀ち、シオルダンの沿岸を辿り、天の浮橋即ち死海を航海して漸くシナイ半島アカバ灣頭に近き日光輝やく暖かい地に着いて、茲に其居を定めたのであらう。ヘロドタスの『歴史』には黒海をユクセン橋（Pont Euxin）と記してある。天孫民族が最初小亞細亞に住する時に、天の浮橋と稱したのは黒海の事かも

知れない。併し彼等がパレスチンを旅行するに當つては、天の浮橋と稱すべきは死海の外に無い。かくて此浮橋を渡航して彼のシナイ半島を形成する『く』の字形の連山を據城と定めた。此『く』の字形の連山を私は高千穂の峰と認めるのである。今日アラビヤ人は之をヂェベル・エル・チフ(Diebal el th)と呼ぶ。ヂェベルは即ち山、エルは冠詞、チフは即ち山の固有名詞である。之を倭民族流に呼稱すれば即ち『タカチフ』となるのである。再言すれば、アラビヤ語のヂェベル・エルを取り除いて、其と同意義の『嶽』(音便法によつてタカと變ず)を代用すると即ち『タカチフ』の名が出て来るのである。

併し右の道筋はエリゼ・ルクリュがヒツチト民族に關して記せる處に準じたのである。古事記に依ると山を降りて直ちに海に出で、地中海を渡つてシナイ半島に近い海岸に着いたとも解釋が出来る。『伊都の知和岐ちわきて』はイススの地を分け出でてイスス灣(註)から乗船した事とも解せらる。

(註) 後にアレキサンドル灣となる。パレスチンの北方、アマニユス山の西北にあり

さうなると『天の浮橋』は地中海のことにならねばならぬ。かく解すれば其道案内者たる猿田彦神の歸り着くべき處は此イススの地で無ければならぬ。日本古來の解釋は猿田彦神の故郷を伊勢の國とするが、其のイセは即ちイススの地、イスス灣と酷似する。イススの北方、黒海沿岸の地を太古の世にクマヌと稱したるも古事記の熊野と思ひ合はされて面白い。亦此イススの港には既に多數のカルデヤ人が來住して居たに相違

無い。カルデヤ人は既に伊太利の西方に移民して居た。今日のサルデニヤは即ち其れである。サルドはカルドと同語である。サルデニヤとは即ちカルデヤ人の植民地なることが分る。そのサルドの猿田彦神が天孫降下の案内者となつたのである。

右の如く、我天孫民族移住の道筋に關しては二様の解釋が出来るが、何れにしてもパレスチンの海か陸かの差に過ぎない。そして其到達せる地點はシナイ半島であつた。こゝに高千穂の宮が築かれたのである。是れ今日此山をアラビヤ人がヂェベル・エル・チフと呼ぶ所以である。高は嶽と同語或は同意義にして即ち之をアラビヤ人がヂェベルと呼び、千穂の固有詞に冠詞を添へて之をエル・チフと呼びたること既に述べた通りである。其地理的關係は更に後の説明によつて一層明白になるであらう。

八、笠沙之御前

笠沙之御前は天孫民族移動の形勢を知るに尤も重大なる關係を有する。古事記の記事によると倭民族は高千穂から更に笠沙之御前まで旅行して居る。但し初めて高千穂に宮居せしニギノ命に次ぎ、日子穗々手見命はこゝに五百八十年留まつたとある。されば笠沙之御前と高千穂の峰との間には常に交通はあつたが、本

據は矢張り高千穂にあつたらしい。然らば此『カササの御前』とは何處であるか。古事記はこゝに脊肉韓國を笠沙之御前に眞來通りて、詔りたまはく、『此地は朝日のたゞさす國、夕日の日てる國なり。故此地ぞ甚吉き地と詔り給ひて云々』とある。脊肉とは何の事か私は知らない。韓國は空虛國の意だと古事記讀本には註してある。空虛國の解は甚だ面白い。併し私は更に實際的具體的に解釋して、之を不毛砂漠の國と考へたい。アラビヤの大砂漠の火山岩で蔽はれたる部分を『ハラ』と稱するが、其ハラをカラと發音するはセミチツク人の常習である。例へばアブラハムの故郷ハランの都をカランと發音する如き是れである。亦現にアフリカのアラビヤ人は砂漠をサハラ或はクラと呼ぶ。然らばシナイ半島を立ちてカラ國即ち砂漠を直過して到達すべき崎は即ち彼の紅海の入口、バベルマンデブの邊で無ければならぬ。即ちかの植物及び礦物に甚だ富みて古來『幸のアラビヤ』と稱せらるゝ地方に之を求めねばならぬ。此に於て私は『カササの御前』の文字に就いて考へた。そして計らずも其『カササ』といふ文字の解によつて茲に此崎を發見すべき手掛りを得た。是は『カササ』に笠沙の文字を當はめた爲に頗る難解の文字となつたのである。私が所持する唯一の参考書たる古事記讀本には一語の解釋をも付せず黙殺してある。然るに私は今アラビヤ人のモロッコ國に旅行の故か、此文字をアラビヤ流に讀む事に氣が付いた。そして『カササ』の『カ』を『ササ』と引離して見た。すると此『カ』は即ちアラビヤ語のカツ或はシャト、佛語のコオト、日本の潟にて、海濱を意味することが分

つた。又『ササ』はアラビヤ語の『サド』即ち幸を意味することが分つた。アラビヤ語の『サド』或は『サダ』(サドの女性名詞)と日本語の『サチ』(幸)とは語源を同じくすると私は信ずる。そして古事記の『カササ』は即ち『幸の濱』といふ意味であると思ふ。『カツ』が他の語と合して一語を成す爲に『ツ』を省略され『サダ』が『サザ』或は『ササ』と變じて茲に『カササ』の語が出来たのである。『カササ』の崎を『幸の御前』と解する時は、是を世界文明史上バビロンや埃及と同様に重要な地位を占むる『幸のアラビヤ』と見做すことは決して不思議では無い。處が更に私は喜ばしい一事を發見した。それは『幸のアラビヤ』の一角即ちアデン崎の隣にシェイク・サイド (Cheik said) といふ崎の存することである。其シェイク・サイドとは『幸の長』といふ事である。サイドはサドと同意義で唯だ前は形容詞、後は名詞たるに過ぎない。此幸のアラビヤの『幸の長』こそ其昔『幸の御前』(カササの御前)と稱した處では無いか。實に『朝日の直さす國夕日の日てる國』と稱するに相應しいでは無いか。此『幸の御前』を『此地ぞ甚吉き地と詔り給』うたのも亦道理では無いか。

更に『カササの御前』が紅海の邊にあるべしとする他の一大理由がある。ニニギの命が『カササの御前にて木花咲哉姫と婚し、皇子穗々手見命を擧げたが、其穗々手見命が上つ國に出幸まさむとするに當り、之れを送り奉りたる者は、即ち一尋ワニであつた。此の話は甚だ伽話の様に聞えるが、併し研究者の爲には重大

な證據である。蓋しワニは當時の世界に於て紅海岸か印度洋の外には存在しなかつた。又其ワニの名はカルデヤの傳説にある魚神（船舶の守護神）エヤ・バニから出て居ると思ふ。又『其ワニ歸りなむとせし時に佩せる紐小刀を解かして其頭につけてなも返し給ひける故、一尋和邇をば今にサヒ持の神とぞいふなる』（註）と古事記にある。そして其サヒは劍であると註解してある。私は又此サヒの文字がアラビヤ語のシュフ即ち劍と同語原をなして居ると思ふ。カササの崎が高千穂即ちシナイ半島から砂漠を直過して達する所なること、ワニが紅海岸或は印度洋の外には生存せぬ事實、ワニの名がカルデヤの傳説から出たこと、又其ワニの副名をサヒ持と呼び其サヒは即ちアラビヤ語のシュフなること、等の理由を綜合すると、『カササの御前』が幸のアラビヤ（古名）の突角なる『幸の長』御前であるといふことは、蓋し當らずと雖も遠からずである。其『カ、ササ（或はサダ）』の崎が天孫民族の移住と共に日本に到着して、大隅の『佐多の岬』が出来たのである。

（註）古事記讀本七六頁

九、筑

紫

天津日子番のニギノ命の移住記にある筑紫の日向の高千穂がシナイ半島のチフ山であること既に述べた所である。然らば何故に此地方を『ツクシ』と呼んだか。古事記に特に筑紫の日向と記したるは深く注意すべきである。私の意見では『ツクシ』は『對クシ』である。紅海の兩岸に相對して住居したる『クシ』民族のことである。舊約聖書創世記によるとノアの子にセム、ハム、ヤベテの三子あり、其ハムの子にクシだのミツライムだの、カナンだのといふ子供があつた。而して創世記の記事に徴すると此クシ民族は紅海の兩岸に住居してゐた。ラルウスの辭典によると『ヘブリユウにてはカウシュウ (Kaoushou) 或はクシュウ (Kou-shou) と稱す。其人種はセミト或は印度歐羅巴人に酷似す。今日に於ては、埃及人、下部ヌビイのバルブラス人、アビシニヤ人、チュニジイ及びトリリポのベルベル人、カビル人及びモロッコ人等は蓋し之を代表する。』されば古事記の傳説が高千穂の峰、日向の國のあるアラビヤ及びアフリカの一部を筑紫即ち『對クシ』と記したのは、之を舊約聖書の記事と相照して當時の住民の分布、移動を能く説明するのである。而して此筑紫の名は倭民族が今の九州に到着すると同時に茲に上陸土着したのである。